

広島県道徳教育指導資料



地域教材開発の手引



平成22年3月

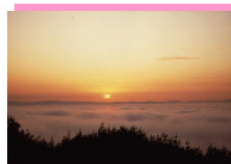
広島県道徳教育指導資料作成委員会
広島県教育委員会

〔表紙の写真〕

恐羅漢（芸北地域） →



← 雲海（備北地域）



紅葉谷（安芸地域） ↑



↑ しまなみ海道（備後地域）

は　じ　め　に

近年，核家族化や少子化，地域社会のつながりの希薄化が進む中，子どもたちの成長の糧となる生活体験や社会体験の機会が減少するとともに，子どもたちの基本的な生活習慣の乱れや他者への思いやり，生命尊重の心，自制心，規範意識，人間関係を形成する力の低下等の傾向が指摘されており，道德教育の一層の充実が求められています。

県教育委員会では，これまで，県内すべての子どもたちの「心の元気！」を育てるために，実践研究校を計画的に配置し，道德教育推進のネットワークを拡充するとともに，各市町が主体的に道德教育を推進するためのリーダーを育成してきたところです。

こうした中，平成20年3月に改訂された小・中学校学習指導要領では，改正教育基本法等を踏まえ，道德教育の目標の改善が図られるとともに，道德の時間の要としての役割の明確化，児童生徒が感動する魅力的な教材の充実，道德教育推進教師を中心とした体制づくりなど，多様な角度から道德教育の充実・改善が図られました。

このため，県教育委員会では，新学習指導要領やこれまでの事業の成果を踏まえ，平成21年度から「新学習指導要領対応事業」の一環として「心の元気を育てる道德教育充実事業」を実施し，地域の身近な素材を活用し，子どもたちの心に響く道德の授業が行えるよう「広島県道德教育指導資料」の作成に取り組んできました。

本書は，その第一部にあたる地域教材開発の手引であり，「先人の伝記」「自然」「伝統と文化」「スポーツ」を題材とし，地域の素材を活用して教材を開発するための手順（例）や事例等を掲載しています。

道德の時間における教材は，子どもたちが道德的価値の自覚を深めていくための手掛かりとして極めて大きな意味をもつものです。

ぜひ，本書を生かして地域の素材を活用した魅力的な教材の開発に挑戦し，子どもたちの心に響く道德の時間の授業を創造していただくことを期待しています。

最後になりましたが，本書の作成にかかわり，御指導いただいた多くの先生方，また，御尽力いただいた道德教育指導資料作成委員会委員及び分野別作成部会員の皆様方に対し，心から感謝を申し上げます。

平成22年3月

広島県道德教育指導資料作成委員会
委員長　藤田　美佐子

目 次

はじめに

広島県道徳教育指導資料―地域教材開発の手引―の活用にあたって	1
I 広島県における道徳教育推進の概要	2
II 地域教材の開発にあたって	5
1 学校における道徳教育	5
2 道徳の時間における指導	7
3 道徳の時間における教材の開発	8
(1) 道徳の時間における教材	9
(2) 教材の開発と活用の創意工夫	9
(3) 地域を素材とした教材の開発	11
(4) 教材の開発と「著作権」	13
III 地域教材開発の手順(例)と実際	14
1 地域教材開発の手順(例)	14
[参考] 構成チェック票(例) 四コマ場面絵	
2 分野別の特色に応じた教材開発	19
「分野別の特色に応じた教材開発」の見方	
(1) 先人の伝記	21
教材開発のポイント	
教材開発例1:「わたしが行かねば」 小学校中学年	
教材開発例2:「夢やロマンを追い求めて―彫刻家 圓鋳勝三―」 中学校	

(2) 自然	39
教材開発のポイント	
教材開発例1：「恐羅漢」 中学校	
教材開発例2：「時をおよぐクジラ」 小学校中学年	
(3) 伝統と文化	55
教材開発のポイント	
教材開発例1：「みぶの花田うえ」 小学校低学年	
教材開発例2：「 ^{ひゃくしせんかい} 百試千改の夢」 小学校高学年	
(4) スポーツ	71
教材開発のポイント	
教材開発例1：「 ^{くりはらめぐみせんしゅ} ゆめにむかって一栗原 恵 選手のゆめー」 小学校中学年	
教材開発例2：「強いものは美しいー日本人初の金メダリスト 織田幹雄ー」 小学校高学年	
3 発達の段階に応じた教材開発	88
(1) 児童生徒の発達の段階に応じた道徳性の育成	88
(2) 発達の段階に応じた教材開発の考え方	91
(3) 発達の段階に応じた教材開発の実際～「ホタル」を素材として～	93
教材開発の構想	93
各学年段階の開発教材	94
小学校低学年：「ほたるのげんちゃん」	
小学校中学年：「ぼくはこん虫はかせ」	
小学校高学年：「きれいな川のままで」	
中 学 校： ^{ともしび} 「螢の 灯」	

作成協力者一覧

引用・参考文献

広島県道徳教育指導資料－地域教材開発の手引－の活用にあたって

本書では、地域教材の開発にあたって、基本的な考え方を基に、先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツの四つの分野ごとに教材開発のポイントと開発事例を、また、発達の段階に応じた教材開発の事例等を掲載し、各市町・学校において、地域教材を開発する際に活用できるように編集しました。

I 広島県における道徳教育推進の概要

これまでの広島県道徳教育推進の取組経過及び現状と課題等をまとめています。



II 地域教材の開発にあたって

地域教材の開発にあたって、学校における道徳教育の推進や道徳の時間の指導の考え方を整理しています。また、地域の素材を活用した教材開発の考え方や留意点を記載しています。



III 地域教材開発の手順（例）と実際

1 地域教材開発の手順（例）

地域の素材を活用して教材を開発する手順（例）と手順ごとのポイントについて、四つの分野（先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツ）に共通するものを記載しています。

2 分野別の特色に応じた教材開発

分野ごとに、ポイントとして考えられるものを取り上げています。また、そのポイントに沿って作成した教材開発例を分野ごとに2事例を紹介しています。教材開発例1では、素材の収集・選定から読み物資料の作成における具体的な教材開発の経過を紹介しています。教材開発例2では、教材開発の概要を紹介しています。（※教材開発例の見方等についてはp. 19～p. 20参照）

3 発達の段階に応じた教材開発

児童生徒の発達の段階に応じた教材開発の考え方と「ホテル」を素材とした教材開発例を紹介しています。

I 広島県における道徳教育推進の概要

〔広島県道徳教育推進の取組経過〕

県教育委員会では、平成10年に当時の文部省から、道徳の時間の名称が「人権」と表示されたり、指導内容が学習指導要領の趣旨を逸脱し、適切でなかったりなど、教育内容や学校の管理運営において、法令等に照らして逸脱、あるいはそのおそれがあるなど不適切な実態があるとして是正指導を受けた。本県では、この是正指導以降、県内すべての子どもたちの「心の元気！」を育てるために、道徳教育の充実を図る様々な施策を展開してきた。

○豊かな心を育むひろしま宣言

平成14年度には、広く県民が力を合わせて道徳教育を推進する気運の醸成をめざすとともに、県教育委員会としても積極的に道徳教育の推進に取り組むことを宣言する「豊かな心を育むひろしま宣言」（図1）を発信した。

○広島県道徳教育実践研究指定事業（平成14年度～平成17年度）

小・中学校における道徳教育を進めるための学校体制の確立と道徳の時間の指導改善を通して本県道徳教育の充実を図るため、「広島県道徳教育実践研究指定事業」を実施した。平成14年度から平成17年度までの四年間で、県内全域に合計60校（小学校32校・中学校28校）の実践研究校を指定した。

本事業により、実践研究校では、道徳の授業改善が進み、「道徳の時間が楽しい、ためになる」など、道徳の授業を大切だと考える児童生徒が増えるとともに、暴力行為やいじめなどの問題行動も減少するといった効果も見られた。また、実践研究校に地域拠点校としての役割を担わせた結果、実践研究校周辺地域の学校を含めた協議会が組織され、近隣の学校でも道徳教育の研究が行われるようになった。さらに、平成18年度には県内すべての市町に道徳教育推進協議会等が設置されるなど、各市町が主体的に道徳教育を推進するための基盤が整備された。

○心の元気を育てる道徳教育推進リーダー養成事業（平成18年度～平成20年度）

平成18年度からは、各市町が主体的に道徳教育を推進できるよう、各市町道徳教育推進協議会等を支援するための「心の元気を育てる道徳教育推進リーダー養成事業」を実施し、「道徳教育推進リーダー養成プログラムの実施」と「広島県道徳教育推進連絡会議の開催」に取り組んだ。

本事業により、県内全市町計72名の推進リーダーの専門性とリーダー性の向上を図ることができた。また、各市町道徳教育推進協議会等では、道徳教育推進リーダー養成プログラム受講者が、研修会の

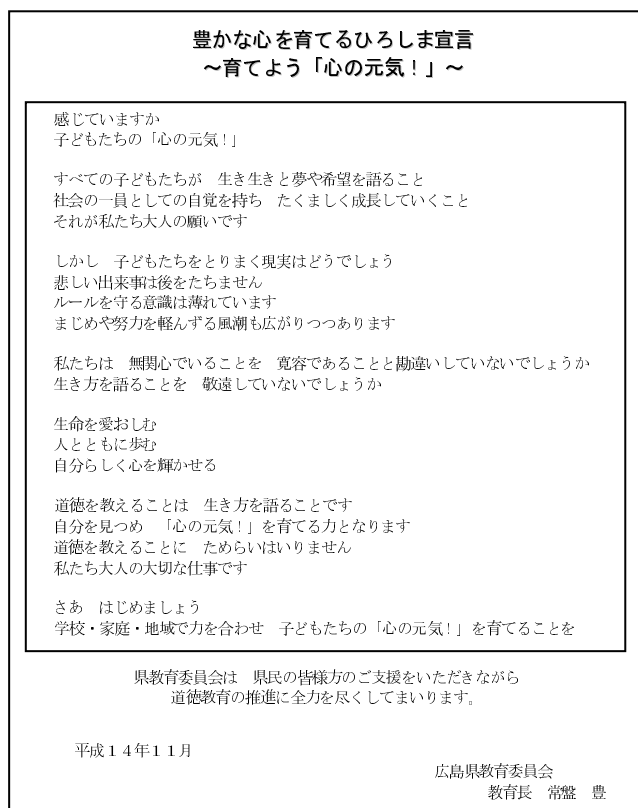


図1 豊かな心を育むひろしま宣言



企画・運営や模擬授業・演習などの研修講師として中核的な役割を担い、各学校の指導体制の確立や授業改善につながる研修の充実が図られ、各市町の道德教育推進体制が確立された。

○「心の元気！」1000人フォーラムの開催

平成16年度から道德教育関係指定校における取組の成果を県内すべての小・中学校等に普及させ、本県道德教育の一層の充実を図るため、県内すべての公立小・中学校の道德担当者等約1000人の参加を得て、「『心の元気！』1000人フォーラム」を開催している。フォーラムでは、実践報告、模擬授業・演習や講演などを実施し、道德担当者の指導力の向上を図るとともに、平成17年度からは保護者や地域の人々の参加・協力も得て、地域全体で道德教育を推進する重要性を発信する場としている。

〔広島県道德教育推進の現状〕

○市町道德教育推進協議会等の活性化

平成18年度に設置された各市町道德教育推進協議会等は、年度を追うごとに開催回数が増え、平成20年度には1市町平均7.3回開催されるようになっている。（表1）また、研修方法も模擬授業や演習など、実践的な研修の工夫が見られ、協議会等の運営の活性化が図られてきた。

項 目		平成18年度	平成19年度	平成20年度
開催回数（23市町合計）（回）		153	153	170
実践的な研修の実施	模擬授業（市町）	7	11	13
	演習（市町）	12	20	19

（表1）市町道德教育推進協議会等の開催状況など

○道德の時間の授業公開等の状況

道德の時間の授業公開の実施（図3）については、小学校はほぼ全校で、中学校は、8割弱の学校で、道德の時間の授業公開が実施されるようになってきている。

しかし、授業公開後の懇談会の実施（図4）については、小・中学校全体で5割にとどまっている。今後一層、学校・家庭・地域社会が連携した道德教育の推進が必要である。

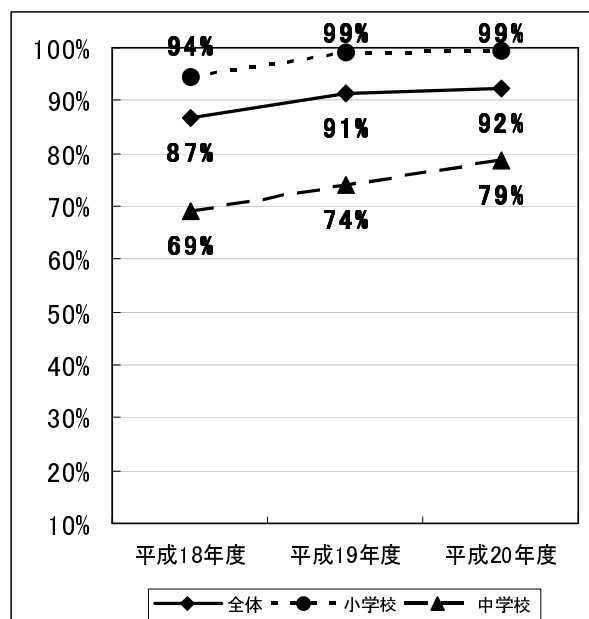


図3 道德の時間の授業公開実施状況の推移

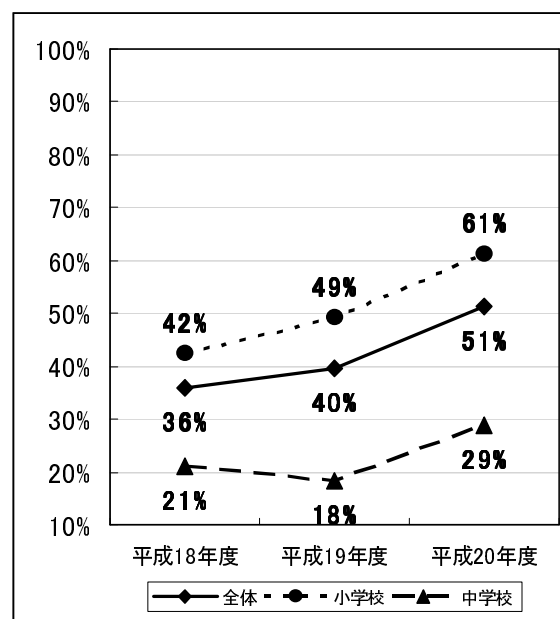


図4 授業公開後の懇談会実施状況の推移

〔学習指導要領の改訂〕

平成20年3月に、新しい小・中学校学習指導要領が告示された。今回の学習指導要領では、道德教育の目標として、従来の目標に加え、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し」「公共の精神を尊び」「他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献」することが新たに規定されている。また、道德の時間の指導の配慮事項の一つとして魅力的な教材の開発と活用が挙げられ、先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材とし、児童生徒が感動を覚えるような魅力的な教材を開発し、多様な教材を生かした創意工夫ある指導を行うことが一層重視されている。さらに、学校と家庭、地域社会とが共通理解を深め、相互の連携を生かした一体的な道德教育が行われるよう「道德の時間の授業を公開」することに配慮する必要性などについて示されている。

〔広島県道德教育指導資料の作成〕

平成21年度からは、これまでの成果や課題、新学習指導要領の趣旨を踏まえ、道德教育の内容の充実に向け、「心の元気を育てる道德教育充実事業」を実施することとした。本事業は、これまでの事業で養成した各市町の道德教育推進リーダーなどをメンバーに広島県道德教育指導資料作成委員会を設置し、地元の身近な素材を活用し、心に響く授業が行えるよう地域教材開発の手引等の広島県道德教育指導資料を作成することとした。平成21年度は、地域教材開発の手引を作成した。また、平成22年度は、読み物教材例集及び授業展開例集を作成する予定である。



Ⅱ 地域教材の開発に当たって

1 学校における道德教育

各学校において、校長の方針の下に、道德教育推進教師を中心に、全教師が協力して、心に響く道德教育を展開しよう

道德教育とは、人間が本来もっている人間としてよりよく生きたいという願いやよりよい生き方を求め実践する人間の育成を目指し、その基盤となる道德性を養う教育活動である。教育基本法第1条に規定されているように、教育は人格の完成を目的としている。道德教育はこの人格の形成の基本にかかわるものである。

【教育基本法第1条】

教育は、人格の完成を目指し、平和で民主的な国家及び社会の形成者として必要な資質を備えた心身ともに健康な国民の育成を期して行われなければならない。

学校における道德教育は、豊かな心をはぐくみ、人間としての生き方の自覚を促し、道德性を育成することをねらいとする教育活動であり、社会の変化に主体的に対応して生きていくことができる人間を育成する上で重要な役割をもっている。

学校における道德教育の目標は、教育基本法及び学校教育法に定められた教育の根本精神に基づいて設定されている。右に示した道德教育の目標は、学校における全体的な道德教育の目標である。各教科、総合的な学習の時間及び特別活動などの指導を通じて行う道德教育も、道德教育の要としての道德の時間の指導も、常にこの目標を目指して行われる。

【道德教育の目標】

- (1) 人間尊重の精神と生命に対する畏敬の念を培う
- (2) 豊かな心をはぐくむ
- (3) 伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛し、個性豊かな文化の創造を図る人間を育成する
- (4) 公共の精神を尊び、民主的な社会及び国家の発展に努める人間を育成する
- (5) 他国を尊重し、国際社会の平和と発展や環境の保全に貢献する人間を育成する
- (6) 未来を拓く主体性のある日本人を育成する
- (7) その基盤としての道德性を養う

道德教育は、各教科、外国語活動（小学校のみ）、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて行うとともに、あらゆる教育活動を通じて、適切に行われなければならない。

各教科等の指導を通じて児童生徒の道德性を養うための視点

(1) 道德教育と各教科等の目標、内容及び教材とのかかわり	・各教科等の特質に応じて道德教育にかかわる側面を明確に把握する。 ・それらに含まれる道德的価値を意識しながら指導する。
(2) 学習活動や学習態度への配慮	・学習に興味・関心をもち、主体的に取り組む工夫をする。 ・相互に学び合う思いやりのある協力的な雰囲気や人間関係をつくるように配慮する。 ・基本的な学習習慣、体験的な学習や問題解決的な調べ方や学び方を身に付ける学習などを重視する。
(3) 教師の態度や行動による感化	・教師の用いる言葉や児童生徒への接し方、授業に臨む姿勢や熱意などは、児童生徒の道德性が育つよりよい学級の雰囲気や環境をつくる。 ・道德の目標や内容に示されている精神を自らが授業の中で実践するよう心掛ける。

また、学校における道德教育は、幼児期の指導から小学校、中学校へと、各学校段階における幼児児童生徒が見せる成長発達の様子やそれぞれの段階の実態等を考慮して、適切に指導を進めなければならない。

	小 学 校	中 学 校
指導の基本方針	(1) 各教科、外国語活動（小学校のみ）、総合的な学習の時間及び特別活動の特質に応じた道德性の育成を図る。	
	(2) 教師と児童生徒の信頼関係と児童生徒相互の人間関係の充実を図る。	
	(3) 児童自ら道德性をはぐくみ、自己の生き方についての考えを深めるようにする。	(3) 自らの人間としての生き方についての自覚を深める指導を充実させる。
	(4) 豊かな体験活動を通して児童の内面に根ざした道德性を育成する。	(4) 豊かな体験活動の充実と他者とのかかわりの中で自らを振り返る指導を充実させる。
	(5) 社会生活上のきまりや基本的なモラルについての指導を充実させる。	
	(6) 学級や学校の環境の充実・整備による指導を充実させる。	

Q：郷土を愛する心をどのように育てていけばよいのですか。



A：郷土を愛する心は、ただ単に自分の生の由来を知ったり、成長の過程の中で懐かしく回想したり、郷土に親しみ愛着をもつということだけではない。愛には、こうした自然的、受動的な方向とともに、愛するものをよりよくしようとする能動的、積極的な働きも含まれている。自分にとって親しく、懐かしく、大切な郷土に対してより積極的にかかわり、郷土をよりよくすることに貢献し、文化や伝統をさらに発展させようとする能動的な側面を育てることが大切である。

郷土を愛する心を育てるためには、まず、郷土の自然や伝統的な行事などに触れ、その中で、様々な体験をすることによって、郷土に親しみ、郷土に気付き、郷土に対する豊かな感情、愛着の情をもつようにすることが大切である。郷土の美しさや生活の楽しさ、すばらしさを感じ取らせるのである。

また、各教科等で郷土の自然や歴史、伝統、文化などを調べる活動を通して郷土を理解したり、自分とのかかわりを知ることも必要である。このような活動や学習によって、郷土を守っていききたいという心情も生まれてくるのである。

加えて、より積極的に郷土にかかわり、異郷の文化や生活と自らの郷土を比較してよいところを発見し、郷土をつくろうと積極的に働きかけることも必要である。郷土のよさを一層発展させ、育てていこうとする心情や態度を育てることは、道德の時間だけでできるのではなく、学校の教育活動全体を通して、郷土に関する様々な体験を豊かにすることである。豊かな体験を通して、児童生徒の心に安らぎやしみじみとした情感を与えることがなければ、郷土を愛する心を育てることは難しい。こう考えてみると、郷土を愛する心を育てることは学校だけでできるものではなく、家庭や地域社会との連携による指導が極めて重要になる。

2 道徳の時間における指導

道徳の時間は、年間指導計画に基づき、児童生徒や学級の実態に即し、道徳の時間の特質に基づく適切な指導を展開しよう

道徳教育の目標は、学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うものである。

道徳の時間の目標は、道徳教育の目標に基づき、各教科、外国語活動（小学校のみ）、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値の自覚及び自己の生き方についての考えを深め（道徳的価値及び人間としての生き方についての自覚を深め：中学校）、道徳の実践力を育成するものである。

道徳教育の要としての道徳の時間は、学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育を補充、深化、統合する時間であり、年間指導計画に基づき、児童生徒や学級の実態に即し、道徳の時間の特質に基づく適切な指導を展開しなければならない。そのために、各学校においては、校長の方針の下、道徳教育推進教師が中心となり、学級担任の教師が、次のような道徳の時間の指導の基本方針を明確にして指導に当たる必要がある。

	小 学 校	中 学 校
指導の 基本 方針	(1) 道徳の時間の特質を理解する。 ○ 一定の道徳的価値の含まれるねらいとのかかわりにおいて自己を見つめる。 ○ 発達の段階に即して道徳的価値を内面的に自覚する。 小：自己の生き方についての考えを深める。 中：道徳的価値に基づいた人間としての生き方についての自覚を深める。 ○ 主体的に道徳の実践力を身に付ける。	
	(2) 信頼関係や温かい人間関係を基盤に置く。	
	(3) 児童が自己への問い掛けを深め、未来に夢や希望をもてるようにする。	(3) 生徒の内面的な自覚を促す指導方法を工夫する。
	(4) 児童の発達や個に応じた指導を工夫する。	(4) 生徒の発達や個に応じた指導方法を工夫する。
	(5) 道徳の時間が道徳的価値の自覚を深める要となるよう工夫する。	(5) 道徳の時間が道徳的価値の自覚を深める要となるよう工夫する。 ア 体験活動を生かすなど多様な指導方法の工夫をする。 イ 他の教育活動との関連を図る工夫
	(6) 道徳教育推進教師を中心とした指導体制を充実する。	
	(7) 児童と共に考え、悩み、感動を共有し、学び合うという姿勢をもつ。	(7) 指導に当たっての基本的姿勢について理解を深め指導に当たる。

Q：児童生徒は、道徳の授業をどのように見ていますか。



A：道徳の時間について見てみると、児童生徒が本気になって取り組む優れた実践が多く見られる一方で、例えば、形式化した指導や価値を教え込むにとどまるような指導が問題点としてよくあげられる。その結果、「資料や話がつまらない」「はじめから分かっていることしかない」などと、児童生徒の心の内奥に届かない授業になっている場合も少なくない。

【児童生徒から見た道徳の授業】

○ 子どもたちが「楽しい」「ためになる」と感じる授業

- 【小学校】・今まで気付かなかった大切なことに気付いたり、感動したりすることができる。
・資料が興味深く、心をうつものが多い。
・自分の体験と重ね合わせて考えてみたり、自分だけでなく他の人もそうなんだなあと感じたりすることが多い。 など
- 【中学校】・今、悩んでいる生き方の課題に合致した内容である。
・自由で活発な話し合いができる。
・自分のよさ、友だちのよさが認識できる。
・今まで、気付かなかったことに気付いたり、感動したりできる。
・一つのことを、じっくりと考え自分を見つめられる。 など

○ 子どもたちが「楽しくない」「ためにならない」と感じる授業

- ・先生の話ばかりで面白くない。
・文章を読んで感想を書くだけだから。
・自分の人生に役立ちそうもない。 など

したがって、教師が人生の先輩として、児童生徒と共に考え、悩み、感動を共有していこうとする姿勢をもつことが大切である。そして、児童生徒が自ら課題に取り組み、自己や他者との関係を深く見つめ、生きる希望や勇気を見いだすことができるよう、教材の開発や活用の工夫に努めることが期待されるのである。

3 道徳の時間における教材の開発

**児童生徒が感動を覚えるような魅力的な教材の開発に挑戦しよう
～心に響く魅力的な資料は道徳の時間を成功に導く鍵となる～**

道徳の時間では、児童生徒が資料に出会い、資料中の登場人物（擬人化された動植物等も含めて）への共感や批判などを通して道徳的価値の内面的な自覚を深めていく。

道徳の時間の目標の達成を図り、児童生徒に充実感をもたらすような生き生きとした指導を進めるためには、道徳の時間の資料となる魅力的な教材を多様に開発し、その効果的な活用に努めることが大切である。

(1) 道徳の時間における教材

道徳の時間に生かす教材は、児童生徒が道徳的価値の自覚を深めていくための手掛かりとして極めて大きな意味をもっている。また、児童生徒が人間としての在り方や生き方などについて多様に感じ、考えを深め、互いに学び合う共通の素材として重要な役割をもっている。

道徳の時間に用いられる教材の具備すべき要件

〈前提として〉

- ア 人間尊重の精神にかなうもの
- イ ねらいを達成するのにふさわしいもの
- ウ 児童生徒の興味や関心、発達の段階に応じたもの
- エ 多様な価値観が引き出され深く考えることができるもの
- オ 特定の価値観に偏しない中立的なもの

〈道徳的価値の自覚を深めるために〉

- ア 児童生徒の感性に訴え、感動を覚えるようなもの
- イ 人間の弱さやもろさに向き合い、生きる喜びや勇気を与えられるもの
- ウ 生や死の問題、先人が残した生き方の知恵など人間としてよりよく生きることの意味を深く考えることができるもの
- エ 体験活動や日常生活等を振り返り、道徳的価値の意義や大切さを考えることができるもの
- オ 悩みや葛藤等の心の揺れ、人間関係の理解等の課題について深く考えることができるもの
- カ 多様で発展的な学習活動を可能にするもの

【選定に当たっての留意点】

- ・道徳の内容に適切に対応し、ねらいに即したもの
- ・道徳の時間の特徴を踏まえ道徳的実践力を高める上でふさわしいもの

(2) 教材の開発と活用の創意工夫

道徳の時間は、教師と児童生徒との人間的な触れ合いで成り立っている部分が多い。このことから考えても、児童生徒と共に学ぶべき道徳の授業に対する教師の熱意が、基本になければならない。道徳の時間の資料となる魅力的な教材は、そのような教師の熱意から生まれるものである。道徳の時間の目標の達成を図り、児童生徒に学ぶことに対する充実感をもたらし、生きる希望や勇気を見いださせることができるよう、魅力的な教材の開発や活用の工夫に努めることが期待される。

開発された教材は、市販の資料(副教材)に比べて未熟であり、表現の仕方も稚拙であるかもしれない。しかし、日々児童生徒といっしょに生活して、その実態をよく把握している教師による自作資料などの開発した教材は、児童生徒の心を揺り動かす要素を十分に含んでいると言える。そして、その教材を活用することによって教師の熱意と、教材のもつ共感性が、児童生徒の心に響き、道徳の時間の指導を生き生きとさせることになるのである。

ア 魅力的な教材の素材となるものを幅広く収集する

教材の開発に当たっては、日常から報道や書籍、身近なできごと等に強い関心をもつとともに、柔軟な発想をもち教材を広く求める姿勢をもつことが求められる。



具体的には、先人の伝記、自然、伝統と文化、スポーツなどを題材として、児童生徒が感動を覚えるような教材の発掘に努めることが求められる。いわば、感動性とリアリティのある教材開発が求められているのである。

教材を発掘するための素材群

- ・伝記、名作、古典、伝説、随想、民話、劇、詩歌、論説、歌、漫画
- ・地域の祭り、地域行事、年中行事、産業、文化、遺産、風物、史跡、名所、学校の歴史
- ・新聞や雑誌などの報道、映画やテレビ番組などの映像（ビデオ等）、写真、情報通信などの情報
- ・学校行事などの体験活動や子どもの生活のできごと
- ・教師自身の体験や感動的なできごと など

- 〈先人の伝記〉・多様な生き方が織り込まれ、生きる勇気や知恵などが感じることができる。
・人間としての弱さを吐露する姿などにも接し、生きることの魅力や意味の深さについて考えを深めることができる。
- 〈自然〉・自然の偉大さや生命の尊さなど、感性に訴えることができる。
- 〈伝統と文化〉・有形無形の美しさに郷土や国への誇り、愛情を感じさせることができる。
- 〈スポーツ〉・今、実際に活躍するアスリートなどのチャレンジ精神や力強い生き方、苦悩などに触れて道徳的価値や生き方についての自覚を深めることができる。

イ 多様な表現形式に着目する

教材の表現形式において、いかに多様なものを選定し、創意工夫するかが大切である。

教材の表現形式の例

- ・名作、古典、随想、民話、詩歌、論説などの読み物
- ・地域の文化やできごと等に取材した郷土教材
- ・映像ソフト、映像メディアやインターネットなどの情報通信ネットワークを利用した教材
- ・実話、写真、劇、漫画などの多彩な形式の教材
- ・保護者や地域の人々が実際に児童生徒に語りかけるなどの生きた教材
- ・児童生徒自らが話合いをつくっていくことができる教材
- ・複数時間にわたる指導に生かすことができる教材 など

ウ 活用を視野に入れて開発する

教材の開発に当たっては、教材の具備すべき要件を踏まえ、道徳の時間の特質を生かした展開が可能となるよう、活用を視野に入れて工夫することが求められる。

そのためにも開発された教材については、その内容や形式等の特徴を押さえ、授業に位置付けたとき、児童生徒がその内容をどのように受け止めるかを予想するなどして、提示の工夫、発問の仕方の工夫等を併せて検討しておくことが大切である。

教材活用の創意工夫の例

- ・地域の人を招いて協力しながら学習を進める
- ・情報機器を生かして学習する
- ・疑似体験活動を取り込んで学習する
- ・補助的な教材を組み合わせることでそれらの多様な性格を生かし合う
（「心のノート」の適切な活用をも望まれる。）

Q：広島県では、これまでどのような教材を開発してきましたか。



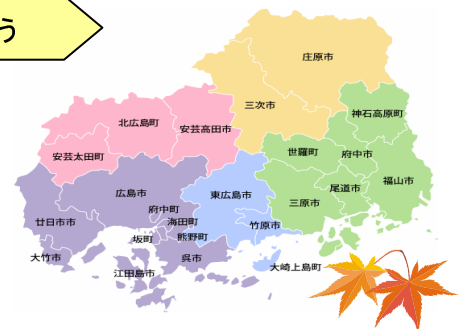
A：文部省の委嘱事業である「平成10・11年度道徳実践活動学習教材の研究開発」を受けて、平成12年3月に「心に響く道徳学習教材集」（平成12年3月）を作成した。以後、次のような教材集を作成している。

- 「心に響く道徳学習教材集 小学校低・中学年用」（平成14年3月）
（文部科学省委嘱事業「平成13年度道徳実践活動学習教材の研究開発」成果物）
- 「心の元気Ⅰ」小学校版，中学校版（平成15年3月）
（文部科学省委嘱事業「平成14・15年度児童生徒の心に響く道徳教育推進事業」成果物）
- 「心の元気Ⅱ」小学校版，中学校版（平成16年2月）
（文部科学省委嘱事業「平成14・15年度児童生徒の心に響く道徳教育推進事業」成果物）
- 「生徒指導充実のための道徳教育実践事例集」（平成16年2月）
（「平成14・15年度広島県道徳教育実践研究指定事業」成果物）

（3）地域を素材とした教材の開発

郷土を意識しよう

私たちは地域の恩恵を受けて生活している。地域の風土，文化，伝統は，それを実感させる身近な教材である。伝統的な文化遺産ばかりでなく，児童生徒を取り巻く全ての地域環境を教材として視野に入れ，それらを活用することは，地域に根ざした道徳教育を推進する上で大切である。



また，児童生徒の体験の不足が様々な問題を招いているとも言われる中で，地域の様々な特色を生かした体験の場を増やしていくことは，自分を支えている地域のよさや課題を児童生徒が再認識する機会を与えることにもつながる。

ア エ尔夫のポイント

- 身近なものの開発から取り組み，次第に範囲を広げる。

- ・既存の文化や伝統の活用から始めることにより，地域に元来備わっている教育の掘り起こしにつなげる。
- ・普段から，地域を歩き，地域のもっている文化等に敏感になり，さらに，伝統的な文化だけでなく自然や人物も含め，地域の特色を掘り起こす努力をする。
- ・教師だけでなく，児童生徒も共に活動することにより，現実の社会の課題と向き合い，地域社会の新たな担い手を育てることにつなげる。

（特に，小学校高学年，中学校）

- 地域の特色を教材化する。

〈地域教材開発の視点〉

- ・よい面とともに課題となる側面からも地域の特色を取り上げる。
- ・児童生徒の地域社会における体験活動を取り上げる。
- ・願いとして伝えたい内容や地域の人々が抱えている課題，生き方への自覚を深めるための構成にする。
- ・地域の人々と共に取り組む。 など

Q：なぜ、地域を素材とした教材開発なのですか。



A： 今日都市化あるいは過疎化が進んでおり、多くの地域で、郷土意識や地域社会に対する連帯感が薄くなっている。こうした傾向が強まっている事実を考慮し、地域の人々との人間関係を問い直したり、地域社会の実態を把握させたりして、郷土に対する認識を深め、郷土を愛し、その発展に努めるよう指導していく必要がある。

「人間は、大地とその大地から生じたあらゆる自然的・精神的なものとともに、内面的に成長してきた場所にのみ、郷土をもつ。」(E. Spranger, 1882-1963)

ドイツの教育学者、シュプランガーの言葉をかりれば、児童生徒の郷土意識を育むためには、ただ単にそこに住んでいて生活を営んでいるというだけでなく、地域の「ひと、もの、こと」とのかかわりの中で、内面的な成長をもたらせる必要があるということになる。

例えば、郷土の文化財や伝統芸能、伝統工芸等を誇りに思い大切にすることも、単に昔から伝えられ、古いものだから価値があるからということではなく、そこに込められた様々な人間の営みを大事にしたいと考えるからである。

人間はいずれの地であれ、地域の中で生活し、成長していくのである。児童生徒は、自然を含め、地域の様々なものや人とのかかわりを通して、自己を見つめ、鍛え、自己実現を図っていくのであり、道徳性をはぐくむ上においても、地域社会のもつ意義はきわめて大きいと言える。そこに、地域を素材とした教材の開発の意義を見出すことができる。

また、地域を素材としたものは児童生徒にとって親しみをもちやすく、心に響きやすいのである。

イ 地域を素材とした教材で取り上げる題材例

- 郷土の発展に貢献した先人の伝記や逸話（エピソード）など、生きることの魅力や意味の深さについて考えを深めることができるもの
- 郷土に根付く伝統と文化、行事、民話や伝説、歴史、産業など、郷土への誇りや愛着を育てるもの
- 郷土の自然や風土など、偉大さや美しさ、生命の尊さなどが感じ取れるもの
- 郷土ゆかりのアスリートなどのチャレンジ精神や力強い生き方、苦悩などに触れられるもの

ウ 地域を素材とした教材の選定や作成上の留意点

- 道徳の時間の資料として用いることを原則とする。
- 学校や学年の発達の段階に即するよう配慮する。
- 原則として現存者を除く。ただし、社会的評価が定まっている人（実際に活躍するアスリートなど）を例外とする。
- 政治的、宗教的な中立性を侵さない。
- 特定の個人等への営利にかかわるものを避ける。
- 史実に基づき、時代の考証等に十分耐えられるよう配慮する。ただし、単なる年譜や伝記にとどまらないようにする。
- 教育上、好ましくない内容や表現を避け、排他的で狭い郷土愛とならないよう配慮する。
- 方言を使用してもよいが、その際、共通語を併記する。
- 地名、人名等で教育用漢字以外のものを用いる場合には、ふりがなを付する。
- 開発、使用の際、著作権に関する配慮をする。（出典を明示するなど）

優れた郷土資料は、全国どこの学校でも優れた資料である。なお、その上で、その地域で用いることで付加される意義があるのである。なお、開発された郷土資料は、広く家庭などにおいても利用され、親しまれることが望ましい。

(4) 教材の開発と「著作権」

教材開発の際に留意したいのが、「著作権」である。本や雑誌などを複製する場合には、原則として著作権者の許諾が必要であるが、学校教育では、他人の著作物を利用しなければならない場面が数多くある。そのため、その都度、著作権者の許諾を得ていると学校教育が円滑に行えないことから、著作権法では学校その他の教育機関における複製等について、第35条をもって特に定めている。

(学校その他の教育機関における複製等)

第35条 学校その他の教育機関（営利を目的として設置されているものを除く。）において教育を担当する者及び授業を受ける者は、その授業の過程における使用に供することを目的とする場合には、必要と認められる限度において、公表された著作物を複製することができる。ただし、当該著作物の種類及び用途並びにその複製の部数及び態様に照らし著作権者の利益を不当に害することとなる場合は、この限りでない。

上記の条文は、学校・公民館などで教員等や授業を受ける者（学習者）が教材作成などを行うためにコピーする場合の例外である。インターネットを通じて得た著作物をダウンロードしたり、プリントアウト・コピーして教員等が教材作成を行ったり、学習者が教材としてコピーしたものを他の学習者に配布して使うような場合にも、この例外は適用される。

【著作権者の了解なしに利用できるための条件】

- ア 営利を目的としない教育機関であること
- イ 授業等を担当する教員等やその授業等を受ける学習者自身がコピーすること
(指示に従って作業してくれる人に頼むことは可能)
- ウ 授業の中でそのコピーを使用すること
- エ 必要な限度内の部数であること
- オ 既に公表されている著作物であること
- カ その著作物の種類や用途などから判断して、著作権者の利益を不当に害しないこと
(ソフトウェアやドリルなど、個々の学習者が購入することを想定して販売されているものを複製する場合等は対象外)
- キ 原則として「出所の明示」が必要

〈一般的な著作物利用の手続き例〉

- ①著作権者を捜し出す。
発行者や著作権等を集中して管理している団体等に連絡をし、その後の手続きについて相談する。
- ②著作権者から了解を得る。
電話等、口頭でも差し支えないが、文書による依頼が望ましい。
(著作権法第63条「利用の許諾」)

※その他

- ・利用の目的を明確にしておく。
- ・完成した作品を著作権者に送付することが望ましい。

なお、文化庁Webサイト (<http://www.bunka.go.jp/chosakuken/index.html>)

「著作権制度に関する情報」→「著作権に関する教材、資料等」→

「著作権テキスト～初めて学ぶ人のために～」，「著作権Q&A～著作権なるほど質問箱～」，

「これであなたも著作権なんでも博士〈学校関係者向け著作権の教育情報〉」などは参考となる。

Ⅲ 地域教材開発の手順（例）と実際

1 地域教材開発の手順（例）

着想

構成・推敲

実施・改善

(1) 素材の収集・選定

集めてみよう

(2) 情報の収集

探してみよう

情報の収集方法

- 資料・パンフレット（市役所・町役場・公民館）
- 一般書籍・郷土資料（図書館・博物館・民俗資料館）
- 地域の関係者（インタビュー）
- 情報通信ネットワーク（インターネット・映像メディア）など

(3) 読み物資料の作成

書いてみよう

作成手順

① 主題やねらいを決定する（学習指導要領解説・心のノートの確認）

② 対象となる学年の発達段階や特性を把握する

③ 登場人物や状況を設定する

④ 中心場面（山場）を決め、
大まかな起承転結を設定する

（4コマ場面絵の活用（p. 18））

⑤ 場面分けをもとに文章化する

- 具体的な児童生徒の心の動き（内容の受けとめ）の想定
- 児童生徒の多様な価値観を引き出し、考えを深める工夫
- 児童生徒にとって分かりやすい文章の作成

⑥ 不要な文章や文言を削除する

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	平成13年6月、上巻の井上先生が、田んぼのそばの森に、中学の先生に見てもらった、モリアオガエルを育てる。その森、井上先生は、毎日観察し、卵の育ちを毎日確認する。最後、最終的に卵の15個から、53個に増える。	平成13年6月、上巻の井上先生が、田んぼのそばの森に、中学の先生に見てもらった、モリアオガエルを育てる。その森、井上先生は、毎日観察し、卵の育ちを毎日確認する。最後、最終的に卵の15個から、53個に増える。	平成13年6月、上巻の井上先生が、田んぼのそばの森に、中学の先生に見てもらった、モリアオガエルを育てる。その森、井上先生は、毎日観察し、卵の育ちを毎日確認する。最後、最終的に卵の15個から、53個に増える。	平成13年6月、上巻の井上先生が、田んぼのそばの森に、中学の先生に見てもらった、モリアオガエルを育てる。その森、井上先生は、毎日観察し、卵の育ちを毎日確認する。最後、最終的に卵の15個から、53個に増える。

4コマ場面絵

先人の伝記

自然

伝統と文化

スポーツ

題材例

学習指導過程の構想
補助資料（「心のノート」など）

の検討

構成チェック票（p. 17）を参考に検討

(4) 授業の実施

実践してみよう

(5) 体制・環境づくり

充実させよう

- ① 授業を踏まえた改善点の整理
- ② 道徳教育の全体計画及び道徳の時間の年間指導計画への位置づけ
- ③ 教材コーナーへの保存・ホームページ等による発信

(1) 素材の収集・選定



集めてみよう

素材の収集に当たっては、日常から報道や書籍、身近な出来事等に強い関心をもつとともに、柔軟な発想をもち、幅広く求める姿勢をもつことが大切である。(p. 10参照) また、収集した素材は、いつでも活用できるよう分類・整理しておく必要がある。なお、市町の教育委員会や道徳教育推進協議会等と連携・協力して収集することも考えられる。

素材の選定に当たっては、児童生徒が道徳的価値及び人間としての生き方についての自覚を深めていくための手掛かりになるものや、人間としての在り方や生き方などについて多様に感じられるものを素材として選定することが必要である。(p. 9参照)

(2) 情報の収集



探してみよう

取り上げる素材を選定した後、より広く、深く、多面的にその素材についての情報を収集する必要がある。収集方法については、資料・パンフレット、一般書籍・郷土資料、地域の関係者、情報通信ネットワークなどが考えられる。その際、書籍の出版社等に問い合わせるなど、著作権・肖像権に留意する必要がある。(p. 13参照)

(3) 読み物資料の作成



書いてみよう

作成手順としては、次の①～⑥が考えられる。但し、常にこの順番で作成が進むわけではなく、必要に応じて、進んだり、戻ったりしながら作成していくこととなる。また、作成を進めると同時に、授業に資料として位置付けた際の児童生徒の受け止め、資料提示や発問の工夫等の学習指導過程の構想、補助資料の活用について併せて検討しておくことが大切である。

さらに、資料を検討していく際には、構成チェック票 (p. 17) にある項目を参照されたい。

① 主題やねらいを決定する

主題やねらいを決定する際には、小・中学校学習指導要領解説道徳編（以下解説）や「心のノート」を確認し、一定の道徳的価値の含まれるねらいを明確にすることが重要である。「心のノート」は、児童生徒が自ら道徳性を発展させる窓口となる道徳の内容、すなわち学習指導要領に示された道徳の内容を、対象となる学年の発達段階に応じてより具体化され、キーワードとして分かりやすく書き表されており参考となる。

② 対象となる学年の発達の段階や特性等を把握する

児童生徒の実態に即した話題を提示していくためには、児童生徒の発達の段階に応じて地域（郷土）のとりえはどう広がっているのかや、地域の「ひと・もの・こと」をどの程度認識しているのか、今、何に興味・関心があるのか、どんなことで悩み、苦しんでいるのかなどの実態を把握しておくことが必要である。

③ 登場人物や状況を設定する

登場人物については、例えば、中心人物あるいは主人公（学習する児童生徒の実態に近い人物）、補助的な人物（中心人物を肯定的にあるいは否定的にゆさぶる人物）、理想的な人物（児童生徒の半歩先、一歩先の見方・考え方をもっている人物）の設定が考えられる。また、いつ、どこで、誰が出てくるのかなどの状況の設定に無理がないよう留意する必要がある。その際には、素材の背景など幅広い事前の資料研究を踏まえておく必要があることは言うまでもない。

④ 中心場面（山場）を決め、大まかな起承転結を設定する（四コマ場面絵 (p. 18) の活用)

中心人物が葛藤したり、中心人物の道徳的価値が変容したりする中心場面（山場）を設定し、四コマ

場面絵を活用するなどして、大まかな起承転結を考えておくことが大切である。その際、話の展開に飛躍があったり、前後でつじつまが合わない箇所があったりすることがないようにしなければならない。なお、感動資料等、必ずしもすべての資料が起承転結で構成されるわけではないことに留意する必要がある。

⑤ 場面分けをもとに文章化する

○ 具体的な児童生徒の心の動き（内容の受け止め）の想定

児童生徒が資料を読んだときに、どのように考えるのか、どのような発言をするのかなどを具体的に思い描きながら、文章化していくことが必要である。

○ 児童生徒の多様な価値観を引き出し、考えを深める工夫

中心人物が立ち止まって考える場面を設定したり、登場人物の心の動きを直接、記述せず、それを考える手がかりとして内面的な心の動きを表現する副詞や副詞句などを効果的に活用して表したりするなどの工夫が大切である。

○ 児童生徒にとって分かりやすい文章の作成

発達の段階に対して文章の量が多すぎないか、一文の長さは適切か、主述にずれがないかなどに留意し、一読して資料場面が把握できるようにすることが必要である。

⑥ 不要な場面や文言を削除する

一読して、児童生徒から道徳的価値の含まれるねらいにかかわる心の動きが引き出せるかなどを視点に、状況把握に必要な場面や文言以外を削除するとともに、登場人物の心の動きについては必要最小限とし、できるだけ単純な展開とすることが大切である。なお、複数で検討したり、少し時間をおいて読み直したりするとよい。

(4) 授業の実施



実践してみよう

授業の実施に当たっては、道徳の時間の特質に基づく適切な指導を展開しなければならない。その際、資料の特質を生かし多様な指導方法を工夫したい。例えば、「心のノート」等、補助資料を組み合わせたり、地域人材を招いたり、情報機器を生かしたり、疑似体験活動を取り込んだりするなどの工夫がある。

(5) 体制・環境づくり



充実させよう

体制・環境づくりに当たっては、道徳教育推進教師を中心として、道徳教育用教材の整備・充実・活用や道徳教育の研修の充実に関することなどが図られるよう、協力体制や環境を整備する必要がある。

① 授業を踏まえた改善点の整理・検討

授業を実施した後は、児童生徒が、実際にどう受け止めていたのかなど、構成チェック票をもとに、授業の状況を踏まえて改善点を整理し、関係者を交えて再度検討していくことが求められる。

② 道徳教育の全体計画及び道徳の時間の年間指導計画への位置付け

より一層、資料を生かしていくために、各教科等における道徳教育や地域行事等との関連を踏まえた検討を行い、次年度の諸計画に位置付けていくことが大切である。

③ 教材コーナーへの保存・ホームページ等による発信

授業で活用した資料を含め開発した教材は、教材コーナーを設置し保存しておくことが重要である。また、市町内の各校で共有できるシステムを工夫するとよい。さらに、ホームページ等で広く情報発信し、地域の人々の積極的な理解と協力を得、地域教材の開発と活用を一層充実させていくことが大切である。なお、上記①～③は、4分野共通のものである。

【構成チェック票】例

学校名（ ）氏名（ ）

主題名・資料名〔 〕

次の項目は資料の構成に係るポイントである。当てはまるものを囲み、優れている点及び問題の箇所とその改善案を記入してください。

（ ◎：満足できる ○：おおむね満足できる △：改善の余地がある ）

	項 目	評価	優れている点及び問題の箇所とその改善案
①	子どもの興味・関心に沿ったものであるか ・体験活動や日常生活等を踏まえている ・未来を切り拓いていこうとする意欲が高められる ・（ ） など	◎ ○ △	
②	子どもの心に訴えるものであるか ・感動や新しい発見があり、またはそれを誘発している ・日常生活の問題点を浮き彫りにしている ・（ ） など	◎ ○ △	
③	子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか ・内容項目の発展性や系統性が踏まえられている ・子どもが容易に理解できる内容である（また、単純すぎて分かりきっていない） ・（ ） など	◎ ○ △	
④	登場人物の取り合わせとやりとりに無理がないか ・主人公の気持ちの変化が現実的で自然である ・話に飛躍はなく、前後でつじつまが合っている ・（ ） など	◎ ○ △	
⑤	適切な状況を設定しているか（特に中心場面） ・ねらいとする道徳的価値が明確である ・登場人物の人間らしいふるまいや感情の屈折が生じている ・（ ） など	◎ ○ △	
⑥	子どもの多様な考えが引き出せるものであるか ・主人公が複眼的にえがかれている ・子どもの想像をかきたてるような問題場面が含まれている ・（ ） など	◎ ○ △	
⑦	叙述によく具象性を与えているか ・内的なものを外的なものによって描いている ・副詞、副詞句を有効に活用している ・（ ） など	◎ ○ △	

四コマ場面絵

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明				

2 分野別の特色に応じた教材開発

「分野別の特色に応じた教材開発」の

見方

教材開発のポイント

教材開発の手順「着想 → 構成・推敲 → 実施・改善」に沿って、各分野で特に留意すべき事項やポイントについて、キーワードを示した上で、記載しています。

教材開発例 1

各分野で特に留意すべき事項やポイントを踏まえて、どのように教材開発を行ったかを具体的に記載しています。

教材開発例 1 「わたしが行かねば」

【小学校中学年 主題：強い意志 内容項目：1の(2)】

藤野昌言さんは、府中市の医師である。明治12年（1897年）に全国的に行われたコレラの治療に自身の危険も顧みず邁進し、身を捧げた。地域の人々は、その死を悼み、現在、古香堂と呼ばれている記念碑を建て、感謝の意を表した。現在も、命日には、遺徳を偲ぶ昌言祭が行われている。



資料名、対象学年、主題、内容項目

選定した素材の概要

(1) 素材の収集・選定

集めてみよう

府中市は、府中地区のオランダなど古くから伝わるもの作りの伝統ある地域である。素材の収集にあたっては、府中市立小学校中学年用の社会科副読本から地域の特色ある伝統や文化、自然、歴史に貢献した人物を選定した。また、所属校内や市道徳推進協議会において、素材収集の依頼をした結果、多くの素材を集めることができた。

先人の伝記分野においては、その人物が府中市の地域の人々のために行った功績がはっきりしているか、現在の生活につながりがあるか、その人物の生き様から生きる勇気や知恵を感じることが出来るかという観点で絞っていった。とりわけ、「藤野昌言」は、医者として当時わかっていなかった「コレラ」の治療に尽くした歴史的な実績がはっきりしていること、また、現在も「昌言祭」という慰霊祭が行われていることなど、医者として治療をしたというだけでなく、貧しい患者からは治療費をとらない代わりに味噌や米をあげたり、葬式の世話をしたり、暮ってくる若者を自分の家に住まわせて学問を教えたりするなど、より人間味を感じられた。中学年の社会科副読本にも「地域に貢献した人々」として取り上げられており、各教科等との関連も図りながら学習することも出来ることから、「藤野昌言」を教材として選定した。

手順に沿った教材開発の実際

(2) 情報の収集

探してみよう

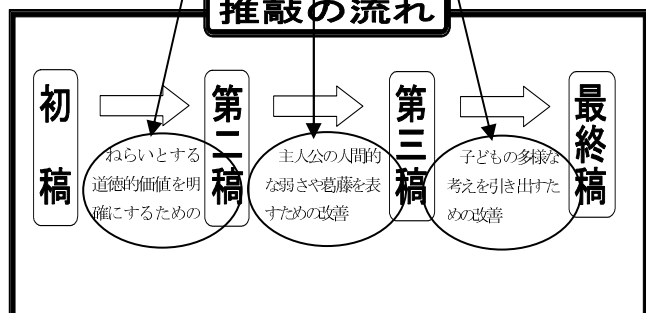
○ 郷土資料（社会科副読本等）

また、社会科副読本の作成者へ資料・情報提供のお願いをして資料集めをした。当時副読本作成のために提供していた参考文献を図書館で調べた。『医師藤野昌言』『府中市の人物誌』『もともま』などの資料から、藤野昌言の生い立ちや家系、医者としての患者への対応、また多くの学者たちと熱心に漢学の勉強をしたことが書かれていた。

各稿における推敲の主な視点

特に、手順例の「(3) 読み物資料の作成 ⑤場面分けをもとに文章化する ⑥不要な文章や文言を削除する」の部分について、初稿から最終稿に至るまで、その流れの概要を示しました。さらに、記述をどのように変えていったのか、その改善点とその理由を記載しました。

推敲の流れ



〔各稿の具体的な改善点及びその理由〕

推敲の流れと対応

第2稿

ねらいとする道徳的価値を明確にするための改善

記号が対応

前稿と記述を
変えた部分
(下線)
※主なもの

改善の視点

※構成チェック票(例)と対応

改善の理由

記号が対応	改善点及びその理由
命がけの治療	ア
府中市の府中公園の中にある「香古家」で十六日、たくさんの人が集まって祭を行っています。それには、こないだいれがあります。	ア
から170年ほど前のことです。	ア
府中市朝日町というところに藤原昌言という医者がいました。	ア
昌言は、一八三二年、府中に生まれ、十代半ばから大阪に出て医者になるため勉強をしていました。十九歳のある日、「父危篤」という知らせが届き、大急ぎで府中に帰りました。しかし何日もかかって府中に帰り着いた時には、お父さんはもう亡くなっていました。	ア
昌言は、お父さんの後を継いで、ここ府中で医者になりました。	ア
医者になってからも昌言は、熱心に勉強を続けました。やがて、「昌言は名医だ」と言われるようになり、患者が次々とやってくるようになりました。昌言は、家での診療はもちろん、往診にも出かけ、治療費が払えない家の患者には「これも薬のうち」と、米や味噌を置いて帰ることもありました。	ア
一八七九年、昌言が四十七歳の夏、恐怖の伝染病「コレラ」が全国的に流行しました。コレラは、急に吐いたり下痢をしたりする病気で、ここ府中地方一帯にもみるみる内に広がり次々とコレラに感染しました。	イ
原因が分からない病気だったので、十分な治療ができず、コロリコロリと亡くなっていくので、人々は「コロリ」と呼んでいました。	イ
千人も二千人も	イ

教材開発例 2

教材開発例2 「時をおよぐツラ」
【小学校中学年 主題：つながる命 内容項目：3の(1)】

開発のポイント

選定した素材の紹介

素材の選定、情報の収集のポイント

資料作成の流れと主な改善点

〔素材「ショウバウツグミ」について〕

- 平成20年に新種と認定され、発見者の名前や地名が学名となっている。
- 現在、山の奥である場所が、数百年前には、海の底であったことから、自然の不思議さや地球の大きな変化に感動させられるものである。

新発見(3000年前)	市原一帯は、古くから海であり、多数の海の生き物が生息していた。
新発見(1000年前)	この頃、海が陸地になった。
昭和40年代	目や鼻の化石が発見され、学名調査が開始される。
昭和56年	10歳児の少年が、ツグミを発見する。発見「ショウバウツグミ」となる。
平成8年	市原市も新種と認定される。
平成20年	市原市が新種と認定され、市原市と市原市と命名される。

〔素材の選定、情報の収集のポイント〕

Q&A	
Q1：自然の偉大さや生命の尊さ等感性に訴えるものですか。	A1：自然の偉大な変化を感じ、素直に感動できる素材のものです。
Q2：自然と人間とのかかわりについてはどうですか。	A2：自然、生命のつながりの中に、人間の存在があることとらえて書くことができます。
Q3：科学的な裏付けをとりましましたか。	A3：専門家の方に取材し、市原市一帯が、古くから海と呼ばれた海であったことは、確認とすることができました。

〔資料「時をおよぐツラ」の作成〕

内容として、まず、三つを創製して考えて検討した。最終的には、生命尊重(3の(1))でまとめることとした。	第1稿	〔課題点〕 絵本をイメージし、イラストの活用を考えていたため、文章だけでは伝わりづらいものとなった。
動植物(1の(2)) 小学校低学年 生命尊重(3の(1)) 小学校低学年 自然愛(3の(2)) 小学校低学年	推敲の視点 構成チェック票(例)の項目①「子どもが自然の偉大さやつながりに感動できるか」	〔改善点〕 文章を補い、イラストがなくても、読み取れるものとする。また、空想的に書く中で、基本的な設定は、事実に基づいたものとする。
ツグミを主人公としてファンタジックに描き、悠久の時の流れにおける自然の不思議さや地球の偉大な変化に感動させられるものになるように考えた。	構成チェック票③「子どもの発達段階に合わせた構成と内容をもつものであるか」	〔課題点〕 表現を工夫したり、補足説明を加えたりしたが、小学校低学年では、悠久の時の流れについての理解が難しい。
中心場面(山場)において、死の世界になったと思っていた海が、命の海に生まれ変わった場面での、命の喜びを表現した。その喜び、命のつながりを感じた。そのように、行動を通して、心の動きを表現することに留意した。	構成チェック票④「子どもが自然の偉大さやつながりに感動できるか」	〔改善点〕 内容は、自然愛(3の(1))のままとし、自然の不思議さや地球の偉大な変化に感動させる。表現を小学校低学年でも理解できるように変更する。
	最終稿	

教材開発例2では、教材開発の概要について記載しています。はじめに開発のポイントを吹き出しで示し、その開発のポイントに焦点を当てて、素材の選定、情報の収集や資料作成の流れと主な改善点について、紹介しています。

(1) 先人の伝記

教材開発のポイント



着
想

(1) 素材の収集・選定



集めてみよう

生きる勇気や知恵が感じられる素材

- ・ 生きることの魅力や意味の深さについて考えを深めることができるもの
- ・ 地域社会の発展への貢献等、身近な人物の魅力が表れるもの

○ 素材の収集に当たって

郷土史等、市町に残る文献や社会科の副読本など幅広く収集に当たりたい。また、地域に建立されている石碑、歴史的建造物等も手がかりとなる。

○ 素材の選定に当たって

著名な人物に限らず、これまで知られていない人物を知らせるのも教育の一つである。また、児童生徒にとって身近な地域教材であることから、活用する地域以外での認知度は選定条件として考

慮しなくてもよい。ただし、地域の先人を扱うことから、その人物の生き方を通して、生きることの魅力や意味の深さについて考えを深められることや地域に貢献していることといった視点は必要である。

(2) 情報の収集



探してみよう

多様な生き方に着目

- ・ 史実考証のための史料収集
- ・ 郷土資料、社会科副読本作成者等へのインタビュー（人物のエピソード等）

先人の情報収集においては、特に史実考証が重要である。

情報の収集に当たっては、記念館等に残されている資料（日記等）、子孫の談話等、史実を証明するための多くの情報を収集することが必要である。なお、インタビューを行う際には、先人の多様な生き方や人間味が滲み出るエピソードなどに着目

し、専門家や先人の子孫、地域のゆかりの方等、様々な立場の方から聞き取りを行うことが大切である。

その際、人としての弱さの部分については、文献に表れていないことも少なくないことから、インタビューにより引き出したい。また、話しやすい雰囲気づくりに努め、インタビューの流れや時間配分にも留意したい。場合によっては、複数回訪問することも考えなければならない。

(3) 読み物資料の作成



書いてみよう

史実と人間性に留意

- ・ ねらいにかかわる人間的魅力の伝わるエピソードの挿入
- ・ 史実に忠実な記述

① 主題やねらいを決定する

主題やねらいの決定に当たっては、先人が残した生き方の知恵など人間としてよりよく生きることを意味を深く考えることができるものに着目したい。

伝記には不撓・不屈や理想の実現、郷土愛等多様な価値が含まれていることから、作成に際して

は、先人の生き方から伝えたいものを焦点化し、ねらいを明確にするよう留意したい。

構成・推敲

**② 対象となる学年の発達の段階や特性等を把握する**

把握内容としては、取り上げた人物についての各教科等における学習内容、児童生徒における知名度などが考えられる。また、教師と児童生徒では着目するところが違うことから、事前に伝記を読ませて、児童生徒がどこに注目するのかを把握することも一つの方法である。

③ 登場人物や状況を設定する

登場人物や状況の設定は、史実に忠実であることが重要である。ただし、内容が歴史的に古い場合は、社会状況、地理的条件、歴史的背景などを把握しておく必要がある。また、先人の生き方の真意が伝わるような設定にする必要がある。

④ 中心場面（山場）を決め、大まかな起承転結を設定する

先人の人柄・人間的魅力が児童生徒に伝わるエピソードの挿入が求められる。人としての弱さを吐露する姿や生きる勇気、知恵などを感じることができ場面設定などが必要である。ただし、人としての弱さは、道徳的価値に対する弱さであり、安易な弱さでないことに留意したい。

⑤ 場面分けをもとに文章化する

先人の人としての弱さ、迷い、強さ等の心の動きを行動や言葉によって表現することが大切である。例えば、「いいや、わたしが行かねば・・・」（開発例1）「・・・最後の最後まで見届けました。」（開発例2）などの記述の工夫が考えられる。ただし、史実に忠実な記述に心がけることは言うまでもない。また、児童生徒の発達の段階に応じて、歴史的な用語等、理解が難しい言葉には注釈をつけるなどの工夫が必要である。

⑥ 不要な場面や文言を削除する

先人の生い立ちや残した業績のすばらしさに注目した記述になりがちである。しかし、先人の生い立ちや残した業績については、ねらいとする道徳的価値に迫る上で必要ないものは削除し、必要最小限とすることが大切である。

（４）授業の実施**実践してみよう****効果的な展開**

- ・ 他の教科等との関連
- ・ 記念碑や作品、写真等の活用
- ・ 経歴年表の活用

伝記を基に開発した資料であることから児童生徒の生き方の手本ともなり得るが、資料を通して児童生徒に道徳的価値や行為を押し付けることがないように留意したい。

社会科や総合的な学習の時間などで学習した内容を生かしたい。その際、地域に残る石碑や建造物、先人が残した作品等の現在まで残る功績等、学習した内容を補助資料として扱うことも効果的

である。また、時代背景や生活状況等の補足説明が必要な場合があり、経歴年表等の活用も考えられる。

（５）体制・環境づくり**充実させよう****学校図書館等の整備**

- ・ 読書活動との関連

読書意欲を高める学校図書館や学級文庫などを整備し、計画的な利用とともにその機能の活用を図りたい。特に、道徳教育推進教師と司書教諭等との協力のもと、児童生徒の発達の段階や道徳性の育成に資する図書の選択や読み物資料の充実等

に配慮することが望まれる。広島県こども読書活動推進計画の活用を踏まえた環境整備が求められる。

教材開発例 1 「わたしが行かねば」

〔小学校中学年 主題：強い意志 内容項目：1の(2)〕



藤野 昌言ふじのしょうげんさんは、府中市の医師である。明治12年（1897年）に全国的に流行したコレラの治療に自身の危険も顧みず邁進し、身を捧げた。

地域の人々は、その死を悼み、現在、古香堂と呼ばれている祠堂を建て、感謝の意を表した。現在も、命日には、遺徳を偲ぶ昌言祭が行われている。



(1) 素材の収集・選定



集めてみよう

府中市は、府中味噌や府中ダンスなど古くから伝わるものづくりの伝統ある地域である。素材の収集にあたっては、まず、小学校中学年用の社会科副読本から地域の特色ある伝統や文化、自然、地域に貢献した人物を調べた。また、所属校内や市道徳推進協議会において、素材収集の依頼をした結果、多くの素材を集めることができた。

先人の伝記分野においては、その人物が府中市の地域の人々のために行った功績がはっきりしているか、現在の生活につながりがあるか、その人物の生き様から生きる勇気や知恵を感じることが出来るかという視点で絞っていった。とりわけ、「藤野昌言」は、医者として当時わかっていなかった「コレラ」の治療に尽くした歴史的な史実がはっきりしていること、また、現在も「昌言祭」という慰霊祭が行われていることなど、医者として治療をしたというだけでなく、貧しい患者からは治療費をとらない代わりに味噌や米をあげたり、葬式の世話をしたり、慕ってくる若者を自分の家に住まわせて学問を教えたりするなど、より人間らしさが感じられた。中学年の社会科副読本にも「地域に貢献した人々」として取り上げられており、各教科等との関連も図りながら学習することも出来ることから、「藤野昌言」を素材として選定した。

(2) 情報の収集



探してみよう

○ 郷土資料（社会科副読本等）

まず、社会科副読本の作成者へ資料・情報提供のお願いをして資料を集めた。また、副読本作成のために使われていた参考文献を図書館で調べた。『府中人物伝』や遺族の方が書かれた『医師藤野昌言』、『もとやま2, 4号』などの資料から、藤野昌言の生い立ちや家系、医者としての患者への対応、また多くの学者たちと熱心に漢学の勉強をしたことなどの情報を収集した。

○ 地域の関係者（遺族・郷土史研究家へのインタビュー）

府中市教育委員会の協力を得て遺族の方へ連絡をとり道徳資料作成の承諾を得た。快く承諾していただいたが、昌言先生の功績のみが後世に残ってクローズアップされているが、当時同じ考えをもって同じように患者へ治療をしていた医者もいるので、昌言先生だけを取り上げられることには抵抗を感じるという遺族の方の願いも知ることが出来た。

府中市教育委員会の方と共に「昌言祭」へ参加し、慰霊祭の後の直らいの席で遺族の方、郷土史研究家の方の話を聞くことが出来た。



○ 情報通信ネットワーク（新聞記事）

新聞（昭和34年、31年、52年等）には、「古香堂」の所以、慰霊祭の続けられている様子などの記事が掲載されていた。また、藤野昌言の功績だけでなく、当時の社会情勢や風潮などを調べるために、新聞記者の方に依頼して当時の新聞記事を収集したところ、当時（明治）出版された新聞では流行が激しかったコレラを恐れて人々が「コロリ」と呼んでいたことなどが分かった。

（３）読み物資料の作成



書いてみよう

① 主題やねらいを決定する。

小学校解説では、強い意志について、「児童が自立し、よりよく生きていくためには、何事にも粘り強く取り組み、努力し続ける忍耐力も求められる。しかし、それは見通しもなく取り組むのではなく、よりよい自己を実現しようとする向上心と結び付いてこそ、前向きな自己の生き方が自覚されてくるといえよう。そのためにも、児童がより高い目標を立てたり、自分としての夢や希望を掲げたりして、その達成や実現への志をもち、勇気をもって取り組むことができるようにすることが重要になる。」とある。

また、中学年の段階においては、「自分がやらなければならないことだけではなく、更に自主性を発揮し、自分でやろうと決めたことに対しても積極的に取り組み、粘り強くやり遂げる精神を育てることが大切になる。そのためには、あきらめずに取り組むことに意義や、今よりよくなりたいと願い、努力しようとする姿について考えを深めていくことが求められる」とある。また、「心のノート」の関係ページには、キーワードとして「『今よりよくなりたい』という心をもとう」と示されている。

これらを確認し、「藤野昌言」を素材として、資料を作成するに当たっては、強い意志にねらいを焦点化し、昌言がやろうと決めたことは何なのか、また、決めたことに対して、積極的に取り組み、粘り強くやり遂げた姿を描くことが大切であると考えた。

② 対象となる学年の発達の段階や特性を把握する

中学年は、郷土（地域）のとらえが、自校の学校区から住んでいる市町の範囲にまで広がる段階である。また、「藤野昌言」については、社会科副読本でも取り上げられており、すべての児童が、名前は知っているが、具体的に地域の発展にどう貢献したのかまでは十分理解していない。また、石碑の存在や地域で行われている昌言祭に参加した体験がある児童はいなかった。

③ 登場人物や状況を設定する

〔具体的な場面設定と登場人物〕

○主人公 藤野昌言

- ・ 医者の家に生まれ、小さいときから人々を助ける父を見て育った。
- ・ どんな人に対しても、どんな病気に対しても人を助けようと忙しく往診に出かける。
- ・ お金が払えない患者には、味噌や米を置いて帰ることもよくあった。

○補助的な人物 家族

- ・ そばで昌言を見ていたが、疲れ果てた昌言を見かねて、体調が悪い日に往診を断るように進める。
- ・ 昌言の体のことが心配でたまらない。

○その他 近所の老人

- ・ 孫とおばあさんが急病にかかり、慌てて昌言のところに駆け込み、往診をお願いする。
- ・ 昌言先生なら助けてくれると信じている。



④ 中心場面（山場）を決め、大まかな起承転結を設定する。

史実に基づいて経歴を整理した。そして、昌言の考え方や生き方が表れ、人間的魅力が伝わるエピソードを中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	毎年10月6日に、藤野昌言さんの遺徳を偲ぶ「昌言祭」が、藤野家の子孫や関係者が集まり行われている。	昌言は、父親の死をきっかけに昌言が医者として生きていくことが、自分の目標であると心に決めた。また、医者になってからも患者に味噌や米を置いて帰ったり、熱心に勉学に励んだりした。	全国的にコレラが流行。多くの死者が出るが、原因も治療法もわからない。こういった状況の中で、医者として府中の人々の命を救うため研究を続けながら誠実に治療に当たった。 体調を崩した日も、要請に応え、患者の往診し、自らコレラに感染し命を亡くしてしまう。	地元の多くの人たちによって感謝の気持ちを込めた石碑が建てられた。 この慰霊祭を「昌言祭」と呼び百二十年以上経った今も続いている。

4コマ場面絵

⑤ 場面分けをもとに文章化する

⑥ 不要な文章や文言を削除する

推敲の流れ

初稿

ねらいとする道徳的価値を明確にするための改善

第二稿

主人公の迷い、人間的な弱さや葛藤を表すための改善

第三稿

子どもの多様な考えを引き出すための改善

最終稿

初稿

命がけの治療

府中市の府中公園の中にある「古香堂」で10月6日、たくさんの人が集まって慰霊祭を行っています。それには、こないわれがあります。

今から170年ほど前のことです。



府中市朝日町というところに藤野昌言という医者がありました。

昌言は、1832年、府中市に生まれ、10代から大阪に出て医者になるための勉強をしていました。19歳のある日、医者である父親の危篤の知らせが届き、大急ぎで府中に帰りました。しかし、当時のことです。府中に帰った時、お父さんはもう亡くなっていました。

昌言は、お父さんの後を継いで、ここ府中で医者になりました。昌言は、医者になってからも熱心に勉強を続けました。やがて、「昌言は名医だ」と評判が立ち、患者が次々とやってくるようになりました。昌言は、家で診察するだけでなく、頼まれれば往診に出かけました。貧しい家の患者からは治療費を取らず、

「これも薬のうち」

と、米や味噌を置いて帰ることもあり、そのかいあってたくさんの人が元気になりました。

1879年、昌言が47歳の年、中国大陸から九州に入ったコレラが全国的に流行しました。

コレラは、急に吐いたり下痢をしたりする伝染病で、当時は原因が分からなかったので、十分な治療もできず、とても恐れられていました。民家や道路から120メートルも離して小屋を立て、その小屋に入りきれないほどの患者を押し込み、元気な人たちから隔離しました。小屋の中から水を求めて道に這い出したまま、死ぬ者もいました。ここ府中でも、亡くなった人は1000人～2000人とも言われています。

周りの医者は、お金持ちの人からの往診さえ断るようなありさまでした。しかし昌言は、

「黙って見過ごすわけにはいかない。」

と言って、昼も夜も関係なく、食べることも寝ることも忘れるほど府中・芦品地方をかけまわり治療をつづけました。

昌言は、往診から帰ると、必ず家の外で着物を脱ぎ、身体を洗ってから家に上がりました。時には、患者の吐いたものや排泄物で汚れることもあったからです。

こんな日々が2か月ぐらい続いた頃のことです。その日も昌言は、朝早くから患者の治療でおおいそがしでした。しかし昌言は、いつもより体の調子がすぐれませんでした。

元気旺盛な昌言も今日に限って、

「まあ一服、ひとやすみだ。」

といって縁側に座って雲をながめていました。

ちょうどその時、一人の老人が訪れました。

「先生さま、おばあさんと孫が急病で難儀いたしております。どうか御診察をお願いします。」

と、玄関先の土間に腰をかがめてたのみ

「お願いでございます。二人の生命をお助けくださいますように。」

と、さらに手をついてたのみました。これからひとやすみと考えていた昌言でしたが、

「よし、往診いたしましょう。」

と答えました。いつになく力の無い声でした。診察するなり、

「これは、コレラの初期だ。ほっておいては大変なことになる。」

と言って、治療を始めました。治療を終えた昌言は、

「よかった、よかった、これで助かりますぞ。」

と、言ったかと思うと、その場に倒れ、近所の人々が昌言を自宅へ送りました。恐れられていたとおり、昌言もコレラに感染していたのです。病の床についても昌言は、高熱で苦しむ患者を心配し、コレラの治療法をうわ言で言い続けながら、その日の夜更けに亡くなってしまいました。

四八歳、10月6日の出来事でした。

コッホによってコレラ菌が発見されたのは、昌言が亡くなって4年後のことでした。



第2稿

ねらいとする道徳的価値を明確にするための改善

第2稿	改善点及びその理由
命がけの治療 府中市の府中公園の中にある「古香堂」で10月6日、たくさんの人が集まって慰霊祭を行っています。それには、こないわれがあります。 今から170年ほど前のことです。 現府中市朝日町というところに藤野昌言という医者がありました。 昌言は、1832年、府中に生まれ、10代半ばから大阪に出て医者になるための勉強をしていました。19歳のある日、「父危篤」という知らせが届き、大急ぎで府中に帰りました。しかし何日もかかって府中に帰り着いた時には、お父さんはもう亡くなっていました。 昌言は、<u>迷わず</u> ア お父さんの後を継いで、ここ府中で医者になりました。医者になってからも昌言は、熱心に勉強を続けました。やがて、「昌言は名医だ」と言われるようになり、患者が次々とやってくるようになりました。昌言は、家での診察はもちろん、往診にも出かけ、治療費が払えない家の患者には、ア 「これも薬のうち」と、<u>米や味噌を置いて帰ることもありました。</u> ア 1879年、昌言が47歳の夏、<u>恐怖の伝染病</u> イ 「コレラ」が全国的に流行しました。コレラは、急に吐いたり下痢をしたりする病気で、<u>ここ府中地方一帯にもみるみる内に広がり次々とコレラに感染しました。</u> イ 原因が分からない病気だったので、十分な治療ができず、<u>コロリコロリと亡くなっていくので、人々は、「コロリ、」と呼んでいました。</u> イ 1000人も2000人も次々と病人が亡くなっていく中、昌言は、<u>あせりとともに毎晩医学の本を読んでは、薬の調合を繰り返しました。</u> ウ 村役場は、患者を隔離して治療するため、家や道路から遠く離れた畑の中に小屋を建てました。その小屋には、<u>患者が日に日に増え、入りきれないほどになってしまいました。</u> イ 小屋の中から水を求めて道に這い出したまま、<u>死んでいく病人を目の当たりにして、昌言は、立ちすくみました。</u> エ 周りの医者たちは、どんなにお金を積んで頼まれても往診を断るようなありさ	ア 構成チェック票（例）項目⑦ 「叙述によく具象性を与えているか」 本人の意思の強さを表現するため「迷わず」という表現を加えた。 昌言自らが、診察、往診を進んで行っていたことをはっきりさせるため「たのまれれば」を削除し、「診察はもちろん」という表現に変更した。 「そのかいあってたくさんの人が元気になりました。」は削除した。 イ 構成チェック票（例）項目③ 「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」 コレラが流行した時期を具体化するとともに、「当時」という表現を削除した。 伝せん病であるコレラが、中国大陸から伝わってきたことなどは、コレラの恐ろしさとは直接、関係がないため削除した。 逆に、感染の恐ろしさと当時の、地域住民が混乱していた状況を詳しくする文章を加えた。 ウ 構成チェック票（例）項目⑤ 「適切な状況を設定しているか」 昌言が、自分の目指す医者になるために日々努力をし続けた姿を表す文章を加えた。 エ 構成チェック票（例）項目⑦ 「叙述によく具象性を与えているか」 人間として「恐怖」を感じながらも「人々を救いたい」という思いをより強く表す記述を加えた。また、詳しい説明は削除した。



までした。**イ** 昌言は、いてもたってもおられず、**オ** 昼も夜も関係なく、
食べることも寝ることも忘れるほど府中や芦品地方をかけまわり治療をつづけま
した。

昌言は、往診から帰ると、必ず家の外で着物を脱ぎ、丁寧に **オ** 身体をふい
てから家に上がりました。

こんな日々が2か月ぐらい続き、いつしか秋をむかえていました。そんなある
日、昌言は、診察時間も近づき、今日も朝早くから患者が来るだろうと気になり
ながらもどうしても体がだるく、診察室に足が向きませんでした。疲れ果てた昌
言を見るに見かねた家族から、

「今日は一日どうぞお休みなってください。」

とたのまれました。**カ** ちょうどその時、一人の老人が訪れました。

「先生さま、おばあさんと孫が急病で難儀いたしております。もしや、コロリに
かかったのでは・・・どうか御診察をお願いします。」

と、玄関先の土間に腰をかがめてたのみ

「お願いでございます。二人の生命をお助けくださいますように。」

と、さらに手をついてたのみました。昌言は、しばらくだまったまま考えていま
したが、重い体で立ち上がり、いつになく力のない声で、**キ**

「よし、往診いたしましょう。」

と答えました。診察するなり、

「これは、コレラの初期だ。ほっておいては大変なことになる。」

と言い、治療を始めました。

「よかった、よかった、これで助かりますぞ。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

家族から、何度も何度もお礼を言われました。

その途端、昌言はその場に倒れてしまいました。恐れていたとおり、昌言もコ
レラに感染していたのです。高熱で苦しみながらも昌言は、患者を心配しコレラ
の治療法をうわ言で言い続けながら、その日の夜更け、ついに命が切れてしま
いました。**ク**

昌言48歳、10月6日の出来事でした。

コッホによってコレラの原因がコレラ菌であると発見されたのは、昌言が亡く
なって4年後のことでした。

昌言の死後、地元の人たちはその死を惜しみ石碑を建てました。この慰霊祭を
地元の人たちは、「昌言祭」と呼び、今もなお120年以上も続いています。**ケ**

オ

構成チェック票（例）項目⑤
「適切な状況を設定しているか」

往診に走り回った昌言の気持
ちは、児童に考えさせたいと考
え、気持ちを直接、表現した部分
を削除した。

また、昌言が自分への感染と家
族への感染を恐れた思いを表現
するために、「丁寧に」という言
葉を加えた。

カ

構成チェック票（例）項目④
「登場人物のやりとりに無理は
ないか」

時間経過を季節の移り変わり
で表現した。また、長期間、治療
を続け、疲労がたまっている
記述を加え、体調が悪いという状
況を詳しくした。

さらに、昌言の体を心配する家
族の思いを加えた。

キ

構成チェック票（例）項目⑦
「叙述によく具象性を与えてい
るか」

元気なときとは違う心の葛藤
を表現し、往診することを決心す
るまでの昌言の気持ちを考えさ
せるため、「しばらく黙って考え
る」場面を設定した。

ク

構成チェック票（例）項目③
「子どもの発達段階に対応した
構造と内容をもつものであるか」

最期まで、自らの病気よりも、
患者への治療を考え続けた昌言
の思いが、中学年の児童に分かり
やすくなるよう表現を変更した。

ケ

構成チェック票（例）項目①
「子どもの興味・関心に沿ったも
のであるか」

地域に建立されている石碑や
毎年行われている慰霊祭（昌言
祭）について表現し、自分たちの
生活とのつながりをもたせるよ
うにした。



第3稿

主人公の迷い、人間的な弱さや葛藤を表すための改善

第3稿	改善点及び理由
わたしが行かねば コ 府中市の府中公園にある「古香堂」では、毎年10月6日に、<u>たくさんの人が集まります。</u> サ 今から170年ほど前のことです。 現在の府中市朝日町に藤野昌言という医者がありました。 昌言は、1832年、医者之家に生まれ、10代半ばから大阪に出て医者になるための勉強をしていました。 19歳のある日、「父危篤」という知らせが届き、大急ぎで府中に帰りました。しかし、7日目に府中に着いた時には、お父さんはもう亡くなっていました。<u>父の姿を見て育った昌言は、父の言葉「医術は、人のためのもの。人のために働きなさい。」が、忘れられませんでした。</u> シ 昌言は、迷わずお父さんの後を継いで、ここ府中で医者になりました。 医者になってからも昌言は、<u>府中市の人たちを病から救いたいという強い思いで熱心に勉強を続けました。</u> シ やがて、「昌言は名医だ」と言われるようになりました。昌言は、家での診察だけではなく、往診にも出かけました。そして、治療費が払えない患者には、 「これも薬のうち」 と、米やみそを置いて帰ることもありました。 1879年夏、<u>伝染病「コレラ」が全国的に流行し、府中地方一帯にもみるみる内に広がりました。コレラは、急に吐いたり下痢をしたりする病気で、当時は原因が分からなかったもので、十分な治療ができませんでした。うつった人はコロリコロリと亡くなっていくので、人々は、「コロリ」と呼んでいました。次々と病人が亡くなっていく中、</u> ス 昌言は、あせりとともに毎晩医学の本を読んでは、薬の調合をくり返しました。 <u>どんなにお金を積まれても往診をことわる医者もいる中、</u> セ 昌言はいてもたってもおられず、昼も夜も関係なく、食べることも寝ることも忘れるほどかけまわり治療をつづけました。 昌言は、往診から帰ると、必ず家の外で着物を脱ぎ、丁寧に身体をふいてから家に入りました。	コ 構成チェック票（例）項目⑤ 「適切な状況を設定しているか」 「命がけの治療」では、生命尊重を思わせる。強い意志をより明確化するために題を「わたしが行かねば」に変更した。 サ 構成チェック票（例）項目③ 「子どもの発達段階に応じた構造と内容をもつものであるか」 中学年の児童にとって「慰霊祭」という表現は、理解が難しい。また、この場面では、「慰霊祭」を理解する必要がないと考え「慰霊祭をおこなっています」を削除した。 また、「それにはこんないわれがあります」の部分も資料内容の把握には必要がないと考え、削除した。 シ 構成チェック票（例）項目⑤ 「適切な状況を設定しているか」 主題を強い意志としているが、資料の中に昌言が目指した医者としての「目標」が明確でなかった。そこで、「目標」が明確になるよう、どんな医者になろうとしたのか、父の遺した言葉等を加えた。 ス 構成チェック票（例）項目③ 「子どもの発達段階に応じた構造と内容をもつものであるか」 中学年の児童がより状況を把握しやすくなるよう変更した。コレラという病気の詳しい説明や隔離の経過、死者の人数は、ねらいとのかかわりで特に記述する必要がないと考え、削除した。



こんな日々が2か月ぐらい続き、いつしか秋をむかえていました。

ある日、診察時間も近づき、昌言は今日も朝早くから患者が来るだろうと気になりながらも体がだるく、どうしても診察室に足が向きませんでした。疲れ果てた昌言を見るに見かねた家族は

「今日は一日お休みになってください。」

とたのみました。ちょうどその時、一人の老人が駆け込んできました。

「先生さま、おばあさんと孫が急病で苦しんでおります。もしや、コロナにかかったのでは・・・お願いでございます。二人の生命をお助けください。」

と、玄関先の土間に手をついてたのみました。昌言は、しばらくだまったまま考えていましたが、ふらつく足で立ち上がりました。それを見た家族が、

「お願いします。おやめになってください。どうか今日だけは、お休みください。」

と、止めるのも聞かず昌言は、はっきりと

「往診いたしましょう。」

とこたえました。家族は、

「そんなことをしては、あなたが倒れてしまいます。」

涙ながらに押しとどめました。 **ソ**

「いいや、わたしが行かねば・・・」

昌言は、強くうなずいて往診に出かけました。 **タ**

診察するなり、

「これは、コレラの初期だ。ほうっておいては大変なことになる。」

と言い、治療を始めました。

「これで助かりますぞ。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

家族から、何度も何度もお礼を言われました。

そのとたん、昌言はその場に倒れてしまいました。昌言もコレラに感染していたのです。高熱で苦しみながらも昌言は、患者を心配し、コレラの治療法をうわ言で言い続けながら、その日の夜更け、ついに息を引き取りました。 **チ**

昌言47歳。10月6日の出来事でした。

ツ

削除した部分

彼に命を助けてもらった **チ** 地元の人たちは、感謝の気持ちを込め石碑を建てました。このお祭りを「昌言祭」と呼び、120年以上経った今も続いています。

セ

構成チェック票（例）項目④
「登場人物の取り合わせややりとりが無理がないか」

往診に出かけた医者とは、昌言ただ一人ではなかったという史実に基づき、表現を変更した。

ソ

構成チェック票（例）項目⑤
「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」

昌言が、自分の体調だけではなく、家族の思いも含めた迷いやそれでも医者としての志を貫く強い意志を強調するために、家族が反対する会話を加えたり、決意した言葉を発する前の行を空けたりする工夫を行った。

タ

構成チェック票（例）項目⑦
「叙述によく具象性を与えているか」

昌言の強い意志が込められた決意を表すために、「いいや、私が行かねば・・・」という表現に変更した。また、「強くうなずいて」という表現を加えた。

チ

構成チェック票（例）項目⑦
「子どもの発達段階に応じた構造と内容をもつものであるか」

中学年児童により分かりやすくなるよう、具体性ある表現に変更した。

ツ

構成チェック票（例）項目③
「子どもの発達段階に応じた構造と内容をもつものであるか」

コレラ菌の発見は、ねらいとのかかわりで特に記述する必要がないと考え、削除した。



最終稿

子どもの多様な考えを引き出すための改善

最終稿	改善点及び理由
わたしが行かねば 府中市の府中公園にあるお堂 テ では、毎年10月6日に、たくさんの人が集まります。 今から170年ほど前のことです。 現在の府中市府中町朝日町に藤野昌言 テ という医者がありました。 昌言は、天保13（1832）年、テ 医者之家に生まれ、10代半ばから大阪に出て医者になるための勉強をしていました。 19歳のある日、「父危篤」という知らせが届き、大急ぎで府中に帰りました。しかし7日目に府中に着いた時には、お父さんはもう亡くなっていました。 父の姿を見て育った昌言は、父の言葉「医術は、人のためのもの。人のために働きなさい。」が、忘れられませんでした。昌言は、迷わずお父さんの後をついで、ここ府中で医者になりました。 医者になってからも昌言は、府中市の人たちを病から救いたいという強い思いで熱心に勉強を続けました。やがて、「昌言は名医だ」と言われるようになりました。昌言は、家での診察だけではなく、往診にも出かけました。そして、治療費が払えない患者には、 「これも薬のうち」 と、米やみそを置いて帰ることもありました。 明治12（1879）年 テ 夏、伝染病「コレラ」が全国的に流行し、府中地方一帯にもみるみる内に広がりました。コレラは、急にはいたり下痢をしたりする病気で、当時は原因が分からなかったため、十分な治療ができませんでした。うつった人はコロリコロリと亡くなっていくので、人々は、「コロリ」と呼んでいました。次々と病人が亡くなっていく中、昌言は、あせりを感じながらも テ 毎晩毎晩 ト 医学の本を読んでは、薬の調合をくり返しました。 どんなにお金を積まれても往診をことわる医者もいる中、昌言はいてもたってもい ナ られず、昼も夜も、食べることも寝ることも忘れて町中を ト かけまわり治療をつづけました。 昌言は、往診から帰ると、必ず家の外で着物を脱ぎ、丁寧に身体をふいてか	テ 構成チェック票（例）項目③ 「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」 中学年の児童にとって、「古香堂」という言葉は難しい。また、名称に諸説あるため、「お堂」という言葉に変更した。 藤野昌言の名前が難しいため、ふりがなを加えた。 時代を正確にするために「天保」、「明治」を加えた。 より昌言の思いを分かりやすくするため、「感じながらも」という文章に変更した。 ト 構成チェック票（例）項目⑦ 「叙述をよく具象性を与えているか」 昌言が、自分が決めたことについて、積極的に取り組もうとしている姿を強調するため、「毎晩」を繰り返したり、「町中」を加えたりした。



ら家に入りました。

こんな日々が2か月ぐらい続き、いつしか秋をむかえていました。

ある日、診察時間も近づき、昌言は今日も朝早くから患者が来るだろうと気になりながらも、その日は **ナ** 体がだるく、どうしても診察室に足が向きませんでした。疲れ果てた昌言を見るに見かねた家族は

「今日は一日お休みになってください。」

とたのみました。ちょうどその時、一人のおじいさん **ナ** が駆け込んできました。

「先生さま、おばあさんと孫が急病で苦しんでおります。もしや、コロリにかかったのでは・・・お願いでございます。二人の生命をお助けください。」

と、玄関先の土間に手をついてたのみました。それを見た家族は、

「お願いです。おやめになってください。どうか今日だけは、お休みください。」

と、止めるのも聞かず昌言は、ふらつく足で立ち上がり、

「往診いたしましょう。」

と、こたえました。

「そんなことをしては、あなたが倒れてしまいます。」

家族は涙ながらに押しとどめました。昌言は、しばらくだまったまま考えていました。 **ニ**

「いいや、わたしが行かねば・・・」

昌言は、家族をふり向き強くうなずいて往診に出かけました。

しんさつ

診察するなり、

「これは、コレラの初期だ。ほうっておいては大変なことになる。」 と言い、治療を始めました。

「これで助かりますぞ。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

おじいさんは、何度も何度もお礼を言いました。

そのとたん、昌言はその場に倒れてしまいました。昌言もコレラに感染していたのです。高熱で苦しみながらも昌言は、患者を心配し、コレラの治療法をうわ言で言い続けながら、その日の夜ふけ、ついに息を引き取りました。

昌言47歳。10月6日の出来事でした。

彼に命を助けてもらった地元の人たちは、感謝の気持ちを込め石碑を建てました。

このお祭りは「昌言祭」と呼ばれ、 **ナ** 120年以上経った今も続いています。

ナ

構成チェック票（例）項目⑥

「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」

中学年の児童にとって、より理解しやすくするために、言葉を付け加えたり、言い方を変更したりした。

ニ

構成チェック票（例）項目⑥

「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」

第3稿にある「しばらくだまったまま考えました」の記述、「いいや、わたしが行かねば・・・」の前の行を空けたこと、この二つがあることにより、昌言が葛藤する場面が二つに分かれてしまった。そのため、児童がどここの部分を考えてらよいか不明確になった。そこで、前の記述を後の記述の直前に移動させ、昌言が、葛藤する場面を一箇所にまとめて表した。



わたしが行かねば



府中市の府中公園にあるお堂では、毎年10月6日に、たくさんの人が集まります。

今から170年ほど前のことです。

現在の府中市府中町朝日町に^{ふじのしょうげん}藤野昌言という医者がありました。

昌言は、^{てんぽう}天保13（1832）年、医者いしやの家に生まれ、10代半ばから大阪に出て医者になるための勉強をしていました。

19歳のある日、「父危篤」^{きとく}という知らせが届き、大急ぎで府中に帰りました。しかし7日目に府中に着いた時には、お父さんはもう亡くな

っていました。

父の姿を見て育った昌言は、父の言葉「医術は、人のためのもの。人のために働きなさい。」が、忘れられませんでした。

昌言は、迷わずお父さんの後をついで、ここ府中で医者になりました。

医者になってからも昌言は、府中市の人たちを病から救いたいという強い思いで熱心に勉強を続けました。やがて、「昌言は名医だ」と言われるようになりました。昌言は、家での診察だけではなく、^{しんさつ}往診にも出かけました。そして、^{ちりょうひ}治療費が払えない患者には、「これも薬のうち」と、米やみそを置いて帰ることもありました。

明治12（1879）年夏、伝染病「コレラ」が全国的に流行し、府中地方一帯にもみるみる内に広がりました。コレラは、急にはいたりげりをしたりする病気で、当時は原因が分からなかったので、十分な治りようができませんでした。うつった人はコロリコロリと亡くなっていくので、人々は、「コロリ」と呼んでいました。次々と病人が亡くなっていく中、昌言は、あせりを感じながらも、毎晩毎晩医学の本を読んで、薬の調合をくり返しました。

どんなにお金を積まれても往診をことわる医者もいる中、昌言はいてもたってもいられず、昼も夜も、食べることも寝ることも忘れて町中をかけまわり治療をつづけました。

昌言は、^{おうしん}往診から帰ると、必ず家の外で着物を脱ぎ、丁寧に身体をふいてから家に入りました。

こんな日々が2か月ぐらい続き、いつしか秋をむかえていました。

ある日、^{しんさつ}診察時間も近づき、昌言は今日も朝早くから患者が来るだろうと気になりながらも、その日は体がだるく、どうしても^{しんさつ}診察室に足が向きませんでした。疲れ果てた昌言を見るに見かねた家族は

「今日は一日お休みになってください。」

とたのみました。ちょうどその時、一人のおじいさんが駆け込んできました。

「先生さま、おばあさんと孫が急病で苦しんでおります。もしや、コロリにかかったのでは……。お願いでございます。二人の生命をお助けください。」

と、玄関先の土間に手をついたのみました。それを見た家族は、

「お願いです。おやめになってください。どうか今日だけは、お休みください。」

と、止めるのも聞かず昌言は、ふらつく足で立ち上がり、

^{おうしん}「往診いたしましょう。」

と、こたえました。

「そんなことをしては、あなたが倒れてしまいます。」

家族は涙ながらに押しとどめました。昌言は、しばらくだまったまま考えていました。



「いいや、わたしが行かねば・・・」

昌言は、家族をふり向き強くうなずいて往診^{おうしん}に出かけました。診察^{しんさつ}するなり、
「これは、コレラの初期だ。ほうっておいては大変なことになる。」
と言い、治療を始めました。

「これで助かりますぞ。」

「ありがとうございます。ありがとうございます。」

おじいさんは、何度も何度もお礼を言いました。

そのとたん、昌言はその場に倒れてしまいました。

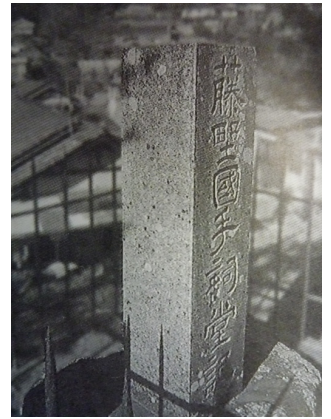
昌言もコレラに感^{かん}染^{せん}していたのです。

高熱で苦しみながらも昌言は、患者を心配し、コレラの治療法をうわ言で言い続けながら、その日の夜ふけ、ついに息を引き取りました。

昌言47歳。10月6日の出来事でした。

彼に命を助けてもらった地元の人たちは、感謝^{せきひ}の気持ちを込め石碑を建てました。

このお祭りは「昌言祭^{しょうげんさい}」と呼ばれ、120年以上経った今も続いています。



【参考文献】

藤野守一（著）「医師 藤野昌言」

本山町郷土史会（編）（1986）「もとやま2号」「もとやま4号」 本山町 本山町郷土史会

村上正名（著）（1981）「府中散策」 佐々木印刷出版

教材開発例2 「夢とロマンを追い求めて―彫刻家 圓鰐勝三―」

えんつぱかつそう



〔中学校 主題：理想の実現 内容項目：1の(4)〕

起承転結ではない
構成の工夫

〈素材―圓鰐勝三さん―について〉

- 尾道市御調町出身で日本彫刻界の巨匠である。文化功労者として列せられ、文化勲章を受章している。また、広島県名誉県民である。
- 県内及び全国の公共施設等に数多くの作品が展示、設置されている。
- 出身地に、その功績をたたえ、多くの作品を展示した記念館が設立されている。

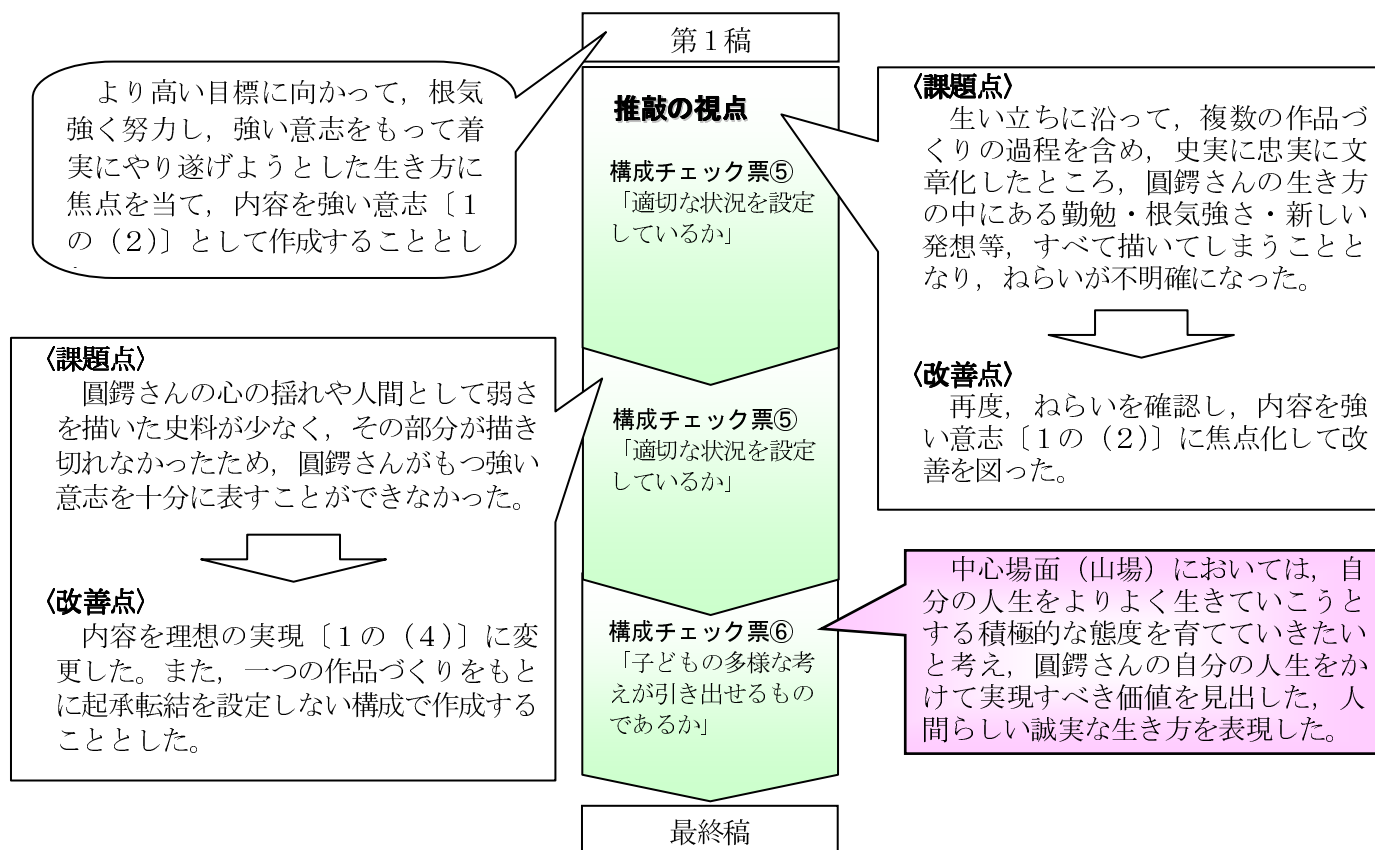
明治38年	御調郡河内村（現尾道市御調町）で誕生
大正10年	京都の彫刻師石割秀光氏の内弟子入り
昭和14年	第3回文展に「初夏」を出品し、特選
昭和50年	広島中央公園に「花の精」（大理石）を制作
昭和53年	東京池上本門寺に「仁王像一対（木彫）」を制作
昭和57年	文化功労者に選出
昭和63年	文化勲章の受章
平成元年	広島県名誉県民に選出
平成5年	伊勢神宮に「神馬」（木彫）を制作・奉納 圓鰐記念館開館
平成15年	享年98歳で没

圓鰐勝三さんの経歴

〈素材の選定、情報の収集のポイント〉

Q & A	
Q 1：生きることの勇気や意味の深さについて考えを深めることができますか。	A 1：圓鰐さんの生き方から、根気強さ、新しい発想や平和の希求、謙虚さなど人が生きる上で大切にしたいことを学ぶことができます。
Q 2：地域社会の発展への貢献等身近な人物の魅力が表れているものですか。	A 2：数多くの作品が県内の公共施設等に設置されています。また、出身地には、功績を称えた記念館も設立されています。
Q 3：史実考証のために、どのように史料収集を行いましたか。	A 3：圓鰐記念館へ訪問して聞き取りを行ったり、郷土資料（町史等）から情報を収集したりしました。

〈資料「夢やロマンを追い求めて―彫刻家 圓鰐勝三―」の作成〉



夢とロマンを追い求めて ～ 彫刻家 圓鰐^{えんつばかつぞう}勝三 ～

「きみが次に、何をイメージするのが、楽しみだ。」

これは、圓鰐さんが友人の彫刻家や圓鰐さんの作品を見た人から言われた言葉です。

当時の多くの彫刻家たちが、それぞれに専門の素材を決めていて、専門の素材以外で作品づくりをすると言われていた時代にあって、圓鰐さんは主流とする木彫り以外にも、ブロンズ、セメント、金属、陶器など、様々な素材で作品をつくっていきました。そんな作品づくりを続ける圓鰐さんに対して、まわりの人たちからは、非難めいた言葉を言われることもありました。

しかし、圓鰐さんはそうした非難にも負けずに、作品づくりに対しては「自分なりのものをつくりたい」というこだわりと信念をもって追求し続けました。

広島中央公園に、平和を願って作られた作品「花の精」があります。この彫刻は、初めはセメント彫刻の予定でしたが、欧州に旅行した依頼者の願いを受けて、大理石でつくられることになりました。

イタリアから取り寄せた大理石は、もとの重さ12トン、彫り上げたものでも7トン半あります。ヘルメットをかぶり、ドリルを持って彫っていく作業は、まるで道路工事のようでした。また、これまで手がけてきた作品の多くは木彫りの作品で、素材として大理石を使った経験は少なかったので、「石の目」⁽¹⁾もよくはわからず、普段とは勝手の違う作業の連続でした。そうした中でも、いつもと違う感触を楽しみながら、幾度も幾度も手でなでてみたり、さすってみたりしながら創作を続ける圓鰐さんの姿がありました。原型だけをつくって



「花の精」

おいて、あとは職人に任せることもできるのに、原型づくりから何トンもある大理石を削って仕上げるところまで、全て自分でつくりあげました。そして、出来上がった作品を設置するときも立ち会って最後の最後まで見届けました。

70歳を越えた頃、圓鰐さんは多摩美術学校（現・多摩美術大学）の名誉教授となりました。圓鰐さんは、学生たちがそれぞれ自分の思いを作品にぶつけ、粗削り^{あらけず}ながらもその情熱が、かもし出されている作品を見て感心していたそうです。そして、16歳で京都の彫刻師⁽²⁾の元に弟子入りし、基本技術

のマスターから始め、何年もかけて徐々に創作作品に取り組んでいった自分を思い起こしながら圓鏝さんはこう語っています。

「『芸術』の道は遠いし、広く、無限である。キャリアがあるから芸術性の高い作品が作れるかと言えば、そうではないのだ。ここが芸術の面白いところでもある。」

平成5年には、出身の尾道市御調町に文化・芸術の発信源として圓鏝記念館が建てられました。内弟子時代、わずかにもらう小遣いで見に行った帝展⁽³⁾や院展⁽⁴⁾の立体彫刻の作品を前に、自分の思いが熱くなるのを感じていた圓鏝さんの意思を継ぐように、今も多くの人が訪れています。

【注】

- (1) 石の節理（岩石中に見られる規則正しい割れ目）の方向のこと。
- (2) 建築彫刻や仏像などを手がける彫り師のこと。石割秀光氏のもとで修業した。
- (3) 帝国美術院展覧会の略。現在の日本美術展覧会（日展）。
- (4) 日本美術院展覧会の略。

【参考文献】

- 圓鏝勝三（1988）「わが人生」 御調文学 No. 22
圓鏝勝三（1989）「わが人生」 御調文学 No. 23
祖田浩一（1991）「県名誉県民小伝集 圓鏝勝三」 中国新聞社

(2) 自然

教材開発のポイント



着
想

(1) 素材の収集・選定



集めてみよう

自然への畏敬の念が感じられる素材

- ・ 自然の偉大さや生命の尊さ等、感性に訴えるもの
- ・ 自然と人とのかかわり（環境保護等）が見えるもの

地域の自然の偉大さや生命の尊さ等の感性に訴えるものや環境保護等の自然と人とのかかわりが見えるものといった視点は必要である。また、発達の段階に応じて、畏敬の念の「畏怖」の面を感じさせたい。

○ 素材の収集に当たって

自然は、今昔や四季、一日の時間の流れの中で様々な表情を見せる。そのため、指導者の自然に対する愛着と感性が大切である。地域の自然のすばらしさといった視点をもつとともに、東西や南北といった県の広さにも着目したい。また、自然を守るために取り組んでいる人も素材となり得る。

○ 素材の選定に当たって

(2) 情報の収集



探してみよう

地域の自然の特性等に着目

- ・ 現地見学、調査
- ・ 科学的な裏付けのための専門家等への取材

りを考える際には、自然とかかわってきた人々の思いを聞き取ることが必要である。例えば、環境保護と開発の両面から多面的・多角的な情報の収集に当たりたい。さらに、自然現象等の科学的な裏付けが必要となることもあり、その際には、専門家等への取材を含め地域の方や関係機関と連携をとることも必要である。

自然の情報収集においては、特に現地見学、調査が重要である。

情報の収集に当たっては、特定の時期に限らず、現地の四季の移ろいなど一年間見続け、写真やビデオにとっておくことも大切である。素材となる場所の地名や伝説もその地域の自然の実態をとらえる手がかりとなる。また、自然と人とのかかわ

(3) 読み物資料の作成



書いてみよう

自然と人とのかかわりに留意

- ・ 人間と自然とのかかわりの多面的・多角的な記述
- ・ 児童生徒の自然体験の把握

念などを取り扱う際には、児童生徒の発達の段階による内容の広がり意識していきたい。また、畏敬の念については、自然とかかわりにおいて尊敬と畏怖の面が含まれているが、畏怖の側面をも生かしたもののになるよう意識したい。

① 主題やねらいを決定する

主題やねらいを決定するに当たっては、ここでいう自然が「道徳の内容：3の視点」の自然であることに留意したい。

主題として、自然の偉大さや生命の尊さなど、感性に訴えるものや環境保護の必要性を訴えるものが多い。そうした環境保全や生命尊重、畏敬の

構成・推敲

**② 対象となる学年の発達の段階や特性等を把握する**

把握内容としては、地域の自然のとらえ、これまでの自然体験の有無、今後の自然体験活動の予定などが考えられる。また、児童生徒にとって地域の自然は身近すぎ、そのすばらしさに気付いていないことも多いことから、そのすばらしさをテーマに自由作文を書かせたり聞き取ったりして、自然のとらえを把握することも一つの方法である。

③ 登場人物や状況を設定する

登場人物や状況の設定は、人間と自然とのかかわりを多面的・多角的に表すことが望まれる。その際、事実や現実とかけ離れないようにすることに留意したい。

④ 中心場面（山場）を決め、大まかな起承転結を設定する

自然の偉大さや生命の尊さなどが児童生徒に伝わるエピソードの挿入が求められる。感情をもたない自然を題材とする場合には、自然と人、人と人とのかかわりにおける登場人物の気持ちを通して自然を見ていく場面設定が必要である。

⑤ 場面分けをもとに文章化する

登場人物の気持ちを描く場合、自然への見方や考え方に起伏や変化をもたせて表現することが大切である。また、自然のすばらしさに気付かせるためには、「母なる山、恐羅漢」（開発例1）「どうぶつたちが生き生きとこの森を駆け回るようになったのです。」（開発例2）など自然の情景について比喻や副詞を効果的に使った描写を工夫するとともに、例えば、「日本一夕日が美しいといわれている〇〇の風景に負けないくらいの美しさである」といった比較の対象となるものを取り上げることも考えられる。さらに、地名等の特別な読み方については、ふりがなを入れることが必要である。

⑥ 不要な場面や文言を削除する

登場人物の地域の自然に触れた時の思いやかかわっている方とのふれあいを通して感じた思いについて、直接描いている場合には、行動や周りの情景描写から考えさせるよう言葉や文章の精選をしていくことが大切である。

（４）授業の実施**実践してみよう****効果的な展開**

- ・ 実施する時季等の配慮
- ・ 写真や映像の活用
- ・ 自然体験活動を生かした展開

児童生徒の自然体験活動を生かすことも考えられる。

自然にはその時季に感じるすばらしさがあることから、資料の内容に適した時季での実施や実際にその場に出かけるなどの工夫が考えられる。

四季や時間の流れによる自然の変化や美しさが一目で分かるように写真や映像等を補助資料として活用したり、自然にかかわってきた地域の方に話をしてもらったりすると効果的である。また、

（５）体制・環境づくり**充実させよう****環境美化の充実**

- ・ 美的情操の育成

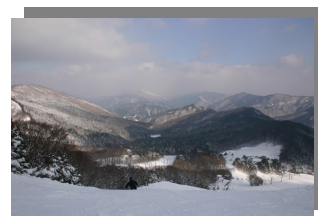
勤労体験活動やボランティア活動、文化にかかわる体験等を通して、自然や、優れた芸術作品等美しいものと出会う機会をつくりたい。そこでの体験を生かして、人間と自然、あるいは美しいものとのかかわりを多面的・多角的にとらえさせていくことが望まれる。

教材開発例 1 「恐羅漢」



〔中学校 主題：自然に対する畏敬の念 内容項目：3の（2）〕

恐羅漢山は、山県郡安芸太田町と島根県益田市との境にそびえ、県内最高峰（標高1346m）を誇る山である。その一帯は、西中国山地国定公園に指定され、1年を通して雄大な自然を感じることができるエリアとして知られ、多くの観光客でにぎわう。また、恐羅漢を覆うブナの木々の落ち葉は、その中に水分や栄養分をたっぷりと蓄え、流れ出る川や海の多くの生き物の命の源となっている。



（1）素材の収集・選定



集めてみよう

山県郡安芸太田町は西中国山地に位置し、県下最高峰の恐羅漢をはじめとする山々に囲まれ、日本を代表する渓谷の一つである三段峡など、西中国山地国定公園に代表される雄大な自然に恵まれた地域である。地域には、稲作が不利な環境の中にあってもあきらめずに用水路をつくりあげていった歴史や、現在の過疎化に悩む地域を盛り上げようとする活動（祭りなど）、伝統工芸や神楽・田楽などの伝統文化など、道徳の時間の資料になり得る多くの素材がある。

これらの中から恐羅漢を選定した。それは、恐羅漢という素材が、地域の特色や指導者自身が生徒に伝えたい道徳的価値を含むものであると考えたからである。今回は、その恐羅漢で、平成20年2月に起こったスノーボーダー遭難事故を取り上げ、恐羅漢の自然の雄大さ（敬）と、事故当時に見せた自然の厳しさ（畏）を考えさせることで、「自然への畏敬の念」について迫っていくことができると考えた。

（2）情報の収集



探してみよう

○ 情報通信ネットワーク（新聞記事）

最初に取り組んだのは、事故当時の新聞記事を検索することである。インターネットを利用して、当時の新聞記事を検索し、いつ、どこで、どんな事故が起こったのかといった基本情報を収集した。

○ 地域の関係者（インタビュー）

次に、当時捜索活動に中心に関わった町消防団員の方など、当時の事故の関係者へのインタビューを行い、事故経緯や事故当日の恐羅漢の様子を細かく聞いた。特に、資料には、捜索中の思いを取り入れていきたいと考え、捜索中に感じたことを丁寧に聞き取った。

○ 郷土資料（町史）

これまでの情報の収集から、恐羅漢と地域の人々の生活とのつながりがポイントと考えた。そこで、町史を閲覧し、恐羅漢を地域の人々がどのように感じてきていたのかを調べた。

（3）読み物資料の作成



書いてみよう

① 主題やねらいを決定する



中学校解説では、内容項目3の(2)について、「人は、自然の美しさに触れ、自然と親しむことにより自らの人生を豊かにしてきた面が強い。自然を愛護するということは、人間が自然の主となって保護し愛するということではなく、自然の生命を感じ取り、自然との心のつながりを見いだして共に生きようとする自然への対し方である。」とある。また、「心のノート」の関係ページには、キーワードとして、「悠久の時の流れ この大自然」、「大自然に何を想う」と示されている。

これらを確認し、「恐羅漢」を素材として資料を作成していくに当たっては、恐羅漢における遭難事故の話を通して、生徒たちが普段感じている恐羅漢の自然と対比させながら、自然に対する畏敬の念を深めることが大切であると考えた。

② 対象となる学年の発達の段階や特性を把握する

今回、対象とした中学校第三学年の生徒は、恐羅漢でスキー実習の体験活動を行っている。その体験活動を通して、おだやかな冬の恐羅漢のよさは体感しているが、他の季節における恐羅漢のよさや冬の厳しさについては実感として理解していない。こうした実態を踏まえて、自然への畏敬の念を深める資料となるよう留意した。

③ 登場人物や状況の設定する

〔具体的な場面設定と登場人物〕

○場面設定 恐羅漢でのスキー実習の準備をしている主人公が、父から恐羅漢での遭難事故の話を聞く。

○主人公 ひろし

- ・ 恐羅漢が大好きな中学生

○補助的な人物 ひろしの父

- ・ 恐羅漢での遭難事故で地元消防団員の一人として捜索活動に参加した。

④ 中心場面（山場）を決め、大まかな起承転結を設定する

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	翌日のスキー教室を楽しみに準備をしている主人公ひろしに、父が話しかてくる。	スノーボーダー遭難事故を振り返るひろしの父。(遭難から第一日目の捜索終了)	スノーボーダー遭難事故を振り返るひろしの父。(第二日目の捜索から発見させるまで。)	父の話を聞いた後、再びスキー教室の準備をしながら、恐羅漢の自然を考えるひろし。

4コマ場面絵

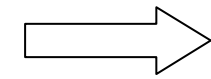
⑤ 場面分けをもとに文章化する

⑥ 不要な文章や文言を削除する



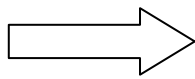
推敲の流れ

初稿



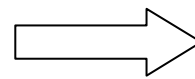
道徳的価値に迫る
中心場面を設定する
ための改善

第二稿



ねらいとする道徳
的価値を明確にする
ための改善

第三稿



考えさせたい部分
を削除するなど、道
徳的価値に迫るた
めの改善

最終稿

初稿

大好きな恐羅漢

明日は、毎年楽しみにしている恐羅漢でのスキー教室の日だ。ひろしは学校から帰って来たら、夕飯も食べずにスキーの手入れを一生懸命していた。恐羅漢は標高1346メートル、西中国山地の主峰であり、天気が良ければ瀬戸内海や日本海まで見渡すことができる山である。ひろしは、その恐羅漢でのスキーが大好きだった。恐羅漢の雪はパウダースノーといって、スキーをするにはもってこいの雪質だし、頂上付近から滑り下りるときの眺めは最高で、ひろしはこの眺めがお気に入りだからだ。夕飯も食べずに準備をしているひろしを心配して父がやってきた。

「何も食べずに手入れをするなんて、ひろしはそんなにスキーが好きなのか？」

「うん、とても好きだよ。中でも恐羅漢でのスキーは最高だよ。眺めはいいし、雪質だって抜群だからね。毎日でも行きたいくらいだよ。」

と、ひろしは得意気に恐羅漢のすばらしさを話した。すると、父は静かにひろしの横に座り、数年前に恐羅漢で起こった遭難事故の話をし始めたのだ。

平成20年2月2日、恐羅漢はいつものように絶好のスキー日和で、グレンデでは多くの人々がスキーやスノーボードを楽しんでいた。しかしその日の夕方、7人のスノーボーダーが頂上へ上がったきり下りて来ないとの連絡が入り、すぐに捜索願が出された。夜になると雪が降り始め、やがて吹雪へと変わっていった。スキー場の人たちは7人の安否を心配し、一晩中ナイター用の照明を点し続けていた。

夜は明け、2月3日の朝となった。朝9時30分から始まった本格的な捜索活動は困難を極めていた。頂上付近から麓に向かう隊と、麓から頂上に向かう隊に分かれての捜索だったのだが、昨夜から降り続けていた雪は1メートル50センチに達し、その雪が捜索隊の行く手をふさいでいたのだ。さらには、恐羅漢の自慢でもあるパウダースノーの新雪のため、かんじきを掃いても腰付近まで体がうまり、前進するには這いながら蛇行して進むしかなかった。それに、昨晚からの吹雪は朝になっても続いていて、視界は約1メートル程度しかなく、恐羅漢に慣れた人でさえも方角を見失うほどだった。行く手をふさぐ降り積もった雪と、容赦なく降り続ける雪は、捜索隊の体力を消耗させていった。そして、やっと二つの隊が出会ったときには、もうお昼になっていた。普段ならこんなに時間がかかることはない。

ひろしは父の話を聞きながら、普段とは違う恐羅漢の姿に驚いていた。

「本当にそんなことがあったの、お父さん。」

「ああ、本当の話なんだよ。」

ひろしは言葉を失った。そして、

「それで、行方不明になった7人はどうなったの？」と尋ねた。

父は再び捜索活動の話をゆっくりと始めた。

午前中の捜索活動を終え、頂上から下りてきた隊員が、「途中までは足跡があったのが見えなくなった。」と言っていた。その話を聞いていた2名の消防団員が、ひょっとしたらスキー場とは反対方向の匹見町方面（島根県益田市匹見町）に滑り下りたのではないかと考え、許可を得て匹見町へ向かった。匹見町では町の人たちが心配して、恐羅漢に続く道付近を探し回っていた。以前にも、恐羅漢で方角を見失って、匹見町の方に下山してく



る人がいたことから、もしかしたら今回もそうかもしれないと思い、町の人たちは家から出て探していたのだ。それに、夜中に遭難した人たちが下りてきたとき、人の足跡があると勇気づけられるのではないかと考えていた。そのことを知った消防団員2名は本部に戻り、翌日の搜索地域に匹見町を加えてくれるように願い出た。匹見町での搜索活動の許可が出たのは、行方不明になってから二日目の夜、午後9時を過ぎたころだった。

日付は変わって2月4日の朝がやってきた。匹見町での搜索には、陸上自衛隊を中心とする約20名があたった。搜索対象になった広見林道には、15センチメートル程度の雪が積もっていた。降った雪の多くは林道を覆う木々に積もり、まるで雪のトンネルのようになっていた。搜索を始めて一時間たったところで一度休憩をとり、再び搜索を始めて大きなカーブを曲がったときだった。道の向こうから歩いてくる二人の人影が目映った。すぐさま消防団員の一人が声をかけた。

「あんたらか、おらんようになったんは？」

「ハイ…」

「他は生きとるんか？」

「ハイ…」

声をかけた消防団員は、これ以上声にすることができなかった。「きっと、こちらに生きて下りてきているにちがいない。」と信じていたものの、実際に発見できたことがうれしくて、涙が止めどなくあふれてきていた。すぐさま後ろから自衛隊員が駆け出て、残りの5名も無事発見された。

遭難した7名は、最初の日の夕方には、廃校になった小学校を見つけ避難していた。翌日の2月3日は吹雪になっていたのも、廃校跡で一日を過ごしていた。上空ではヘリコプターの音がしていたので、校舎の板壁や畳をはがし、偶然持っていたガススプレーを使って火をつけて合図を送り、暖をとっていたらしい。おかげで7名は凍えることなく、全員無事に見つかったのだった。

話を終えた父は、数枚の写真をひろしに見せてくれた。それは、搜索活動中の写真だった。

「なあ、ひろしはさっき、恐羅漢が大好きだって言ってただろう。だからこそひろしには、恐羅漢のもう一つの顔も知っていて欲しいと思ったからこの話をしたんだ。」

そう言って父は、もう1枚の写真をひろしに手渡した。

さっきまでは不安げな表情だったひろしは、涙をぬぐって、にこりと笑い、

「うん、わかったよ、お父さん」

と言って、ふたたびスキーの準備を始めた。父から手渡された恐羅漢から見た山々の写真を横に、ひろしの心の中では、恐羅漢に対する思いが何か変わったようだった。

第2稿

道徳的価値に迫る中心場面を設定するための改善

第2稿	改善点及びその理由
恐 羅 漢 ア 明日は、毎年楽しみにしている恐羅漢でのスキー教室の日だ。ひろしは学校から帰って来てから、夕飯も食わずにスキーの手入れを一生懸命していた。恐羅漢は標高1346メートル、西中国山地の主峰であり、天気が良ければ瀬戸内海や日本海まで見渡すことができる山である。ひろしは、その恐羅漢でのスキーが大好きだった。恐羅漢の雪はパウダースノーといって、スキーをするにはもってこいの雪質で、頂上付近から滑り下りるときの眺めも最高で、ひろしはこの眺めがお気に入りだった。夕飯も食わずに準備をしているひろしを心配して父がやってきた。 「何も食わずに手入れをするなんて、ひろしはそんなにスキーが好きなのか？」 「うん、とても好きだよ。中でも恐羅漢でのスキーは最高だよ。眺めはいいし、雪質だって抜群だからね。毎日でも行きたいくらいだよ。」 と、ひろしは得意気に恐羅漢のすばらしさを話した。すると父は、 「ひろしは、数年前に恐羅漢で起こった遭難事故のことを覚えているか？」 と尋ねた。 「うん、たしか、お父さんも消防団員として搜索活動に参加していた事故だよ。」 イ 父はうなずいて、その遭難事故の話をし始めた。	ア 構成チェック票（例）項目② 「子どもの心に訴えるものか」 自然への畏敬の念を考えたとき、「敬」の捉えを「大好き」という程度のもものではいけないと考え、恐羅漢に対する多様な考えを引き出すために、題を「大好きな恐羅漢」から「恐羅漢」に変更した。 イ 構成チェック票（例）項目④ 「登場人物の取り合わせとやりとりに無理がないか」 父が搜索活動に参加しているという設定にすることで、遭難事故を主人公にとってより身近なところで起こった事故であるという設定とした。



平成20年2月2日、恐羅漢はいつものように絶好のスキー日和で、ゲレンデでは多くの人々がスキーやスノーボードを楽しんでいた。しかしその日の夕方、7人のスノーボーダーが頂上へ上がったきり下りて来ないとの連絡が入り、すぐに搜索願が出された。夜になると雪が降り始め、やがて吹雪へと変わっていった。スキー場の人たちは7人の安否を心配し、一晩中ナイター用の照明を点し続けていた。

夜は明け、2月3日の朝となった。朝9時30分から始まった本格的な搜索活動は困難を極めていた。昨夜から降り続けていた雪は1メートル50センチに達し、恐羅漢自慢のパウダースノーでは、体が^(注2)かんじきを掃いていても腰付近までうまり、手で雪をかき分け、這うように蛇行して進むしかなかった。それに、昨晩からの吹雪は朝になっても続いていて、視界は1メートル程度しかなく、恐羅漢をよく知る人でさえも方角を見失うほどだった。搜索隊は二次遭難を避けるために、それぞれの体を命綱でつなぎ前進を続けた。一步間違えれば命をも奪われてしまう。もう恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった。**ウ** 行く手をふさぐ降り積もった雪と、容赦なく降り続ける雪は、搜索隊の体力を消耗させていった。頂上付近から麓に向かう隊と、麓から頂上に向かう隊に分かれて搜索していた二つの隊が出会ったときには、もうお昼になっていた。普段ならこんなに時間がかかることはない。

エ

削除した部分

午前中の搜索活動を終え、搜索隊がもどった現地搜索本部では、疲労と絶望感の中、重たい空気が流れていた。**オ**

頂上から下りてきた隊員が、「途中までは足跡があったのが見えなくなった。」と言っていた。その話を聞いた2名の消防団員が、ひょっとしたらスキー場とは反対方向の匹見町方面（島根県益田市匹見町）に滑り下りたのではないかと考え、許可を得て匹見町へ向かった。匹見町では町の人たちが心配して、恐羅漢に続く道付近を探し回っていた。以前にも、恐羅漢で方角を見失って、匹見町の方に下山してくる人がいたことから、もしかしたら今回もそうかもしれないと思い、町の人たちは家から出て探していたのだ。それに、夜中に遭難した人たちが下りてきたとき、人の足跡があると勇気づけられるのではないかと考えていた。そのことを知った消防団員2名は本部に戻り、翌日の搜索地域に匹見町を加えてくれるように願い出た。匹見町での搜索活動の許可が出たのは、行方不明になってから二日目の夜、午後9時を過ぎたころだった。

日付は変わって2月4日の朝がやってきた。匹見町での搜索には、陸上自衛隊を中心とする約20名があたった。搜索対象になった広見林道では、降った雪の多くが林道を覆う木々に積もり、まるで雪のトンネルのようになっており、15センチ程度の雪が地面に積もっているだけだった。昨日の恐羅漢とは別世界のものだった。**カ**

搜索を始めて1時間がたったところで一度休憩をとり、再び搜索を始めて大きなカーブを曲がったときだった。道の向こうから歩いてくる二人の人影が目についた。

すぐさま消防団員の一人が声をかけた。

「あんたらか、おらんようになったんは？」

「ハイ…」

「他は生きてるんか？」

「ハイ…」

声をかけた消防団員は、これ以上声にすることができなかった。「きっと、こちらに生きて下りてきているにちがいない。」と信じていたものの、実際に発見できたことがうれしくて、涙が止めどなくあふれてきていた。すぐさま後ろから自衛隊員が駆け出て、残りの5名も無事発見された。

キ

削除した部分

ウ

構成チェック票（例）項目②
「子どもの心に訴えるものであるか」

搜索活動について、羅列的に表現され、畏怖の部分が伝わりにくいことから文章構成を変更した

また、生徒たちが感じている恐羅漢とは違う光景がここにあることを強調するために、「もう恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった」という表現を加えた。

エ

構成チェック票（例）項目④
「登場人物の取り合わせとやりとりに無理がないか」

搜索活動の様子と父子の会話混ざっているなど、思考を分断してしまうおそれがある部分は削除した。

オ

構成チェック票（例）項目②
「子どもの心に訴えるものであるか」

吹雪の中での搜索の深刻さをとらえさせるため、午前中の搜索を終えて帰ってきた搜索隊の失望感を描いた。

カ

構成チェック票（例）項目⑦
「叙述によく具象性を与えているか」

昨日と今日とで、全く違う自然の神秘性を感じさせるための表現を加えた。

キ

構成チェック票（例）項目④
「登場人物の取り合わせとやりとりに無理がないか」

救出された事実だけをおさえるため、遭難者の3日間を再度描いた表現を削除した。



ク

構成チェック票（例）項目⑤
「適切な状況を設定しているか」

父から手渡された捜索中の写真と恐羅漢頂上からみたパノラマ写真だけでねらいに迫るには無理があると考え、恐羅漢の自然について考えるきっかけとなるよう、「大きいんだよ、恐羅漢が…」を加えた。また、恐羅漢の頂上からの景色を見下ろした時のひろしの心情を考えることができるよう、スキー教室当日に、ひろしが恐羅漢頂上に立っている場面を設定した。

話を終えた父は、夕飯を早く食べるように伝えてあと、ひろしに向かって「大きいんだよ、恐羅漢は……。」
と言い残して居間に戻っていった。

翌日、恐羅漢は絶好のスキー日和だった。
ひろしは、恐羅漢の頂上に立って、しばらくあたりの景色を見つめていた。
「おい、ひろし行くぞ。」
友だちの声が聞こえてきた。
「ああ」

と返事をして、ひろしは恐羅漢の山を滑り降りていった。

ク

第3稿

ねらいとする道徳的価値を明確にするための改善

第3稿

改善点及び理由

恐 羅 漢

明日は、毎年楽しみにしている恐羅漢でのスキー教室の日だ。ひろしは学校から帰って来たら、夕飯も食べずにスキーの手入れを一生懸命していた。恐羅漢は標高1346メートル、西中国山地の主峰であり、天気が良ければ日本海や瀬戸内海まで見渡すことができる山である。また、恐羅漢から流れ出た水は、太田川の豊かな川の流れをつくり、私たちの生活を支えてくれている。ひろしは、そんな恐羅漢でのスキーが大好きだった。恐羅漢の雪は^(注1)パウダースノーといって、スキーをするにはもってこいの雪質で、頂上付近からの眺めも最高だ。それに、ひろしの祖父は恐羅漢スキー場の近くに住んでいて、幼い頃にはよく遊びに行っていた。冬はスキーで有名な恐羅漢だが、夏はブナ林に覆われ、所々にはササユリやナルコユリなどの花も見られ、登山に訪れた人の心を和ませてくれる。ひろしは、山菜を採りに出かけることも多くあり、その時には決まって祖父はひろしに、

「恐羅漢のおかげでわたらの生活は豊かになるとるんじゃけえの。」

と言っては、恐羅漢の話をたくさんしてくれた。その祖父の影響もあってか、ひろしの恐羅漢への思いは強かった。
夕飯も食べずに準備をしているひろしを心配して父がやってきた。

ケ

「母さんにおにぎりをつくってもらったから、これでも食べながら準備をしたらどうだ。」

「あつ、ありがとう。」

と言って、ひろしはおにぎりを一口にほおばった。

「明日は晴れるといいなあ。だって、明日は中学校生活最後のスキー教室だからね。」

と言って外の様子を見た。すると父は、

「ひろしは、数年前に恐羅漢で起こった遭難事故のことを覚えているか？」

と尋ねた。

「うん、たしか、お父さんも消防団員として捜索活動に参加していた事故だよね。」
父はうなずいて、その遭難事故の話をし始めた。

平成20年2月2日、恐羅漢はいつものように絶好のスキー日和で、ゲレンデでは多くの人々がスキーやスノーボードを楽しんでいた。しかしその日の夕方、7人のスノーボーダーが頂上へ上がったきり下りて来ないとの連絡が入り、すぐに捜索願が出された。夜になると雪が降り始め、やがて吹雪へと変わっていった。

ケ

構成チェック票（例）項目②
「子どもの心に訴えるものであるか」

「畏敬の念」の「敬」を感じさせる部分が、スキーシーズンの恐羅漢の自然のみの記述であった。そこで、生徒が気づいていない「敬」を感じさせるため、スキーを通して感じている「敬」の記述を減らし、恐羅漢の冬以外の自然を描くとともに、恐羅漢の近くに暮らす祖父を登場させ、恐羅漢と生活とのつながりを加えた。



スキー場の人たちは7人の安否を心配し、一晩中ナイター用の照明を点し続けた。

夜は明け、2月3日の朝となった。朝9時30分から始まった本格的な搜索活動は困難を極めていた。昨夜から降り続けていた雪は1メートル50センチに達し、恐羅漢自慢のパウダースノーでは、体が^(注4) かんじきを掃いていても腰付近までうまり、手で雪をかき分け、這うように蛇行して進むしかなかった。それに、昨晩からの吹雪は朝になっても続いていて、視界は1メートル程度しかなく、恐羅漢をよく知る人でさえも方角を見失うほどだった。搜索隊は二次遭難を避けるために、それぞれの体を命綱でつなぎ前進を続けた。一歩間違えれば命をも奪われてしまう。もう恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった。行く手をふさぐ降り積もった雪と、容赦なく降り続ける雪は、搜索隊の体力を消耗させていった。頂上付近から麓に向かう隊と、麓から頂上に向かう隊に分かれて搜索していた二つの隊が出会ったときには、もうお昼になっていた。普段ならこんなに時間がかかることはない。

午前中の搜索活動を終え、搜索隊がもどった現地搜索本部では、疲労と絶望感の中、重たい空気が流れていた。

頂上から下りてきた隊員が、「途中までは足跡があったのが見えなくなった。」と言っていた。その話を聞いた2名の消防団員が、ひょっとしたらスキー場とは反対方向の匹見町方面（島根県益田市匹見町）に滑り下りたのではないかと考え、許可を得て匹見町へ向かった。匹見町では町の人たちが心配して、恐羅漢に続く道付近を探し回っていた。以前にも、恐羅漢で方角を見失って、匹見町の方に下山してくる人がいたことから、もしかしたら今回もそうかもしれないと思い、町の人たちは家から出て探していたのだ。それに、夜中に遭難した人たちが下りてきたとき、人の足跡があると勇気づけられるのではないかと考えていた。それは、恐羅漢と共に生きてきた匹見町の人だからこそこできる行動だった。 **コ** 早速本部にもどった消防団員2名は、翌日の搜索地域に匹見町を加えてくれるように願い出た。匹見町での搜索活動の許可が出たのは、行方不明になってから二日目の夜、午後9時を過ぎたころだった。

日付は変わって2月4日の朝がやってきた。匹見町での搜索には、陸上自衛隊を中心とする約20名があたった。搜索対象になった広見林道では、降った雪の多くが林道を覆う木々に積もり、まるで雪のトンネルのようになっており、15センチ程度の雪が地面に積もっているだけだった。昨日の恐羅漢とは別世界のものだった。

搜索を始めて1時間がたったところで一度休憩をとり、再び搜索を始めて大きなカーブを曲がったときだった。道の向こうから歩いてくる二人の人影が目映った。

すぐさま消防団員の一人が声をかけた。

「あんたらか、おらんようになったんは？」

「ハイ…」

「他は生きとるんか？」

「ハイ…」

声をかけた消防団員は、これ以上声にすることができなかった。「きっと、こちらに生きて下りてきているにちがいない。」と信じていたものの、実際に発見できたことがうれしくて、涙が止めどなくあふれてきていた。すぐさま後ろから自衛隊員が駆け出て、残りの5名も無事発見された。

話を終えた父は、明日のスキー教室を楽しんでくるように伝えたあと、ひろしに向かって

「かなわないよ、恐羅漢には……。」 **サ**

と言い残して居間に戻っていった。

翌日、恐羅漢は絶好のスキー日和だった。

ひろしは、恐羅漢の頂上に立って、しばらくあたりの景色を見つめながら、幼い頃に聞いた祖父の話や昨夜の父の話を思い出していた。

コ

構成チェック票（例）項目⑥

「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」

匹見町の人々がとっていた行動が、恐羅漢という自然とともに生きてきた人々の知恵であることを知らせるための表現を加えた。

サ

構成チェック票（例）項目⑥

「叙述によく具象性を与えているか」

「大きいんだよ、恐羅漢は……。」を「かなわないよ、恐羅漢には……。」に変更し、よりねらいとする道徳的価値に迫りやすくした。



私たちを守り生活を豊かにしてくれる恐羅漢
時には人の命をも飲み込んでしまう程に荒れ狂う恐羅漢

どちらが本当の恐羅漢なんだろう。

シ

「おい、ひろし行くぞ。」
友だちの声が聞こえてきた。
「ああ」

と返事をして、ひろしは恐羅漢の山を滑り降りていった。

シ

構成チェック票（例）項目⑤
「適切な状況を設定しているか」

気づかせたい道徳的価値を明確にするため、具体的に恐羅漢の頂上でひろしが何を考えているかが分かる文章を加えた。

最終稿

考えさせたい部分を削除するなど道徳的価値に迫るための改善

最終稿	改善点及び理由
恐 羅 漢 明日は、毎年楽しみにしている恐羅漢でのスキー教室の日だ。ひろしは学校から帰って来てから、夕飯も食わずにスキーの手入れを一生懸命していた。恐羅漢は標高1346メートル、西中国山地の主峰であり、天気が良ければ日本海や瀬戸内海まで見渡すことができる山である。また、恐羅漢の雪はパウダースノーといって、スキーをするにはもってこいの雪質で、頂上付近からの眺めも最高だ。ひろしは、そんな恐羅漢でのスキーが大好きだった。それにもう一つ、ひろしにとって恐羅漢は特別な山でもあった。 ひろしの祖父は、恐羅漢スキー場の近くに住んでおり、幼い頃からよく遊びに行っては山の中を探検していた。冬はスキーで有名な恐羅漢だが、夏はブナ林に覆われ、所々にはササユリやナルコユリなどの花も見られる。そんな恐羅漢の中でも、ひろしにとってお気に入りの場所があった。そこはちょっとした遊び場であり、恐羅漢周辺の山々を一望できる絶好の場所であった。 ある日、ひろしがいつものようにその場所で遊んでいると、祖父がやって来た。「ひろし、ここにおったんか。どうじゃ、ここから見る恐羅漢の眺めは。じいちゃんもお父さんも、小さい頃にはよくここに来て遊んでいたもんだ。」 「えっ、お父さんもここで遊んでいたの？」 ひろしは、びっくりすると同時に不思議な思いがした。 「恐羅漢はこのブナ林のおかげでたくさんの水を蓄えることができる。そして、その水は少しずつ柴木川に流れ込んでいき、それは、やがて太田川の豊かな川の流れへと変わっていくんだ。言わば太田川にとっては『母なる山、恐羅漢』ってところかの」 「母なる山、恐羅漢？」 ひろしは、祖父のこの言葉が心に残り、恐羅漢に興味をもつようになっていった。 ス 「明日は晴れるといいなあ。だって、明日は中学校生活最後のスキー教室の日だからね。」 と言って、外の様子を見ると雪が降り始めていた。ひろしはその雪を見て、 「このぐらゐの雪だったら、スキー教室をやっても平気だよな。」 と言うと父は、降り続ける窓の外の雪を見つめながら、消防団員として捜索隊に加わった、数年前の恐羅漢での遭難事故の話をし始めた。 セ 平成20年2月2日、恐羅漢はいつものように絶好のスキー日和で、ゲレンデでは多くの人々がスキーやスノーボードを楽しんでいた。しかしその日の夕方、7人のスノーボーダーが頂上へ上がったきり下りて来ないとの連絡が入り、すぐに捜索願が出された。夜になると雪が降り始め、やがて吹雪へと変わっていった。スキー場の人たちは7人の安否を心配し、一晩中ナイター用の照明を点し続けて	ス 構成チェック票（例）項目⑦ 「叙述によく具象性を与えているか」 恐羅漢のブナ林が多くの水を蓄え、太田川の豊かな川の流れを生み出しているという自然の豊かさや悠久の自然を感じさせる表現や「母なる山、恐羅漢」という言葉を入れ、畏敬の念の「敬」がより明確になるよう主人公と祖父との対話を整理した。 セ 構成チェック票（例）項目④ 「登場人物の取り合わせとやりとりが無理がないか」 父が遭難事故の話をする必然性をもたせるために、このぐらゐの雪なら大丈夫と思っている主人公を戒める意味で父が遭難事故の話をしはじめるという設定に変更した。



いた。

夜は明け、2月3日の朝となった。朝9時30分から始まった本格的な搜索活動は困難を極めていた。昨夜から降り続けていた雪は1メートル50センチにも達し、恐羅漢自慢のパウダースノーでは、体がかんじきを掃いていても腰付近までうまり、手で雪をかき分け、這うように蛇行して進むしかなかった。それに、昨晚からの吹雪は朝になっても続いていて、視界は1メートル程度しかなく、恐羅漢をよく知る人でさえも方角を見失うほどだった。搜索隊は二次遭難を避けるために、それぞれの体を命綱でつなぎ前進を続けた。一步間違えれば命をも奪われてしまう。もう恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった。行く手をふさぐ降り積もった雪と、容赦なく降り続ける雪は、搜索隊の体力を消耗させていった。頂上付近から麓に向かう隊と、麓から頂上に向かう隊に分かれて搜索していた二つの隊が出会ったときには、もうお昼になっていた。普段ならこんなに時間がかかることはない。

午前中の搜索活動を終え、搜索隊がもどった現地搜索本部では、疲労と絶望感の中、重たい空気が流れていた。そんな中、若い消防団員の一人が激しく吹雪く恐羅漢をにらみつけて言った。

「こんな恐羅漢は初めてだ。」

すると年配の消防団員が、かじかんだ手を温めながら、静かに答えた。

「いいやそれは違う。恐羅漢は昔からずっと、この地域の自然とともに変わらずその姿を横たわらせているんだ。何も語らずじつとな…。」

ソ

頂上から下りてきた隊員が、「途中までは足跡があったのが見えなくなった。」と言っていた。その話を聞いた2名の消防団員が、ひょっとしたらスキー場とは反対方向の匹見町方面（島根県益田市匹見町）に滑り下りたのではないかと考え、許可を得て匹見町へ向かった。匹見町では町の人たちが心配して、恐羅漢に続く道付近を探し回っていた。以前にも、恐羅漢で方角を見失って、匹見町の方に下山してくる人がいたことから、もしかしたら今回もそうかもしれないと思い、町の人たちは家から出て探していたのだ。それに、夜中に遭難した人たちが下りてきたとき、人の足跡があると勇気づけられるのではないかと考えていた。それは、恐羅漢と共に生きてきた匹見町の人だからこそできる行動だった。早速本部にもどった消防団員2名は、翌日の搜索地域に匹見町を加えてくれるように願い出た。匹見町での搜索活動の許可が出たのは、行方不明になってから二日目の夜、午後九時を過ぎたころだった。

日付は変わって2月4日の朝がやってきた。匹見町での搜索には、陸上自衛隊を中心とする約20名があたった。搜索対象になった広見林道では、降った雪の多くが林道を覆う木々に積もり、まるで雪のトンネルのようになっていた。地面には一五センチ程度の雪が積もっているだけだった。昨日の恐羅漢とは全く違い、優しささえ感じる別世界のものだった。

搜索を始めて1時間がたったところで一度休憩をとり、再び搜索を始めて大きなカーブを曲がったときだった。道の向こうから歩いてくる二人の人影が目についた。

すぐさま消防団員の一人が声をかけた。

「あんたらか、おらんようになったんは？」

「他は生きとるんか？」

声をかけた消防団員は、これ以上声にすることができなかった。「タ」「きっと、こちらに生きて下りてきているにちがいない。」と信じていたものの、実際に発見できたことがうれしくて、涙が止めどなくあふれてきていた。間もなく残りの5名も無事発見された。

話を聞き終えたひろしは身震いをして、すぐに窓の外に目をやった。雪はやみ、月明かりが窓から差し込んできていた。それを見て、ひろしは少しほっとした。

父は、明日のスキー教室を楽しんでくるように伝えたあと、ひろしに向かって

「大きいんだよ、恐羅漢は……。」

と言い残して居間に戻っていった。

ツ

ソ

構成チェック票（例）項目⑤
「適切な状況を設定しているか」

若年の消防団員の「こんな恐羅漢は初めてだ。」、年配の消防団員が「いいやそれは違う。…」という語りなど恐羅漢という自然の人間の力を超えた驚異を語る表現を加えた。

タ

構成チェック票（例）項目⑦
「叙述によく具象性を与えているか」

不要な会話を削除し、発見時のやりとりを整理した。

チ

構成チェック票（例）項目⑤
「適切な状況を設定しているか」

話を聞き終えた主人公の気持ち、身震いをするこやほっとしたという言葉で表した。

ツ

構成チェック票（例）項目⑤
「適切な状況を設定しているか」

第3稿で変更した「かなわないよ、恐羅漢には……。」という表現では、生徒の思考が広がらないと考え直し、「大きいんだよ、恐羅漢は……。」という表現に戻した。

チ



翌日、恐羅漢はいつもと変わらず、絶好のスキー日和だった。
ひろしは、恐羅漢の頂上に立ち、しばらくぼんやりとあたりを見つめていた。その恐羅漢の風景は、今までとは少し違って見えていた。 テ
「おい、ひろし行くぞ。」
友だちの声が聞こえてきた。
「ああ」
と返事をして、ひろしはストックにぐっと力を入れ、恐羅漢の山を滑り降りていった。

テ

構成チェック票（例）項目⑤
「適切な状況を設定しているか」

ねらいとする道徳的価値が表現としてはっきりと表れ過ぎていたため、2つの恐羅漢の表現を削除し、「恐羅漢の風景は、今までとは少し違って見えた。」という表現に変更した。

恐 羅 漢

明日は、毎年楽しみにしている恐羅漢でのスキー教室の日だ。ひろしは学校から帰って来たら、夕飯も食べずにスキーの手入れを一生懸命していた。恐羅漢は標高1346メートル、西中国山地の主峰であり、天気が良ければ日本海や瀬戸内海まで見渡すことができる山である。また、恐羅漢の雪はパウダースノー⁽¹⁾といって、スキーをするにはもってこいの雪質で、頂上付近からの眺めも最高だ。ひろしは、そんな恐羅漢でのスキーが大好きだった。それにもう一つ、ひろしにとって恐羅漢は特別な山でもあった。

ひろしの祖父は、恐羅漢スキー場の近くに住んでおり、幼い頃からよく遊びに行っては山の中を探検していた。冬はスキーで有名な恐羅漢だが、夏はブナ林に覆われ、所々にはササユリ⁽²⁾やナルコユリ⁽³⁾などの花も見られる。そんな恐羅漢の中でも、ひろしにとってお気に入りの場所があった。そこはちょっとした遊び場であり、恐羅漢周辺の山々を一望できる絶好の場所であった。

ある日、ひろしがいつものようにその場所で遊んでいると、祖父がやって来た。
「ひろし、ここにおったんか。どうじゃ、ここから見る恐羅漢の眺めは。じいちゃんもお父さんも、小さい頃にはよくここに来て遊んでいたもんだ。」
「えっ、お父さんもここで遊んでいたの？」
ひろしは、びっくりすると同時に不思議な思いがした。

「恐羅漢はこのブナ林のおかげでたくさんの水を蓄えることができる。そして、その水は少しずつ^{しばき}柴木川に流れ込んでいき、それは、やがて太田川の豊かな川の流れへと変わっていくんだ。言わば太田川にとっては『母なる山、恐羅漢』ってところかの」
「母なる山、恐羅漢？」

ひろしは、祖父のこの言葉が心に残り、恐羅漢に興味をもつようになっていった。

「明日は晴れるといいなあ。だって、明日は中学校生活最後のスキー教室の日だからね。」
と言って外の様子を見ると雪が降り始めていた。ひろしはその雪を見て、
「このぐらゐの雪だったら、スキー教室をやっても平気だよな。」
と言うと父は、降り続ける窓の外のを雪を見つめながら、消防団員として捜索隊に加わった、数年前の恐羅漢での遭難事故の話をし始めた。

平成20年2月2日、恐羅漢はいつものように絶好のスキー日和で、ゲレンデでは多くの人々がスキーやスノーボードを楽しんでいた。しかしその日の夕方、7人のスノーボーダーが頂上へ上がったきり下りて来ないとの連絡が入り、すぐに捜索願が出された。夜になると雪が降り始め、やがて吹雪へと変わっていった。スキー場の人たちは7人の安否を心配し、一晩中ナイター用の照明を点し続けていた。

夜は明け、2月3日の朝となった。朝9時30分から始まった本格的な捜索活動は困難を極めていた。昨夜から降り続けていた雪は1メートル50センチにも達し、恐羅漢自慢のパウダースノーでは、体がかんじき⁽⁴⁾を掃いても腰付近までうまり、手で雪をかき分け、這うように蛇行して進むしかなかった。それに、昨晚からの吹雪は朝になっても続いていて、視界は1メートル程度しかなく、恐羅漢をよく知る人でさえも方角を見失うほどだった。捜索隊は二次遭難を避けるために、それぞれの体を命綱でつなぎ前進を続けた。一歩間違えれば命をも奪われてしまう。もう恐羅漢はいつもの恐羅漢ではなかった。行く手をふさぐ降り積もった雪と、容赦なく降り続ける雪は、捜索隊の体力を消耗させていった。頂上付近から麓に向かう隊と、麓から頂上に向かう隊に分かれて捜索していた二つの隊が出会ったときには、もうお昼になっていた。普段ならこんなに時間がかかることはない。

午前中の捜索活動を終え、捜索隊がもどった現地捜索本部では、疲労と絶望感の中、重たい空気が流れていた。そんな中、若い消防団員の一人が激しく吹雪く恐羅漢をにらみつけて言った。



「こんな恐羅漢は初めてだ。」

すると年配の消防団員が、かじかんだ手を温めながら、静かに答えた。

「いいやそれは違う。恐羅漢は昔からずっと、この地域の自然とともに変わらずその姿を横たわらせているんだ。何も語らずじっとな…。」

頂上から下りてきた隊員が、「途中までは足跡があったのが見えなくなった。」と言っていた。その話を聞いた2名の消防団員が、ひょっとしたらスキー場とは反対方向の匹見町方面（島根県益田市匹見町）に滑り下りたのではないかと考え、許可を得て匹見町へ向かった。匹見町では町の人たちが心配して、恐羅漢に続く道付近を探し回っていた。以前にも、恐羅漢で方角を見失って、匹見町の方に下山してくる人がいたことから、もしかしたら今回もそうかもしれないと思い、町の人たちは家から出て探していたのだ。それに、夜中に遭難した人たちが下りてきたとき、人の足跡があると勇気づけられるのではないかと考えていた。それは、恐羅漢と共に生きてきた匹見町の人だからこそできる行動だった。早速本部にもどった消防団員2名は、翌日の搜索地域に匹見町を加えてくれるように願い出た。匹見町での搜索活動の許可が出たのは、行方不明になってから二日目の夜、午後9時を過ぎたころだった。

日付は変わって2月4日の朝がやってきた。匹見町での搜索には、陸上自衛隊を中心とする約20名があたった。搜索対象になった広見林道では、降った雪の多くが林道を覆う木々に積もり、まるで雪のトンネルのようになっていた。地面には15センチ程度の雪が積もっているだけだった。昨日の恐羅漢とは全く違い、優しささえ感じる別世界のものだった。

搜索を始めて1時間がたったところで一度休憩をとり、再び搜索を始めて大きなカーブを曲がったときだった。道の向こうから歩いてくる二人の人影が目映った。

すぐさま消防団員の一人が声をかけた。

「あんたらか、おらんようになったんは？」

「他は生きとるんか？」

声をかけた消防団員は、これ以上声にすることができなかった。「きっと、こちらに生きて下りてきているにちがいない。」と信じていたものの、実際に発見できたことがうれしくて、涙が止めどなくあふれてきていた。間もなく残りの5名も無事発見された。

話を聞き終えたひろしは身震いをして、すぐに窓の外に目をやった。雪はやみ、月明かりが窓から差し込んできていた。それを見て、ひろしは少しほっとした。父は、明日のスキー教室を楽しんでくるように伝えたあと、ひろしに向かって

「大きいんだよ、恐羅漢は……。」

と言い残して居間に戻っていった。

翌日、恐羅漢はいつもと変わらず、絶好のスキー日和だった。

ひろしは、恐羅漢の頂上に立ち、しばらくぼんやりとあたりを見つめていた。その恐羅漢の風景は、今までとは少し違って見えていた。

「おい、ひろし行くぞ。」

友だちの声が聞こえてきた。

「ああ」

と返事をして、ひろしはストックにぐっと力を入れ、恐羅漢の山を滑り降りていった。

【注】

- (1) 水分が少なく、スキーなどに快適な雪質のこと。
- (2) 日本特産で日本を代表するユリである。地域によっては、ヤマユリと呼ぶこともあり、最近ではその数も減ってきていると言われている。
- (3) 山林や丘陵地などに自生するユリ科ナルコユリ属の多年草で、北海道から九州、中国や朝鮮半島に自生している。白い花が列をなしている容姿が、鳥を追ひ払う鳴子に似ていたため、ナルコユリと呼ばれるようになったとされている。
- (4) 雪の上などを歩くとき、深く踏み込んだり滑ったりしないように、靴などの下につけるもののこと。

【参考文献】

中国新聞（平成20年）「恐羅漢7人不明」など関連記事

戸河内町（平成9年）「戸河内町史」



教材開発例2 「時をおよぐジラ」

〔小学校中学年 主題：自然愛 内容項目：3の(2)〕

地域の自然に親しみ、不思議さやすばらしさに感動させる工夫

〈素材—ショウバラクジラ—について〉

- 庄原市（中国山地）から発見されたクジラの化石である。
- 平成20年に新種と認定され、発見者の名前や地名が学名となっている。
- 現在、山の奥である場所が、数百万年前は、海の底であったことから、自然の不思議さや地球の雄大な変化に感動させられるものである。

新生代三期 (1600万年前)	庄原一帯は、古瀬戸内海であり、多数の海の生き物が生息していた。
新生代四期 (1000万年前)	この頃、現在の地形となった。
昭和初め頃	貝や魚の化石が発見され、地質学調査が始まる。
昭和56年	山岡隆信さんらが、クジラ三種を発見する。仮名「ショウバラクジラ」となる。
平成8年	庄原化石集談会が創設される。
平成20年	山岡さんらが昭和56年に発見したクジラが新種と認定され、「ヤマオカクジラ」と命名される。

〈素材の選定、情報の収集のポイント〉

Q & A	
Q 1：自然の偉大さや生命の尊さ等、感性に訴えるものですか。	A 1：山地からクジラの化石が発見された事実から自然の雄大な変化を感じ、素直に感動できるものです。
Q 2：自然と人間とのかかわりについてはどうですか。	A 2：人間も動植物も自然環境に適応して生活を営んでいることを感じさせることができます。
Q 3：科学的な裏付けをとりましたか。	A 3：専門家の方に取材し、庄原市一帯が、古瀬戸内海と呼ばれる海であったことは、通説となっていることを確認しました。

〈資料「時をおよぐクジラ」の作成〉



内容として、まず、三つを候補として考えて検討した。最終的には、生命尊重〔3の(1)〕で作成することとした。

勤勉努力〔1の(2)〕 小学校低学年
生命尊重〔3の(1)〕 小学校低学年
自然愛〔3の(2)〕 小学校低学年

クジラを主人公としてファンタジックに描き、悠久の時の流れにおける自然の不思議さやすばらしさ、地球の雄大な変化に感動させるものにできると考えた。

自然愛〔3の(2)〕 小学校低学年

中心場面（山場）において、死の世界になったと思っていた海が、命豊かな森に生まれ変わった場面での主人公の喜びを表現した。その際、「大きな声で呼びかけた・・・」「あたたかい目で・・・見続けた」のように、行動を通して、心の動きを表現することに留意した。

第1稿

推敲の視点

構成チェック票④
「登場人物の取り合わせとやりとりが無理がないか」

構成チェック票③
「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」

構成チェック票⑥
「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」

最終稿

〈課題点〉

絵本をイメージし、イラストの活用を考えていたため、文章だけでは伝わらないものとなった。

〈改善点〉

文章を補い、イラストがなくても、読み取れるものとする。また、空想的に描く中でも、基本的な設定は、事実に基づいたものとする。

〈課題点〉

表現を工夫したり、補足説明を加えたりしたが、小学校低学年では、悠久の時の流れについての理解が難しい。

〈改善点〉

内容は、自然愛〔3の(2)〕のままとし、自然の不思議さやすばらしさに感動できるよう、ファンタジックさは生かしつつ、表現を小学校中学年対象に変更する。



時をおよぐクジラ

むかしむかしのそのまたむかし、人間がこのちきゅう上にあらわれる前のお話です。そのころは、このちきゅうはしぜんゆたかで、どうぶつたちや魚たちの楽園でした。

クジラのショウちゃんは、ゆたかな海で生まれ、大すきなお父さん、お母さん、友だち、そして、多くのなかまとともに、楽しくくらしていました。

ショウちゃんは、このしぜんゆたかな海が大すきで、いつもおさん歩に出かけていました。数千びきの小魚のむれ、見たことのないようなふしぎな形をした生きもの、とってもきれいでうっとりするような魚たち、海のそこでゆらめく数え切れないほどの海草、そのたくさんの生きものとの出会いが、ショウちゃんにとって何よりのよろこびでした。

海のさん歩からもどったショウちゃんは、お友だちのノブちゃんと出会いました。

「ショウちゃん、また海のおさん歩に行っていたの。」

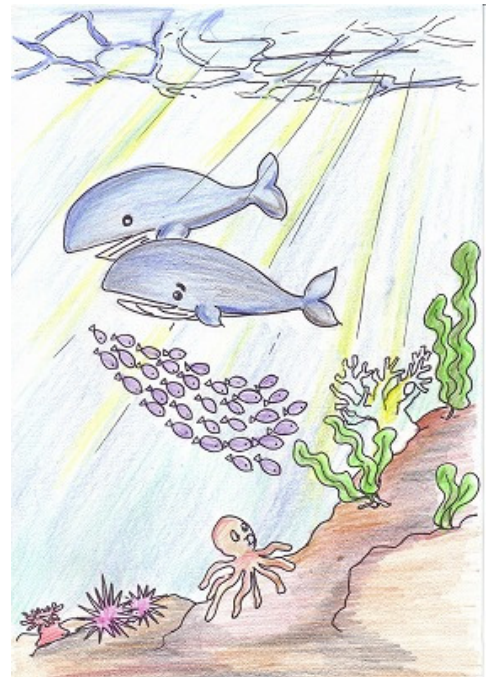
「うん、だってぼく、いろいろなお魚さんたちにあったり、お話ししたりするのが楽しいんだもん。」

「本当にショウちゃんは、この海が大すきなね。」

「ノブちゃんもいっしょに行こうよ。本当にたくさんの生きものが、この海にはいるんだよ。」

「うん、行こうか。じつは、わたしも、この海が大すきなんだ。」

二人とも、この海に生まれてきたことをしあわせに思っていました。



ところが、このしぜんゆたかな海に大へんなことがおこったのです。だんだんと海の水が引きはじめ、海草はひ上がり、多くの魚がいきたえていったのです。

「ぼくの大すきだった海が……。いのちいっぱい海が……。」

だけどショウちゃんにはどうすることもできませんでした。一つ一つきえていくいのちを見まもることしかできなかったのです。そして、

とうとうお友だちのノブちゃんも、お母さんもお父さんもみんななくなってしまう、ショウちゃんも、水がなくなった海のそこで、一人ぼっちで、よこたわってしまいました。

「このまま……この海も、しのせかいになっちゃうのかな……。」

「いやだ。そんなこと……、そんなせかいなんて……。」

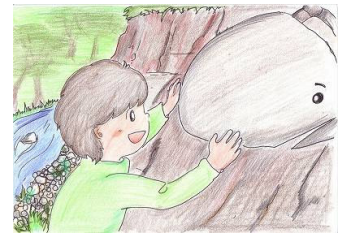
ショウちゃんの目から、なみだが一つぶこぼれおち、一つぶのたねの上におちました。そして、そのたねから出てきた小さなめを見ながら、とうとうショウちゃんも力づきていきました。



それから、長い長い時がすぎていきました。ショウちゃんのか石となって、岩の中でねむりつづけました。



どれぐらいの時がたったのでしょうか。ねむりにつけるショウちゃんに、小さな音が聞こえてきました。「チュン」「チュンチュンチュン」「ピ・ピ・ピ・ピー」「サヤサ ヤサヤ・・・」



「ん・・・。何の音だろう。」

ショウちゃんが目をあけると、そこには、一人の男の子が立っていました。

「クジラくん見い一つけた。」

ショウちゃんは、か石をほりに来た一人の男の子にはっ見されたのです。

そして、長いねむりからさめたショウちゃんの目の前には、思いもかけなかった光けいが広がっていました。そこは、たくさんの生きものにかこまれた緑ゆたかな森だったのです。



長い年月がたって、海の生きものたちが土にかえり、そしてえいようとなり、新しいいのちに生まれかわったのです。ひ上がった海に草がはえ木がしげり、そして、たくさんの虫や鳥、どうぶつたちが生き生きとこの森をかけ回るようになったのです。

「あのしんだ海が、こんなゆたかな森に・・・。」

「草がはえている。木がしげっている。鳥がとんでいる。どうぶつたちがかけ回っている。歌声が聞こえる。わらい声が聞こえる。みんな生きている。みんな生きているんだ。」

「ノブちゃん、お母さん、お父さん、見てごらん。ぼくたちの海が、こんなみどりゆたかで、どうぶついっぱい森に生まれかわったんだよ。」

ショウちゃんは、とってもとってもうれしくなって、今この森をかけ回っているどうぶつや草や木たちに、そしてむかしの海のなかまたちにとどくように、大きな声でよびかけました。

「ありがとう、みんな。」

そして、あたたかい目で、いつまでもこの森を見つづけていました。

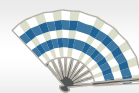
【参考文献】

古川義雄・山岡隆信著（2002年（平成14年））「備北層群」 庄原化石集談会

庄原市立比和自然科学博物館（2008年）「第61回特別展『備北層群産出のクジラ類化石』展示解説」絶版

(3) 伝統と文化

教材開発のポイント



着想

(1) 素材の収集・選定



集めてみよう

郷土への誇りが感じられる素材

- ・ 人類の文化的活動によって生み出された有形無形のもの
- ・ 祭りや地域行事など、地域の方の参加・協力を得やすいもの

○ 素材の収集に当たって

伝統と文化には、人と人とのつながりが凝縮されている。素材として地域の祭りが着目されやすいが、有形無形なものについて幅広く収集に当たりたい。また、地域のかくれた伝統と文化を発見していこうという思いをもち収集に望みたい。

○ 素材の選定に当たって

伝統と文化は、地域に根ざしたものが多く、地域の人々の思いや願いが脈々と受け継がれてきたものであることから、郷土や国への誇り、愛情が感じられるものや地域の方の参加・協力を得やすいものといった視点は必要である。

(2) 情報の収集



探してみよう

伝統と文化の継承に着目

- ・ 伝統と文化の体験
- ・ 郷土資料の収集や継承者へのインタビュー

伝統と文化の情報収集においては、特に資料作成者自身が、取り上げる伝統と文化を実際に体験してみることが望まれる。

情報の収集に当たっては、郷土資料の収集や継承者へのインタビューは欠かせない。その際、伝統と文化が継承されてきた経緯とともに、多くの人々の営みや継承上の課題など現在の状況にも着

目することが必要である。また、先人への感謝や文化への誇りなど伝統と文化を継承している方の思いを知ること大切にし、多くのエピソードを収集したい。さらに、社会科における学習内容や総合的な学習における伝統と文化にかかわる体験等を踏まえる必要がある。なお、政治的・宗教的中立性を保つことに留意することも大切である。

(3) 読み物資料の作成



書いてみよう

伝統と文化に対する継承者の思いに留意

- ・ 郷土への愛着や伝統と文化の継承という視点
- ・ 事実としての重みや迫力の記述

① 主題やねらいを決定する

主題やねらいを決定するに当たっては、昨今の現状として地域文化が育ちにくい状況にあることから、地方色をより大切にすることが求められる。

伝統と文化は、社会や集団において、人々が価値あるものとして現に行い、さらに未来に伝えていこうと考えているものであることから、郷土への愛着や伝統と文化の継承・発展という視点は欠かすことができない。ただし、郷土愛に限ったことではなく、

伝統と文化を大切にすることをはぐくむといった視点で幅広く主題やねらいを考えていきたい。

構成・推敲



② 対象となる学年の発達の段階や特性等を把握する

把握内容としては、児童生徒における伝統と文化についての意識、行事における体験の有無などが考えられる。また、普段の学校生活では味わう機会はありませんことから、外部講師を招聘し伝統芸能等の実演を観察させたり体験させたりして、児童生徒の身近な感覚を把握することも一つの方法である。

③ 登場人物や状況を設定する

登場人物や状況の設定は、伝統と文化の背景の深さから内容が難しくなりやすいことから、児童生徒が理解し共感しやすい平易なものであることが望まれる。事物ではなく人物を取り扱う場合は、伝統と文化に対する誇りと継承に焦点を当て、伝統と文化をクローズアップしたい。

④ 中心場面（山場）を決め、大まかな起承転結を設定する

伝統と文化の有形無形の美しさや郷土への誇り、愛情などが児童生徒に伝わるエピソードの挿入が求められる。主人公が、地域の伝統と文化にかかわる人物に出会い、今までもっていた地域の伝統と文化について、新しい視点を得たり、思いが変化したりする場面設定が必要である。

⑤ 場面分けをもとに文章化する

伝統と文化は実話、歴史などの事実を支えられており、事実としての重みや迫力を効果的に生かして表現することが大切である。例えば、「それを九百年も昔から続けてきた。」（開発例1）「百回試して、千回改める。仙三郎さんの言葉だよ。」（開発例2）などの記述の工夫が考えられる。また、「赤いレンガの煙突から立ち上る煙を見ながら、軽い足取りで家路へとついた」という文章における「立ち上る煙」を通して、事実を示すと同時に伝統と文化が継承されている証であることを表現する方法も考えられる。

⑥ 不要な場面や文言を削除する

地域の伝統と文化にかかわる人物の思いを、例えば、「〇〇町のために・・・」といった表現で直接表現してしまいがちである。特に中心場面では、心情描写を削除し、児童生徒から多様な考えが引き出せるようにすることが必要である。

（４）授業の実施



実践してみよう

効果的な展開

- ・ 実物（伝統的工芸品等）の活用
- ・ 動作化、役割演技等、表現活動の工夫
- ・ 地域人材の活用

伝統と文化には本物のもつ力があることから、伝統的工芸品、祭りや民俗芸能の映像、歴史的建造物の写真など実物を活用し、リアリティーを高める工夫を考えたい。また、様々な立場について考える役割演技等を取り入れることも効果的である。さらに、地域人材を活用し、事前・事後の指導を含め、話を聞いたり体験したりするなど共に

学ぶ機会を設けたい。なお、地域人材を活用する場合には、ねらいや時間配分等の綿密な打ち合わせが必要なのは言うまでもない。

（５）体制・環境づくり



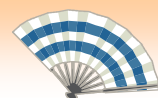
充実させよう

日常生活における環境整備

- ・ 家庭や地域社会との連携

教職員が伝統と文化に親しむ日常生活を心がけるなど、児童生徒が文化的薫りの高い環境の中で日常生活を過ごせるようにしたい。その際、教師や保護者をはじめ、地域の人々や先達などが児童生徒に託す願いを表した掲示や作品の展示の工夫などが望まれる。

教材開発例 1 「みぶの花田うえ」



〔小学校低学年 主題：町のじまん 内容項目：4の（5）〕

壬生の花田植は、山県郡北広島町（旧千代田町）で、毎年6月の第1日曜日に豊作を願って行われる伝統行事である。

現在、西日本に残る花田植えとしては最大の規模を誇り、その歴史の深さにより、昭和51年には、国指定重要無形民俗文化財に認定された。また、平成21年には、ユネスコの無形文化遺産候補に選ばれた。



（1）素材の収集・選定



集めてみよう

山県郡北広島町は、豊かな自然と伝統文化にあふれる地域である。地域に根ざした道德の資料となりうる素材について、北広島町内の小学校の道德教育推進教師に協力を求めた結果、素材として「テングシデ（大朝地区）」、「オオサンショウウオ」、「神楽」、「壬生の花田植」などが集まった。

その中で、「壬生の花田植」は、中世から続く伝統芸能として、ユネスコ世界無形文化遺産への推薦が決定しており、その保存や振興の機運が高まる素材である。また、地域の人たちのつながりによって昔と変わらずに続けられてきている田植えの終わりを祝う祭りであり、地域の方の参加・協力も得やすい。これらのことから、「地域への愛着をもたせる」という観点で、小学校低学年対象として「壬生の花田植」を資料の素材として選定することとした。

（2）情報の収集



探してみよう

○ 資料・パンフレット

北広島町の役場に出かけ、壬生の花田植に関する配布物などを探した。観光客向けのパンフレットが作成されており、壬生の花田植のいわれや「田植歌」「サンバイ」「早乙女」などの説明が掲載されていた。

町の広報誌には、世界無形文化遺産への推薦が決まったことによる特集記事が掲載され、花田植の説明や祭りの様子・花田植の保存に向けた地域や地元小学校の取組みが紹介されていた。また、実際に花田植を行っている田楽団のメンバーやこれまで花田植の保存に取り組んできた人へのインタビューが掲載されており、花田植を受け継いでいる人々のこれからも大切に受け継いでいきたいなどの花田植に対する思いが述べられていた。

○ 郷土資料

町道德教育推進協議会の研修で、芸北民俗芸能保存伝承館を訪ねた。そこでは、実際に祭りに使われる道具や衣装を見ながら、壬生の花田植のおこりや特徴について詳しく話を聞くことができた。さらに、壬生の花田植についての詳しいビデオやテレビで放映された映像などを見ることもできた。何十年も前の映像であっても、同じ衣装を身につけ、同じ歌を唄って踊っていることが分かり改めて、長い年月をかけて壬生の花田植が伝承されてきていることが分かった。



○ 地域の関係者

町道德教育推進協議会の研修会で、中学校の先生が保存会の方に会って取材をしているビデオを見ることができた。「地域の先輩方の中に入って、話をしたり練習をしたりする中でたくさんのことを教わってきた。」という旨のことが語られており、壬生の花田植の傳承が、地域のコミュニティの絆づくりや人々の楽しみの一つとして、長い年月に渡り続いてきたことを感じることもできた。

○ 情報ネットワーク

町教育委員会の協力をいただき、文化庁に提出した壬生の花田植の紹介DVDの提供を受けることができた。祭りの様子について短くまとめられており、壬生の花田植の様子を映像を通して詳しく知ることができた。

(3) 読み物資料の作成



書いてみよう

① 主題やねらいを決定する

小学校解説には、郷土愛について、「郷土とのかかわりに関するものであり、郷土の伝統と文化を大切に、郷土を愛する心をもった児童を育てようとする内容項目である。(中略) 自分の育った郷土は、自己の形成に大きな役割を果たすとともに、一生にわたって大きな精神的な支えとなるものである。郷土との積極的で主体的なかかわりを通して、郷土を愛する心を育て、郷土をよりよくしていこうとする態度を育成する必要がある。」とある。低学年の段階においては、「郷土の自然や文化に触れ、人々との触れ合いを深めることで、郷土への愛着を深め、親しみをもって生活できるようにすることが大切である」とあり、「こころのノート」の関係ページには、キーワードとして、「あなたが そだつ 町」「わたしを そだてる 町」が示されている。

これらを確認し、「壬生の花田植」を素材として、資料を作成していくに当たっては、児童が、自らの住む北広島町に素晴らしい祭りあることに気づき、自分の住む町の良さについて考え、大切に思う心情を育てることが大切であると考えた。

② 対象となる学年の発達段階や特性を把握する。

小学校低学年は、遊びや生活科などの学習を通して、家庭や学校を取り巻く郷土に目が向けられるようになる段階である。「壬生の花田植」については、見に行ったことがあり、地域の祭りとして知っているという実態である。また、「壬生の花田植」が、文化財としての価値がとても高いが、低学年の児童にとってその内容や価値を十分に理解するのは難しいため、「たくさんの人々が力を合わせて太鼓をたたき、苗を植える長年続いてきた素晴らしい祭りがある。」という点に絞って資料とし、祭りや地域に対する愛着を育てていきたいと考えた。

③ 登場人物や状況の設定する

〔具体的な場面設定と登場人物〕

主人公は、学習する児童の実態に近いものとするために、花田植を以前から知っているが、その価値については気づいていないという設定とした。また、以前から知っている花田植には、世界的にも認められるくらい素晴らしい価値があるということを主人公に感じさせたいと考え、アメリカ人であるトーマス先生を理想的な人物として登場させた。先生という職業にしたのは、児童にとって身近な大人であること、一般に低学年の発達の段階の価値判断基準となるのは、教師であることが多いことからである。



○日時 壬生の花田植の日（6月の第1日曜日）

○場所 花田植の会場

○主人公 小学校2年生の女の子（私）、北広島町在住

- ・ 家族と小さいころから花田植に来ている。
- ・ 壬生の花田植が好きである。しかし、それは多くの屋台があり、買い物をするのが楽しいからである。（花田植のことをよく知らず、見ることにはそれほど興味をもっていない）

○理想的な人物 トーマス先生

- ・ アメリカからやってきている英語助手の先生
- ・ 日本の伝統文化に興味をもっている。
- ・ 壬生の花田植についてアメリカにいるころからホームページを見て知っている。
- ・ くわしく花田植の素晴らしさについて私に話をする。

○その他 みよ子

- ・ 私の同級生であり、同じようにたくさんの屋台があるお祭りが好き。

④ 中心場面（山場）を決め、大まかな起承転結を設定する

トーマス先生の話聞いて花田植の価値に気付く場面を中心場面とし、起承転結を設定した。

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	私は昔から壬生の花田植が好きで家族と毎年行っている。	友だちのみよ子に出会い、一番楽しみにしていた買い物（露店屋台）の方に行って買い物をしている。	田んぼで花田植を見ていたトーマス先生に会う。トーマス先生から花田植の素晴らしさについての話を聞いて、壬生の花田植の素晴らしさに気づく。	花田植が終わり、学校に行ったら、友だちに壬生の花田植のすばらしさ話をしてあげたいなと感じる。

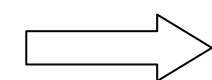
4コマ場面絵

⑤ 場面分けをもとに文章化する

⑥ 不要な文章や文言を削除する

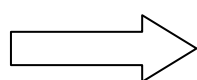
推敲の流れ

初稿



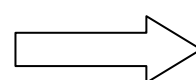
資料としての要件を満たすための改善

第二稿



ねらいが焦点化された資料とするための改善

第三稿



発達の段階を考慮し、資料の内容を明確に伝えるための改善

最終稿



初稿

私のじまん ～壬生の花田植～

私の町には「壬生の花田植」というお祭りが 있습니다。これは、6月の最初の日曜日にあります。私はこの1年に1回だけある、このお祭りが大好きです。だから、毎年、家族みんなで出かけています。

会場についた私は、わくわくして、楽しみでたまりません。私は、家族と一緒に田んぼの近くまで行って花田植を見ました。きれいな飾りをつけた牛が何頭もいて、ゆっくりと田んぼの中を歩いて行きます。白いふさふさのついたバチをもった男の人はくるくるとバチを回しながら太鼓をたたいて踊っています。そして、笠をかぶった女の人たちは歌を歌いながら田んぼに苗をどんどん植えていきます。とてもにぎやかな楽しいお祭りです。すると同じクラスの美代ちゃんに会いました。会場には金魚すくいや、わたがしの屋台のお店も出ています。「ねえねえ、お店を見て回ろうよ!」といわれた私は、手をつないで走って、屋台に行きました。

屋台を見ているうちに、田んぼの角の方に、英語を教えてくれているトーマス先生を見つけました。トーマス先生は、カメラを持ってにこにこしながら花田植を見ていました。

「こんにちは、トーマス先生。」

「こんにちは、素晴らしいお祭りだね。昔々の日本の人の様子がよく分かるよ。」

「先生も、このお祭りが好きなの。」

と聞くと、

「このお祭りはね、世界の宝物の中にも選ばれているんだ。アメリカにいるときから見てみたかったんだ。」

と話してくれました。私はそれを聞いて、うれしくなりました。

そして、私も美代ちゃんも花田植の続きを一生懸命見ました。

田んぼいっぱい苗が植えられ、お祭りが終わりました。見に来ていた、たくさん集まっていた人たちもつぎつぎに帰って行きました。明日、学校に行ったら壬生の花田植のことを友だちに話してあげようと思っています。

第2稿

資料としての要件を満たすための改善

第2稿	改善点及びその理由
私の町の宝物 ア ～壬生の花田植～ 私の町には「壬生の花田植」というお祭りが 있습니다。これは、6月の最初の日曜日にあります。毎年、家族みんなで出かけています。<u>私はこの1年に1回だけある、このたくさんの屋台が出るお祭りが、大好きです。</u> イ	ア 構成チェック票（例）項目⑥ 「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」 郷土の大切なものであるということを意識させるために、題を「私の町の宝物～壬生の花田植～」に変更した。また、会話部分の「この町には素敵な宝物があるね」「世界の宝物の中にも選ばれている」という表現にも通じさせた。



会場には金魚すくいやわたがしの屋台のお店も出ています。会場について私は、わくわくして、楽しみでたまりません。私は、最初に家族と一緒に田んぼの近くまで行って、花田植を見ました。

この「壬生の花田植」は、きれいな飾りをつけた牛が出てきたり、太鼓に合わせて着物を着た人たちが田植えをするのを見るお祭りです。しばらくすると同じクラスの友だち **ウ** に会いました。「ねえねえ、お店を見て回ろうよ！」といわれた私は、「うん、行こう！行こう！」と手をつないで走って、屋台に行きました。屋台の方に行くと、私たちと同じように、お祭りに来た友だちが何人もいました。私もみんなと夢中で買い物をしていました。 **エ**

ふと田んぼのほうを見ると、田んぼのすぐそばで、英語を教えてくれているトーマス先生を見つけました。私は、みんなと離れてトーマス先生のほうに走って行きました。 **ウ** トーマス先生は、カメラを持ってにこにこしながら花田植を見ていました。

「こんにちは、トーマス先生。」

「こんにちは、この町には素敵な宝物があるね。素晴らしいお祭りだね。昔々の日本人の様子がよく分かるよ。君たちが生まれるずっと前から、900年も前からやっているんだそうだよ。」

「900年！」

「しかも、こんなにたくさんの人が集まって、昔の人たちと同じようにやっているのはここしかないんだよ。」

「先生も、このお祭りが好きなの。」

と聞くと、

「このお祭りはね、世界の宝物の中にも選ばれているんだ。アメリカにいるときから見てみたかったんだ。」

と話してくれました。私はそれを聞いて、うれしくなりました。

それから私は花田植の続きを夢中で見ました。 **エ**

きれいな飾りをつけた牛が何頭もいて、ゆっくりと田んぼの中を歩いて行きます。白いふさふさのついたバチをもった男の人はくるくるとバチを回しながら太鼓をたたいて踊っています。そして、笠をかぶった女の人たちは歌を歌いながら田んぼに苗をどんどん植えていきます。とてもにぎやかな楽しいお祭りです。 **オ**

田んぼいっぱい苗が植えられ、お祭りが終わりました。見に来ていた、たくさん集まっていた人たちもつぎつぎに帰って行きました。終わると少しさみしくなりました。明日、学校に行ったら、屋台で買い物をしていた友だちに「私の町の宝物」のことを話してあげたいなあと思いました。

イ

構成チェック票（例）項目③

「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」

主人公の祭に対する思いをはっきりとさせておくために、「このお祭りが大好きです」の「この」の部分を「たくさんの屋台が出る」と変更した。

ウ

構成チェック票（例）項目③

「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」

主人公は私であるので、美代ちゃんを登場させて、最後まで主人公と一緒に行動させる必要性がなく、また、主人公と混同してしまう可能性があるため、美代ちゃんを「友だち」と表記するだけにとどめた。

それに伴い、主人公は、トーマス先生に気が付き友だちと離れて一人で先生のところに行って話を聞くように変更した。また、終末に出てくる私がよさを伝えたい相手を、ずっと買い物をしていた花田植を見ていなかった友だちにしよう変更した。

エ

構成チェック票（例）項目⑥

「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」

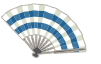
主人公が「夢中」になっているものが、「買い物」から「祭りをみること」へ変化したことを対比しやすくするための表現を加えた。

オ

構成チェック票（例）項目②

「子どもの心に訴えるものであるか」

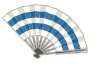
主人公の夢中で見ている様子や花田植の素晴らしさをより伝わりやすくするため、前半に詳しく書いていた花田植の様子について、前半は、簡単な記述にとどめ、後半部分に詳しく記述するよう変更した。



第3稿

ねらいが焦点化された資料とするための改善

第3稿	改善点及び理由
<u>～壬生の花田植～</u> カ ひろ子 キ の町には「壬生の花田植」というお祭りが 있습니다。これは、6月の最初の日曜日にあります。毎年、家族みんなで出かけています。ひろ子はこの1年に1回だけある、このたくさんの屋台が出るお祭りが、大好きです。 会場には金魚すくいや、わたがしの屋台のお店も出ています。会場についたひろ子は、わくわくして、楽しみでたまりません。ひろ子は、最初に家族と一緒に田んぼの近くまで行って、花田植を見ました。この「壬生の花田植」は、きれいな飾りをつけた牛が出てきたり、太鼓に合わせて着物を着た人たちが田植えをしたりするのを見るお祭りです。しばらくすると同じクラスの友だちに会いました。「ねえねえ、お店を見て回ろうよ!」といわれたひろ子は、手をつないで走って、屋台に行きました。屋台の方に行くと、ひろ子たちと同じように、お祭りに来た友だちが何人もいました。ひろ子もみんなと夢中で屋台を見て回りました。 ふと田んぼのほうを見ると、田んぼのすぐそばで、英語を教えてくれているトーマス先生を見つけました。ひろ子は、みんなと離れてトーマス先生のほうに走って行きました。先生は、カメラを持ってにこにこしながら花田植を見ていました。 「こんにちは、トーマス先生。先生もお祭りに来たのですか。」 「そうだよ。ずっと楽しみにしていたんだ。ひろ子さんもこのお祭りが好きかい。」 「ええ大好き。このお祭りは、たくさんの人が来て、お店もあってとっても楽しい。先生は、何を買ったの?」 「僕は、何も買っていませんよ。踊りを見に來ただけだよ。」 「えっ。それだけ?」 ク トーマス先生はにこにこしながら話してくれました。 「そうさ。花田植を見るのはとても楽しいよ。すごい秘密があるんだから。」 「どういうこと?」 「この壬生の花田植にはね、<u>お米をみんなで心を合わせて、一生懸命作ってきた日本の人の様子やすばらしさが入っているんだよ。</u>」 ケ 「へえ。そんなにすごいの?」 トーマス先生は、手を広げながら大きな声で楽しそうに話してくれました。 「いいかい。壬生の花田植はね、ずっと残しておきたい世界の宝の一つにも選ばれていて、アメリカにいたときから見てみたかったんだ。それがこの北広島町にあるんだよ。それを900年も昔から、町の人たちで教えあって、花田植をやっているそうだよ。」 「900年も!」	カ 構成チェック票（例）項目⑥ 「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」 低学年の児童にとって、「宝物」とはゲームであったり、思い出の品であったりするなど、有形なものとしてのとらえ方が強い。また、自らの住む地域に目を向け、場所や人々のつながりを、広げていくことがかえって困難になると考え、宝物というキーワードの設定をやめ、題も「壬生の花田植」と再度、変更した。 キ 構成チェック票（例）項目③ 「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」 実際の授業において、発問などを分かりやすくするために、主人公の名称表記を「私」から「ひろ子」に変更した。 ク 構成チェック票（例）項目④ 「登場人物の取り合わせとやり取りに無理がないか」 主人公とトーマス先生との会話は、すぐに本題に入るようにしていたが、自然な流れになるように、やり取りを増やした ケ 構成チェック票（例）項目③ 「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」 トーマス先生は、壬生の花田植の素晴らしさについて語るようにしている。その多くが、900年間受け継がれている、日本人の米づくりの様子が分かる、世界無形文化遺産に選ばれているという知識面である。 しかし、児童の発達の段階、既習の内容から考えて、これらが壬生の花田植の素晴らしさだと認識することは難しいため、知識面も残しつつ、「この町の人々は、力を合わせて米を作ったり、壬生の花田植を続けてきたりしてきた」ことに重点を置くよう、会話を加えた。



「そうだよ、この町の人は、900年も前から、田植えの仕事が終わりになるのを
祝いして、みんなで力を合わせてこの1年に1回のお祭りをずっと続けてきた
んだよ。」 ケ

ひろ子は目を丸くしました。そして、田んぼの方に顔を向けました。

色とりどりのきれいな飾りをつけた牛が何頭もいます。ゆっくりと田んぼの
中を歩いて田植えができる準備をしています。すると、男の人が、合図を出し
ながら歌を歌い出しました。笠をかぶった女の人たちは、それにあわせて一斉
に歌を歌います。そして、みんなで苗をどんどんと植えていきます。白いふさ
ふさのついたバチをもった男の人はくるくるとバチを回し、太鼓をたたいて踊
っています。たくさんの人がやっているのに動きがぴったりとそろっているの
です。苗を植えている女の人、太鼓をたたく男の人たちもみんな一生懸命で、
中には、汗をかいている人もいました。 コ

見ているお客さん達も笑顔でその様子を見えています。カメラで写真を撮って
いる人たちもいます。トーマス先生は、笛の音にあわせて体をゆらしています。
ひろ子は花田植の続きを夢中で見ていました。 サ

田んぼいっぱい苗が植えられ、お祭りが終わりました。気がつくと、ひろ子
は、立ち上がって誰にも負けない大きな拍手をしていました。 シ

コ

構成チェック票（例）項目⑤
「適切な状況を設定しているか」

「この町の人々は、力を合わせて米を作ったり、壬生の花田植を続けてきたりしてきた。」ということ
をより感じさせるため、後半の花田植の描写の部分に、踊っている人のがんばりや協力の様子が伝わるような表現を加えた。

サ

構成チェック票（例）項目⑥
「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」

多くの人たちが花田植を好きだということを感じさせるため、主人公とともに花田植を見ているお客さんたちやトーマス先生の様子を加えた。

シ

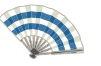
構成チェック票（例）項目⑦
「叙述によく具象性を与えているか」

「明日、学校に行って友だちに話す」という内容を削除し、主人公の心情の変化を大きな拍手をしている様子だけで描くように変更した。

最終稿

発達の段階を考慮し、資料の内容を明確に伝えるための改善

最終稿	改善点及び理由
ス ※全体の変更 ～みぶの花田うえ～ ひろ子の町には「みぶの花田うえ」というおまつりが、6月のさいしょの日よう日にあります。きれいなかざりをつけたうしが出てきたり、きものをきた人たちが、たいこにあわせて田うえをしたりするおまつりです。ひろ子はまい年、かぞくみんなで出かける、このおまつりが大好きです。 おまつりには金ぎょすくいや、わたがしのおみせも出ています。ひろ子は、わくわくしてたまりません。かぞくといっしょに田んぼのちかくまで行って、花田うえを見ようとしました。すると、おなじクラスのともしだちがやってきて「ひろ子ちゃん、おみせを見てまわろうよ。」 といいました。ともしだちと手をつないだひろ子は、はしって、おみせにいきました。	ス 構成チェック票（例）項目③ 「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」 全体的な文章の見直しを行い、最低限の文章量で児童が状況を把握できるよう、短く簡潔な表現とした。 使用する漢字を低学年の児童にとって適切なものだけにした。



た。そこには、ともだちがなん人もいて、ひろ子はむちゅうでおみせを見てまわりました。

田んぼのほうを見ると、えいごをおしえてくれているトーマス先生がいました。ひろ子は、みんなとはなれてトーマス先生のほうにはしっていきました。先生は、一ばんまえで花田うえを見ていました。

「こんにちは、トーマス先生。先生はおみせにいかないの？」

「ぼくは、なにもかわないよ。このおまつりを見に来たんだよ。」

「えっ。それだけ？」 **セ**

トーマス先生は、にこにこしながらはなしてくれました。

「そうさ。ぼくは、花田うえを見るのがずっとたのしみだったんだ。」

「どうしてそんなにたのしみなの？」

「それはね、このおまつりには、すごいひみつがあるからさ。」

「どういうこと？」

「このみぶの花田うえを見るとね、日本の人たちが、むかしからおこめをみんな
でこころをあわせてつくってきたことがわかるんだよ。」 **ソ**

「へえ。そんなにすごいの？」

トーマス先生は、手をひろげながら大きなこえでたのしそうにはなしてくれました。

「いいかい。みぶの花田うえはね、ずっとのこしておきたいせかいのたからの一つにもえらばれていて、アメリカにいるときから見てみたかったんだ。それがひろ子ちゃんのすんでいるこのきたひろしま町にあるんだよ。それを900年もむかしから、町の人たちでおしえあって、やってきているそうだよ。

「900年も！」

「そうだよ、この町の人、900年もまえから、田うえのしごとがおわりになるのをおいわいして、みんなで力をあわせて、この一年に一かいのおまつりをずつとつづけてきたんだよ。」

ひろ子は目をまるくしました。そして、田んぼのほうにかおをむけました。

いろとりどりのきれいなかざりをつけたうしが、なんともいます。ゆっくりと田んぼの中をあるいて田うえができるじゅんぴをしています。すると、男の人が、あいずを出しながらうたをうたい出しました。かさをかぶった女の人たちは、それにあわせていっせいにうたをうたいます。そして、みんなでなえをどんどんうえていきます。白いふさふさのついたバチをもった男の人、はくるくるとバチをまわし、たいこをたたいておどっています。たくさんの人がやっているのにごきがびったりとそろっているのです。なえをうえている女の人、たいこをたたき男の人たちもみんないっしょうけんめいで、中には、あせをかいている人もいました。

気がつくといろ子は花田うえをむちゅうで見えていました。 はっとしてまわりを見てみると、 **タ** おきやくさんたちもみんなむちゅうで花田うえを見ています。カメラでしゃしんをとっている人たちもいます。トーマス先生は、ふえの音にあわせてからだをゆらしています。みぶの花田うえを見ているたくさんの人たちは、どの人もみんなうれしそうです。ひろ子にはっこりとしました。 **チ**

セ

構成チェック票（例）項目⑤

「適切な状況を設定しているか」

主人公（ひろ子）とトーマス先生の会話の中で、ひろ子は買い物、トーマス先生は花田植を見ることを楽しみにしているということがはっきり分かるように会話の表現を変更した。

ソ

構成チェック票（例）項目③

「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」

低学年の児童にとって分かりやすい表現とするため、会話を文に変更した。

タ

構成チェック票（例）項目⑤

「適切な状況を設定しているか」

主人公の内面的な心の動きを強調するために副詞句を使用した表現を加えた。

チ

構成チェック票（例）項目⑦

「叙述によく具象性を与えているか」

ひろ子が「この町に花田植があって良かった。」という心情でいるということをさらに強く児童に感じさせるため、転の部分後半に、「壬生の花田植を見ているたくさんの人たちは、どの人もみんなうれしそうです。ひろ子にはっこりとしました。」を加えた。



田んぼいっぱいになえがうえられ、おまつりがおわりました。気がつく、ひろ子は、立ち上がってだれにもまけない大きなはく手をしていました。そして「あした、学校にいったら、おみせにいて花田うえを見ていなかったともだちに花田うえのことをいっぱいはなしてあげよう。」 ツとおもいました。

ツ

構成チェック票（例）項目⑥
「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」

児童が主人公になりきって考えを深めることができるように学校に行ったら友だちに花田植のことを教えてあげようとする場面を再度加えた。

～みぶの花田うえ～

ひろ子の町には「みぶの花田うえ」というおまつりが、六月のさいしょの日よう日にあります。きれいなざりをつけたうしが出てきたり、きものをきた人たちが、たいこにあわせて田うえをしたりするおまつりです。ひろ子はまい年、かぞくみんなで出かける、このおまつりが大すきです。

おまつりには金ぎょすくいや、わたがしのおみせも出ています。ひろ子は、わくわくしてたまりません。かぞくといっしょに田んぼのちかくまで行って、花田うえを見ようと思いました。すると、おなじクラスのともだちがやってきて

「ひろ子ちゃん、おみせを見てまわろうよ。」

といいました。ともだちと手をつないだひろ子は、はしって、おみせにいきました。そこには、ともだちがなん人もいて、ひろ子はむちゅうでおみせを見てまわりました。

田んぼのほうを見ると、えいごをおしえてくれているトーマス先生がいました。ひろ子は、みんなとはなれてトーマス先生のほうにはしっていきました。先生は、一ばんまえで花田うえを見ていました。

「こんにちは、トーマス先生。先生はおみせにいかないの？」

「ぼくは、なにもかわないよ。このおまつりを見に来たんだよ。」

「えっ。それだけ？」

トーマス先生は、にこにこしながらはなしてくれました。

「そうさ。ぼくは、花田うえを見るのがずっとたのしみだったんだ。」

「どうしてそんなにたのしみなの？」

「それはね、このおまつりには、すごいひみつがあるからさ。」

「どういうこと？」

「このみぶの花田うえを見るとね、日本の人たちが、むかしからおこめをみんなでころをあわせてつくってきたことがわかるんだよ。」

「へえ。そんなにすごいの？」

トーマス先生は、手をひろげながら大きなこえでたのしそうにはなしてくれました。

「いいかい。みぶの花田うえはね、ずっとのこしておきたいせかいのたからの一つにもえらばれていて、アメリカにいたときから見てみたかったんだ。それがひろ子ちゃんのすんでいるこのきたひろしま町にあるんだよ。

それを900年もむかしから、町の人たちでおしえあって、やってきているそうだよ。

「900年も！」

「そうだよ、この町の人、900年もまえから、田うえのしごとがおわりになるのをおいわいして、みんなで力をあわせて、この一年にいかいのおまつりをずっとつづけてきたんだよ。」

ひろ子は目をまるくしました。そして、田んぼのほうにかおをむけました。



いろとりどりのきれいなかざりをつけたうしが、なんともいます。ゆっくりと田んぼの中をあるいて田うえができるじゅんぴをしています。すると、男の人が、あいずを出しながらうたをうたい出しました。かさをかぶった女の人たちは、それにあわせていっせいにうたをうたいます。そして、みんなでなえをどんどんとうえていきます。白いふさふさのついたバチをもった男の人はくるくるとバチをまわし、たいこをたたいておどっています。たくさんの人がやっているのにうごきがぴったりとそろっているのです。なえをうえている女の人、たいこをたたく男の人たちもみんないっしょうけんめいで、中には、あせをかいている人もいました。

気がつくときろ子は花田うえをむちゅうで見っていました。はっとしてまわりを見てみると、おきやくさんたちもみんなむちゅうで花田うえを見えています。カメラでしゃしんをとっている人たちもいます。トーマス先生は、ふえの音にあわせてからだをゆらしています。みぶの花田うえを見ているたくさんの人たちは、どの人もみんなうれしそうです。ひろ子はにっこりしました。

田んぼいっぱいになえがうえられ、おまつりがおわりました。気がつくとき、ひろ子は、立ち上がってだれにもまけない大きなはく手をしていました。そして「あした、学校にいったら、おみせにいて花田うえを見ていなかったともだちに花田うえのことをいっぱい話してあげよう。」とおもいました。

【参考文献】

北広島町（平成 21 年）「広報きたひろしま」

北広島町（平成 21 年）「壬生の花田植」



教材開発例2 「百試千改の夢」

〔小学校高学年 主題：郷土への思い 内容項目：4の（7）〕

人物の生き様から
伝統文化へつなげる工夫

素材—西条の酒造り—について

- 酒造りに適した地下水や酒米作りなどの自然条件や宿場町として栄えた歴史的条件により、江戸時代初期から酒造りが盛んに行われるようになった。
- 三浦仙三郎^{みうらせんざぶろう}さんが考えた軟水醸造法の開発によって、腐りにくく、さらにおいしい酒造りが可能になり、一層発展する。
- 現在も酒造りの伝統と文化が継承され、全国的にも有名なまちである。毎年、10月に酒まつりが開催されている。

弘化4年	三津村の雑貨問屋清水屋の長男として誕生する。
明治9年	酒造業へ参入する。（30歳）
明治10年	初仕込みの酒が醸造に終わる。
明治13年	蔵を新築する。
明治16年	自ら蔵人として灘で修行をする。
明治19年	創業以来の杜氏を更迭し新しい杜氏を雇う。
明治26年	京都の酒造家大八木正太郎から硬水と軟水の違いを聞く。
明治31年	百試千改の努力の末、「改醸法実践録」が完成し、三津町長に就任する。
明治40年	第1回清酒品評会で広島 ^{広島} の酒が優等1位、2位を受賞する。
明治41年	町役場からの帰り道に倒れ、不帰の客となる。享年61歳。

資料化した部分

〈素材の選定、情報の収集のポイント〉

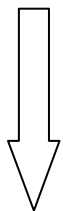
三浦仙三郎さんの経歴

Q & A	
Q 1：人類の文化的活動によって生み出された有形無形のものは何か。	A 1：西条の酒造りは、現在も継承され、発展しています。
Q 2：祭りや地域行事等地域の方の参加・協力が得やすいですか。	A 2：多くの酒造会社がある。また、東広島市や西条酒造組合などが実行委員となり、毎年10月に酒祭りが開かれています。
Q 3：メッセージ性がありますか。	A 3：西条の酒の特徴である軟水醸造法を生み出した三浦仙三郎さんを通して、継承され、発展している地域の伝統・文化について考えることができます。

〈資料「百試千改の夢」の作成〉

内容として、まず、三つを候補として考えて検討した。最終的には、生命尊重3の（1）で作成することとした。

勇気・努力〔1の（2）〕 小学校高学年
個性の伸長〔1の（5）〕 小学校高学年
郷土愛〔4の（7）〕 小学校高学年



軟水醸造法を開発し、西条の酒づくりの発展に貢献した三浦仙三郎さんを取り上げるが、この分野では、三浦さんの生き方そのものではなく、生き方を通して地域の伝統と文化に焦点を当てようと考えた。

郷土愛〔4の（7）〕 小学校高学年

第1稿

推敲の視点

構成チェック票⑤
「適切な状況を設定しているか」

構成チェック票⑦
「叙述によく具象性を与えているか」

構成チェック票⑥
「子どもの多様な考えが引き出されるものであるか」

最終稿

〈課題点〉

三浦仙三郎さんを主人公として描いたが、どうしても、人物の生き方に焦点が当たり、ねらいが不明確になった。



〈改善点〉

児童と年齢が近い子どもを主人公とし、三浦仙三郎さんの姿を通して、地域の伝統と文化を見つめさせるように改善した。



〈課題点〉

人物の行為の羅列となってしまう、児童が、立ち止まって考える場面の設定が不十分であった。

〈改善点〉

「帰り際、もう一度、酒蔵の町並みを眺めてみた」等、主人公の行動から内面の心の動きを考えることができるような記述を加えた。

中心場面（山場）として、三浦仙三郎さんが醸造法を無料で配った場面を設定し、それが今の酒都西条の発展につながっていること、また、今でも継承され続けていることについて考えさせたいと考えた。





ひやくしせんかい 百試千改の夢

ぼくの町には、白壁に囲まれた酒蔵^{さかぐら}がある。寒冷な気候、良質の米と豊かな軟水^{なんすい}⁽¹⁾のそろこの町は、酒都西条として、日本三大名醸地^{めいじょうち}⁽²⁾と言われている。ぼくたちは、今、自分の町について学習をしている。今日は、酒蔵の方にお話を聞きに来ているのだ。

「いつごろから酒造りが盛んだったのですか。」

「ずいぶん昔からだと聞いているよ。しかし、明治の初めには一時衰退^{すいたい}していたらしいんだよ。」

「どうして、今のようにお酒が有名になったのですか。」

「それには、どうしても欠かせない一人の男がいるんだよ。」

ぼくは、その人のことが気になった。すると、酒蔵の方がゆっくりと話し始めた。

その人の名は、三浦仙三郎。彼は、弘化4（1847）年三津村（現在の東広島市安芸津町三津）に生まれた。

その頃は、仙三郎の生まれた三津村はもちろん、県内のどこでも灘の製法をまねて酒造りをしていた。しかし、製法をまねただけではおいしい酒はできず、広島は、おいしい酒のないところと言われていた。それが、仙三郎が大人になる頃には交通の便が良くなり、灘^{なだ}⁽³⁾などの名酒が手軽に味わえるようになった。そのため、三津村の酒が、あまり売れなくなった。仙三郎が酒造りをはじめたのは、ちょうどこの頃だった。

最初に仕込んだ桶^{おけ}から、かぐわしい酒の香りがただようはずの時期なのに、それどころかすっぱい嫌な臭いがする。失敗であった。仙三郎の初めての酒造りは、情けない腐^{くさ}り酒から始まった。

仙三郎は、酒造りを再開したが、なかなか質の良い酒ができない。醸造法^{じょうぞう}⁽⁴⁾の改良を試しても、造った酒が腐ってしまう年が続いた。酒造業にとって失敗は三年続けばお金持ちでも資金が尽きるといわれるほど、最悪なことだった。（失敗するには何か理由があるはずだ。）挫折感^{ざせつかん}の中で仙三郎は考えた。事業をやめるという方法もあったが、仙三郎は原因を追及し、本格的な醸造法の改良をめざした。仙三郎は自ら従業員を指揮して、失敗の原因となるものを探した。全財産をつぎ込んで酒蔵の全てを新しくしたり、灘の酒造家を訪ね、自ら蔵人^{くらうど}⁽⁵⁾となって酒造法を学んだり、自分の指揮に従う杜氏^{とうじ}⁽⁶⁾を雇^{やと}い直したりとあらゆる手を尽くした。

次に雇った杜氏は、若く経験は乏しい代わりに、仙三郎と心をひとつにして新しい酒造りに挑^{いど}もうという研究心に燃えていた。若い杜氏とともに一からやり直すうちにようやく改良の糸口が見えてきた。

明治26年の秋、仙三郎があ然とする衝撃の事実が判明した。それは、酒造りに関する講演会でのことだった。

「酒造の第一の問題は水である。広島の水と灘の水は違っている。水質が違っているのに同じ醸造法ではいい酒ができるわけがない。」

早速、地元の水を調査し、灘は発酵^{はっこう}⁽⁷⁾作用が高い硬水^{こうすい}⁽⁸⁾、三津村は発酵しにくい軟水であり、二つの水は全く性質の違うことが分かった。灘に学ぶことはできない。仙三郎は、軟水に適する方法を求め、原料配合の加減など一から実験を繰り返した。そして、ついに「軟水による改良醸造法」を完成させたのである。醸造法の改良に取り組んでから20年以上が経っていた。仙三郎の酒蔵では、この方法によりおいしい酒ができるようになった。



「長い年月をかけて、ようやく完成させたんですね。」

「『百試千改』という言葉を知っているかい。百回試して、千回改める。仙三郎さんの言葉だよ。」

「それだけの思いを込めた醸造法なのですね。」

「そして、明治40年の第1回清酒品評会⁽⁹⁾で出品数2138点中、5点しか選ばれない優等^{ゆうとう}のうち、1位と2位に仙三郎の考えた醸造法で造られた広島^{ひろしま}の酒が選ばれたんだ。」

「仙三郎さんの苦労は、ようやく実を結んだということですね。」

「でも、選ばれた広島^{ひろしま}の酒は、仙三郎さんの蔵の酒ではないんだ。」

「えっ。」

「仙三郎さんは、自分が考えた造り方を一切かくさなかったんだ。詳しく本にまとめて、地元の三津だけでなく、西条、さらには県内各地の酒蔵に無料で配ったんだよ。」

(どうして、無料で配ったりしたんだろう?)

ぼくは、仙三郎さんに思いをめぐらせた。

「仙三郎さんのおかげで、今があるんだよ。」

酒蔵の方がぼつりと言われた。



ぼくは、酒蔵の方にお礼を言い、酒蔵をあとにした。帰り際、もう一度、酒蔵の町並みを眺めてみた。

「今日も豊富に湧き出る軟水^わでおいしい酒が造られている……。そうか……。」

ぼくは、無料で配った仙三郎さんの思いが伝わってくるような気がした。赤いレンガの煙突から立ち上る煙を見ながら、ぼくは自分の住むこの町のこの見慣れた景色が新鮮に映り、こんなことを考えながら、軽い足取りで家路へとついた。

(明治の初めに誕生した仙三郎さんの新しい酒は、100年の時を越え、現在も酒都西条の酒として生きている。)

【注】

- (1) 水に含まれている成分としてのカリウムやカルシウムが多い水。硬水で仕込めば辛口のお酒になりやすい。
- (2) 酒造りの名立たる産地。兵庫の灘、京都の伏見、広島^{ひろしま}の西条が日本三大名醸地と言われている。
- (3) 清酒の主産地である神戸市東部から西宮市今津に至る大阪湾に面した約12kmに及ぶ沿岸地帯。
- (4) 発酵・熟成などの作用によって、酒・みそ・しょうゆなどをつくるやり方。
- (5) 杜氏の指揮のもと、酒造りに従事する酒造りの職人。
- (6) 酒造りにおける現場の最高責任者。蔵の管理、帳簿管理、醪^{もろみ}の仕込と管理などを行う。
- (7) 酵母や細菌などの微生物がエネルギーを得るために有機化合物を分解して、アルコール類・有機酸類・二酸化炭素などを生成していく過程。
- (8) 水に含まれている成分としてのカリウムやカルシウムが少ない水。軟水で仕込めば甘口のお酒になりやすい。
- (9) 日本酒のよしあしを決める会。(日本酒のことを酒税法上では清酒と言う。)明治40年から昭和25年まで1年おきの秋に開催された。

【参考文献】

池田明子・秋山裕一(2001)「吟醸酒を創った男『百試千改』の記録」時事通信社

日本電信電話ユーザ協会 広島支部 Web サイト (<http://www.hiroshima.jtua.or.jp>)

「ひと風土記 第十二回 三浦仙三郎」

(4) スポーツ

教材開発のポイント



着想

(1) 素材の収集・選定



集めてみよう

スポーツならではの魅力を感じる素材

- ・ 児童生徒が日頃親しみ、地域に根付いているもの
- ・ 故人に限らず、実際に活躍するアスリートを素材にしたもの
- ・ 人物のチャレンジ精神、力強い生き方、苦悩が感じられるもの

○ 素材の収集に当たって

原則、現存者は避けたいが、実際に活躍するアスリートの方が、児童生徒にとって身近であり、感動を与えられる面もある。故人や現役のアスリート、引退された選手など幅広い視点で収集に当たりたい。ただし、存命で社会的評価が定まっていない人物についての配慮は欠かせない。また、地域に根付いていることや偉業や記録のみにこだわらないことといった視点も大切である。

○ 素材の選定に当たって

偉業や記録といった事実に基づきつつも、その背景にあるチャレンジ精神や力強い生き方、苦悩に触れることや結果に至るまでの地道な努力などのプロセスを重視するといった視点は必要である。

(2) 情報の収集



探してみよう

実際に活躍する（した）選手に着目

- ・ 肖像権、著作権の確認と了承
- ・ 関係者（アスリート本人、家族など）へのインタビュー

スポーツの情報収集においては、当時の写真や映像の収集が欠かせないことから、特に肖像権や著作権に留意しなければならない。

情報の収集に当たっては、本人や家族、深く関わった方に直接聞く中で、不撓不屈といった「自分自身に関すること」とともに、家族やライバル、

道具（シューズ等）製作者などに対する感謝など「他の人とのかわりに関すること」などの視点を大切に、様々な思いを推し量っていきたい。また、写真や映像、業績にまつわるものについて、実物が現存するかどうか、借用は可能かどうかなどの確認もしておきたい。

(3) 読み物資料の作成



書いてみよう

チャレンジ精神や力強い生き方、苦悩に留意

- ・ 事実（記録）の背景にある真実に着目
- ・ 児童・生徒の対象スポーツにおける経験の有無、興味・関心に留意
- ・ 必要に応じた補足説明（スポーツ用語の補足説明、年表等を作成）

① 主題やねらいを決定する

主題やねらいの設定に当たっては、記録を出したからすばらしいのではなく、その記録を出すために、その人物が行ったこと（真実）に着目する必要がある。

スポーツの場合は不撓不屈になりやすいが、個性の伸長や友情等、多様な価値に触れさせたい。特に感謝という視点は大切にしたい。なお、小学校高学

年以降では、理想主義的な思考を大切に未来への夢や希望をはぐくめるよう留意したい。

構成・推敲

**② 対象となる学年の発達の段階や特性等を把握する**

把握内容としては、対象スポーツにおける体験の有無、種々スポーツに対する興味・関心などが考えられる。また、児童生徒がアスリートをめざすための教材開発ではないことに留意しなければならない。スポーツに対して苦手意識をもつ児童生徒もいることから、「体力づくり」の活動等を通して、苦手意識の中身を把握することも一つの方法である。

③ 登場人物や状況を設定する

登場人物や状況の設定は、児童生徒が体験活動や日常生活等を振り返られるなど、児童生徒にとって身近な行為が望まれる。例えば、スモールステップで目標をもって努力する姿などが考えられる。ただし、人物の高い価値観や生き様に純粋に感動させる場合も効果的であることには留意しておきたい。

④ 中心場面（山場）を決め、大まかな起承転結を設定する

人物のチャレンジ精神や力強い生き方、苦悩等などとともに、夢や希望が児童生徒に伝わるエピソードの挿入が求められる。目標（夢）ができ、それが達成されるまでのプロセスに共感できるような場面設定が必要である。

⑤ 場面分けをもとに文章化する

スポーツの良さを象徴するものやスポーツの特質に関するものを盛り込んで表現することが大切である。例えば、「負けてしまいました。・・・くやしなみだが出てきました。」（開発例1）「練習を黙々とこなす日々が続きました。」（開発例2）などの汗、涙、緊張感、勝敗、爽やかさなどを主人公が見つめる風景で表現するといった工夫も考えられる。また、スポーツ用語について、児童生徒の発達の段階や実態に応じて、理解が難しい場合には、補足説明を加える必要がある。さらに、必要に応じて年表を挿入していくことも考えられる。

⑥ 不要な場面や文言を削除する

オリンピックでメダルを獲得した、新記録を樹立した等、取り上げたアスリートの実績や記録が注目されやすいが、その結果の羅列にならないように留意することが大切である。ねらいに迫るために必要なもの以外は思いきって削除したい。

（４）授業の実施**実践してみよう****効果的な展開**

- ・ アスリート本人の声などの活用
- ・ 体験を想起できる場面の工夫
- ・ 話題性への着目

スポーツは臨場感が効果をもたらすことから、映像や写真、ビデオレターやテレビのインタビュー中の言葉等の活用が考えられる。ただし、情報の多さではなく選り抜かれた情報の提示が想像をふくらませる上で効果的な場合もあることに留意したい。また、導入や終末に体験活動を想起する場の工夫も考えられる。オリンピック開催や全国大会優勝などの話題性も考慮に入れるとよい。

（５）体制・環境づくり**充実させよう****心身の調和的発達の促進**

- ・ 体力づくりとの関連

運動する児童生徒とそうでない児童生徒の二極化等が深刻な現在、体力づくりとの関連を図り、運動する楽しさや喜びを味わわせていく体制・環境をつくりたい。そのことにより、児童生徒の主人公のスポーツに対する思いへの共感が一層促され、ねらい

に含まれる道徳的価値や生き方についての自覚を深めていけると考えられる。

教材開発例 1 「ゆめにむかって—栗原恵選手のゆめ—」^{くりはらめぐみせんしゅ}

〔小学校中学年 主題：ゆめにむかって 内容項目：1の(2)〕



栗原恵選手は、江田島市能美町出身のバレーボール選手であり、全日本（火の鳥 NIPPON）チームの副キャプテンを務めるなど活躍している。

小学校4年生からバレーをはじめ、高校時代にはインターハイ・国体・春の高校バレーに優勝し、三冠を達成した。さらに、夢だったアテネ、北京のオリンピックにエースアタッカーとして連続出場し、それぞれ5位に入賞を果たすなど多くの実績を残している。



（1）素材の収集・選定



集めてみよう

市内の小・中学校の道徳推進担当教師の方に、スポーツに関して道徳資料となりうる素材について協力を求めて収集した結果、「地域在住のマラソン愛好家」「地域在住のトライアスロン愛好家」「バドミントン：オリンピック審判員」「水泳選手：河石達吾選手」「バレー選手：栗原恵選手」の素材が集まった。この中で、現役で活躍しているアスリートであり、児童にとって身近な存在であるのは、「栗原恵選手」である。

栗原選手は、オリンピックに2回出場しており、江田島市で壮行会が開かれたこともある。また、母校の小・中学校やジュニアバレーチームを訪問したり、市内の各校に直筆の色紙を送ったりしている。そこで、中学年を対象とし、夢をもち、その実現に向けて努力する前向きな生き方を考えさせ、「今よりよくなりたいと願い、努力する」姿について考えを深めていけると考え、素材として選定した。

（2）情報の収集



探してみよう

○ 地域の関係者（お母さんへのインタビュー）

栗原選手の著書「めぐみ」を読んだ上で、子どもの頃のエピソードや具体的な会話の内容について、聞き取った。また、卒業文集、ジュニアバレーチームの文集をお借りすることができた。また、今の栗原さんの夢が描かれている書籍『「アスリートの夢 26人のアスリート×きむ」を紹介していただいた。

○ 一般書籍（「めぐみ：実業之日本社」「アスリートの夢 26人のアスリート×きむ：いろは出版」）

栗原選手が生まれてから、オリンピック選手になるまでの出来事や思いが描かれており、中学校で転校を決めるまでの出来事や思いについて参考にした。また、小さい頃からの「オリンピック選手になる」という夢を果たした栗原選手の「次の夢」について描かれており、常に夢をもち、前向きに生きるすばらしさを資料の中でも生かし児童に伝えたいと考えた。

○ 情報通信ネットワーク（インターネット）

栗原選手の公式ホームページ、アスリートインタビュー（フジテレビホームページ）を参考にした。

※ 小学校時代の写真の肖像権については栗原選手のお母さんに了承をいただき、また、一般書籍を参考にする際の著作権については、出版社に問い合わせた。



(3) 読み物資料の作成



書いてみよう

① 主題やねらいを決定する

小学校解説では、夢や希望について、「児童が自立し、よりよく生きていくためには、何事にも粘り強く取り組み、努力し続ける忍耐力も求められる。しかし、それは見通しもなく取り組むのではなく、よりよい自己を実現しようとする向上心と結び付いてこそ、前向きな自己の生き方が自覚されてくるといえよう。そのためにも、児童がより高い目標を立てたり、自分としての夢や希望を掲げたりして、その達成や実現への志をもち、勇気をもって取り組むことができるようにすることが重要になる。」とある。

また、中学年の段階においては、「自分がやらなければならないことだけではなく、更に自主性を発揮し、自分でやろうと決めたことに対しても積極的に取り組み、粘り強くやり遂げる精神を育てることが大切になる。そのためには、あきらめずに取り組むことの意義や、今よりよくなりたいと願い、努力しようとする姿について考えを深めていくことが求められる」とある。「心のノート」の関係ページには、キーワードとして「『今よりよくなりたい』という心をもとう」と示されている。

これらを確認し、「栗原恵選手」を素材として、資料を作成するに当たっては、夢や希望にねらいを焦点化し、児童に、自分の好きなこと、夢にむかって前向きに生きていくことのすばらしさを感じ、そのために努力していこうとする気持ちを育てるために、転校を決めるときの恵さんの思い悩む姿を描くことが大切であると考えた。

② 対象となる学年の発達の段階や特性を把握する

栗原選手は、現役で活躍しているバレーボール選手であり、児童にとって身近な憧れの存在である。バレーボールについては、ほとんどの児童が見たことがあり、ルールもある程度理解できているが、選手としてプレーした体験があるわけではないため、専門用語の使用については、配慮が必要である。

③ 登場人物や状況の設定する

〔具体的な場面設定と登場人物〕

○主人公 栗原恵さん

○補助的な人物 お母さん

・ 悩んでいる恵さんの話を聞き、後悔しない進路を決めるよう話す。

○その他 お父さん

・ 幼い頃から、恵さんに厳しくバレーを教える。

④ 中心場面（山場）を決め、大まかな起承転結を設定する

	起	承	転	結
場面のイメージ絵				
絵の説明	小さい頃からお父さんとバレーの練習をする、バレーが大好きな恵さん。	小学校でスポーツ少年団に入り、バレーを楽しみながら、練習に励む恵さん。	バレーの強い学校から転校の誘いがあり、迷う恵さん。	悩んだ末、転校を決意し、夢を果たしてオリンピック選手になった恵さん。

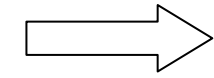
4コマ場面絵



- ⑤ 場面分けをもとに文章化する
- ⑥ 不要な文章や文言を削除する

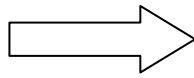
推敲の流れ

初稿



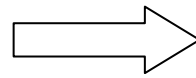
臨場感が表れる場面設定のための改善

第二稿



発達の段階を考慮し、資料の内容を明確に伝えるための改善

第三稿



恵さんの迷い、人間的弱さや葛藤が表れるような改善

最終稿

初稿

「ゆめにむかって」 —栗原恵選手のゆめ—

「ヤッホー。私の今のゆめはバレー選手なんだけど……。バレーをつづけていますか？ 12才の恵より」
今、活やくしている栗原選手は、しょう来の自分にこんなメッセージを書きました。テレビで全日本選手のすばらしいプレーを見て、自分もバレー選手になって、見ている人の心にのこるプレーをしたいと思ってえがいたゆめ。栗原選手は、このゆめをかなえたのです。

栗原選手は江田島市能美町の出身です。お母さんは、小学校のママさんバレーの選手、お父さんはそのチームのかんとくでした。「恵は、赤ちゃんのころからボールで遊んでましたよ。」と、お父さんが言うように、バレーに親しんで育ちました。小学校に上がる前から、にわでパスの練習をするくらい、バレーが大好きな女の子でした。お父さんと練習をしている時、うまくできないと、

「ああ、もう、そうじゃない。」

とお父さんが言うと、栗原選手もくやしくておこってしまい、

「できない。もうやらない。」

と言って、練習をやめていました。でも、次の日になると、また、練習をいっしょにするというくり返しでした。

栗原選手が本かくてきにバレーボールを始めたのは、かの川小学校4年生の時。スポーツ少年だん、かの川フラワーズに入部してからでした。身長が高かったので、センターやレフトからスパイクを打ちました。スパイクを打つのが楽しかったので、かの川フラワーズの練習だけでは物足りなくて、家でも練習していました。お父さんがスパイクの練習用に物おきにボールをつるしてくれたのです。それをうちこむ練習を毎日しました。お父さんは、きんカトレーニング用にセラバンド（チューブ）のようなものまで用意してくれたので、スイングの練習にもはげみました。

栗原選手は、小学校のそつ業文集にバレーのことを書いています。

私の一番の思い出は、バレーボールのことです。し合ではじゅん県体が一番楽しかったです。

2日目の試合では、八次というところとし合。見たところは私たちよりもすごいい上でした。やってみても強い。でもみんなでがんばってやっと勝てました。勝てたときは、うれしいしか思えませんでした。

そして、次の相手は、何でも完ぺきな可部南。し合かい始。なかなかサーブがとれません。だから、とうとう負けてしまいました。し合の終わりのふえの音が鳴るとガックリ……。ガックリといっしょに、くや



しなみだが出てきました。

B級の3いだったけど、自分たちにまん足です。このし合のことは、ぜったいわすれないと思うし、みんなやればできるということがよく分かったので、このし合をはげみにして、これからもずっとバレーを続けていきたいと思います。

小学校の時に、みんなでバレーボールをする楽しさを体いっぱいを感じながらプレーできたことが、今の自分のもとになっていると、栗原選手はこのときのことをふり返っています。

栗原選手は、中学校でもまよわず、友だちと楽しくできるバレーをつづけました。

そんなある日、強くて有名な学校から、転校してバレーをやらないかというさそいがありました。バレーボールのことだけを考えれば、やってみたい。上手になりたい。でも、転校すれば、大すきな両親、兄、小学校からつづく能美中学校での友だちとの楽しい生活、それら全てとわかれることになるのです。そのことを考えるとなみだがとまりませんでした。なきじゃくるすがたを見て、お父さんは、

「バレーをやりたいのは分かるよ。でも、そんなに泣いてまでするのか。できるのか。」

そう言われ、

「ううん、行く。ぜったいに行く。」

反しやてきに決意を口にしていた栗原選手。お父さんに反こうしたわけではなく、

「そうだ、私は絶対にバレーがやりたいんだ。」

という気持ちが見えたのです。でも、

「行っちゃってから後かいするかもしれない・・・。」

と、お母さんには不安な気持ちをうち明けていました。いつまでもなみだがとまらずまよっている栗原選手に、お母さんは、

「めぐは、きつと行っても後かいするかもしれないし、行かなかつたら、それも後かいするんだと思う。どっちにしても後かいするんだつたら、どっちの後かいの方がいい？ よく自分で考えてごらんさい。」

と、やさしく言葉をかけてくれました。

栗原選手は、一人でじつと考えました。そして、自分の強い気持ちがはっきりわかり、中学校2年生の6月、転校することを決めたのです。

栗原選手のその後の活やく

平成12年 : 高校は山口県防府市の三田尻女子高校に進学する。

インターハイ・国体・春校バレー優勝の高校三冠を経験する。

平成14年 : 高校三年生で全日本代表のメンバーにえらばれる。

平成15年 : Vリーグ（プレミアリーグ）NECレッドロケッツに入団する。

平成16年 : アテネオリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

: NECレッドロケッツを退団し、パイオニアレッドウイングスに入団する。

平成17年～ : Vリーグに出場し、最高殊勲選手賞などを受賞する。

平成18年 : 全日本代表にえらばれたが、左足種子骨骨折と診断され、約半年間のリハビリ生活を送る。

平成19年 : 全日本に復帰し、同年ワールドグランプリでは全9試合に出場し、ベストスコアラー部門で9位の成績をおさめる。

平成20年 : 北京（ペキン）オリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成21年 : 全日本（火の鳥NIPPON）の副主将になる。

栗原選手の今のゆめ。それは、いつかバレーをやめるとき、「バレーをやっていて本当によかった。」と、え顔でむねをはって言えること。くいのないバレーボール人生のために、今できることをせいいっぱいがんばりたい。そして、自分が小さいころにバレー選手になりたいというゆめをもったように今の自分を見て、バレー選手をめざす子どもたちにゆめをあたえてあげられるように、一人でも多くの人にバレーのみ力を知ってもらえるようにがんばること。自分が色々な人に助けられたので、今度は自分がアドバイスをあげられるような、大きな人になりたいということ。

栗原選手のゆめは、まだまだつづいています。



第2稿

臨場感が表れる場面設定のための改善

第2稿	改善点及びその理由
「ゆめにむかって」 —栗原恵選手のゆめ— 「ヤッホー。私の今のゆめはバレー選手なんだけど・・・。 バレーをつづけていますか？ 12才の恵より」 今、活やくしている恵さん ア₁ は、しょう来の自分にこんなメッセージを書きました。テレビで全日本選手のすばらしいプレーを見て、自分もバレー選手になって、見ている人の心にくるプレーをしたいと思ってえがいたゆめ。恵さんは、このゆめをかなえたのです。 恵さんは江田島市能美町の出身です。お母さんは、小学校のママさんバレーの選手、お父さんはそのチームのかんとくでした。「恵は、赤ちゃんのころからボールで遊んでましたよ。」とお父さんが言うように、バレーに親しんで育ちました。小学校に上がる前から、にわでパスの練習をするくらい、バレーが大すきな女の子でした。お父さんと練習をしている時、うまくできないと、 「ボールをよく見て。」 「うんわかった。」 「手をのばして。」 「できないよ。」 イ 「ああ、もう、そうじゃない。」 「できない。もうやらない。」 と言ってケンカになり、めぐみさんはできないことがくやしくて、練習をやめてしまいました。でも、次の日になると、 「お父さん、いっしょに練習しよう。」 と、にっこりわらってお父さんをさそうのでした。 イ 恵さんが本かくてきにバレー ア₂ を始めたのは、小学校4年生の時。スポーツ少年だん ア₃ に入ってからでした。せの高さを生かして、スパイクをうちました。 ウ お父さんがスパイクの練習用に物おきにボールをつるしてくれましたので、それを何度も何度も打ち込みました。 恵さんは、小学校のそつ業文集にバレーのことを書いています。 私の1番の思い出は、バレーのことです。 大会2日目の相手は、力が私たちよりもすごいでした。 ア₃ やってみても強い。でも、みんなでカバーし合ってボールをつなぎ、 エ やって勝てました。みんなの力です。 エ そして、次の相手は、何でもかんぺきなチーム。 なかなかサーブがとれません。声をかけ合って、ねばり強くとりにいきましたが、 エ 負けてしまいました。し合の終わりのふえが鳴るとガックリ・・・。ガックリといっしょに、くやしなみだが出てきました。 B級の3いだったけど、自分たちにまん足です。それは、とっても楽しいし合ができたからです。 エ このし合のことは、ぜったいわすれません。みんなやればできるということがよく分かったので、このし合をはげみにして、これからもずーっとバレーをつづけていきたいと思います。	ア 構成チェック票（例）項目③ 「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」 - 栗原選手という表現を、児童に親しみのある「恵さん」に統一した。（※以降、同様の表現は変更） 「バレー」と「バレーボール」という言い方が混在しているので、児童が日常の生活で使用している「バレー」に統一する。 - 団体が特定される名前を削除する。（かの川小学校、かの川フラワーズ、八次、可部南など） イ 構成チェック票（例）項目⑦ 「叙述によく具象性を与えているか」 練習場面の会話を具体的に加え、懸命に練習する恵さんの様子や練習中の思い、バレーが心から好きであることを考えていけるようにした。 また、直接、気持ちを表す表現（おこって）は削除したり、副詞句を活用して、恵さんのうれしさや楽しさを表現したりした。 ウ 構成チェック票（例）項目③ 「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」 中学年の児童にも分かりやすいように、専門的な用語をなるべく使わないようにする。（準県体、「センターやレフトからスパイクを打ちました。」「筋力トレーニング用にセラバンド・・・」など） エ 構成チェック票（例）項目⑥ 「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」 ボールをつないでいくよさ、カバーし合うよさ、みんなで最後まで戦うよさが表れるよう、文を追加する。この点をしっかり表現できていれば、転校するかどうかで悩むとき、友との別れのつらさも深まり、最後の恵さんの今の夢、一人でも多くの人にバレーの楽しさを伝えたいという思いにつながると考える。



小学校の時に、みんなでバレーをする楽しさを体いっぱいを感じながらプレーできたことが、今の自分のもとになっていると、恵さんはこのときのことをふり返っています。恵さんは、中学校でもまよわず、友だちと楽しくできるバレーをつづけました。

そんなある日、ほかの県 **オ** の強くて有名な学校から、転校してバレーをやらないかというさそいがありました。

バレーのことだけを考えれば、れん習がきびしくてもやってみたい。 **カ** やればもっと上手になれる。でも、転校すれば、大すきなお父さん、お母さん、お兄ちゃんとわかれて、たった一人の生活になるのです。 **カ** 小学校からずっといっしょにバレーをしてきたなかよしの友だちとも会えなくなります。どうしてよいかわからず、 **カ** なみだがとまりませんでした。なきじゃくるすがたを見て、お父さんは、

「バレーをやりたいのは分かるよ。でも、そんなに泣いてまでするのか。できるのか。」

そう言われ、

「ううん、行く。ぜったいに行く。」

反しやてきに決意を口にしていた恵さん。お父さんにに反こうしたわけではなく、「そうだ、私は絶対にバレーがやりたいんだ。」

という気持ちが見えたのです。でも、

「行っちゃってから後かいするかもしれない・・・。」

と、お母さんには不安な気持ちをうち明けていました。いつまでもなみだがとまらずまよっている恵さんに、お母さんは、

「めぐは、きつと行っても後かいするかもしれないし、行かなかつたら、それも後かいするんだと思う。どっちにしても後かいするんだつたら、どっちの後かいの方がいい？ よく自分で考えてごらんなさい。」

と、やさしく言葉をかけてくれました。

恵さんは、一人でじっと考えました。そして、自分の強い気持ちがはっきりわかり、中学校2年生の6月、転校することを決めたのです。

恵さんのその後の主な活やく **キ**

平成10年：兵庫県の中学校に転校する。

平成12年：山口県の高校に進学する。

平成14年：高校三年生の時、全日本代表にえられる。

平成16年：アテネオリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成20年：北京（ペキン）オリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成21年：全日本（火の鳥NIPPON）の副主将になる。

恵さんの今のゆめ。それは、いつかバレーをやめるとき、「バレーをやっている本当によかった。」と、え顔でむねをはって言えること。そして、自分が小さいころにバレー選手になりたいというゆめをもったように今の自分を見て、バレー選手をめざす子どもたちにゆめをあたえてあげられるようにすること。 **ク**

恵さんのゆめは、まだまだつづいています。

オ

構成チェック票（例）項目⑦

「叙述によく具象性を与えているか」

転校先が遠いということで、恵さんの葛藤をより深く考えることができるよう「ほかの県」という言葉を加えた。

さらに、遠いことを授業の中で補足説明することが望まれる。

カ

構成チェック票（例）項目③

「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」

中学年では、何を迷うのかが分かりにくいと考えた。そこで、転校すれば、さらに厳しい練習があること、家族と別れるということ、はたった一人の生活であること、どうしてよいかわからなくなっていることを書き加えた。

また、両親、兄という表現も、普段児童が呼んでいるような言い方に変更した。

キ

構成チェック票（例）項目①

「子どもの興味・関心に沿ったものであるか」

栗原選手の業績について、資料内容に大きくかかわる中学・高校の進学先を入れるとともに、主なものにしぼる。

ク

構成チェック票（例）項目③

「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」

叙述が長すぎるので、小さい頃に恵さんがもった夢とつながる部分だけを残した。



第3稿

発達の段階を考慮し、資料の内容を明確に伝えるための改善

第3稿	改善点及び理由
「ゆめにむかって」 ―栗原恵選手のゆめ― 「ヤッホー。私の今のゆめはバレー選手なんだけど・・・。 バレーをつづけていますか？ 12才の恵より」 今、活やくしている恵さんは、しょう来の自分にこんなメッセージを書きました。テレビで全日本選手のすばらしいプレーを見て、自分もバレー選手になって、見ている人の心にのこるプレーをしたいと思ってえがいたゆめ。恵さんは、このゆめをかなえたのです。 恵さんは江田島市能美町の出身です。お母さんは、小学校のママさんバレーの選手、お父さんはそのチームのかんとくでした。「恵は、赤ちゃんのころからボールで遊んでましたよ。」と、お父さんが言うように、バレーに親しんで育ちました。小学校に上がる前から、にわでパスの練習をするくらい、バレーが大すきな女の子でした。お父さんと練習をしている時、うまくできないと、 「ボールをよく見て。」 「うんわかった。」 「手をのばして。」 「できないよ。」 「ああ、もう、そうじゃない。」 「できない。もうやらない。」 と言ってケンカになり、めぐみさんはできないことがくやしくて、練習をやめてしまいました。でも、次の日になると、 「お父さん、いっしょに練習しよう。」 と、にっこりわらってお父さんをさそうのでした。 恵さんが本かくてきにバレーを始めたのは、小学校4年生の時。スポーツ少年だんに入ってからでした。せの高さを生かして、スパイクをうちました。<u>それが楽しかった</u>ので、家でも毎日練習していました。ケ 恵さんは、小学校のそつ業文集にバレーのことを書いています。 私の1番の思い出は、バレーのことです。 大会2日目の相手は、力が私たちよりもすごいです。やってみても強い。でも、みんなでカバーし合ってボールをつなぎ、やっと勝てました。みんなの力です。 そして、次の相手は、何でもかんぺきなチーム。なかなかサーブがとれません。声をかけ合って、ねばり強くとりにいきましたが、負けてしまいました。し合の終わりのふえが鳴るとガックリ……。ガックリといっしょに、くやしなみだが出てきました。 B級の3いだったけど、自分たちにまん足です。それは、とっても楽しいし合ができたからです。このし合のことは、ぜったいわすれません。みんなやればできるということがよく分かったので、このし合をはげみにして、これからもずーっとバレーをつづけていきたいと思います。	改善点及び理由 ケ 構成チェック票（例）項目⑤ 「適切な状況を設定しているか」 状況を把握させたり、主人公の恵さんの思いを考えさせたりする上で必要ないものについては、削除する。



コ

削除した部分

恵さんは、中学校でもまよわず、友だちと楽しくできるバレーをつづけました。そんなある日、ほかの県の強くて有名な学校から、転校してバレーをやらないかというさそいがありました。

バレーのことだけを考えれば、れん習がきびしくてもやってみたい。やればもっと上手になれる。でも、転校すれば、大すきなお父さん、お母さん、お兄ちゃんとわかれて、たった一人の生活になるのです。小学校からずっといっしょにバレーをしてきたなかよしの友だちとも会えなくなります。どうしてよいかわからず、なみだがとまりませんでした。なきじゃくるすがたを見て、お父さんは、「バレーをやりたいのは分かるよ。でも、そんなに泣いてまでするのか。できるのか。」

そう言われ、

「ううん、行く。ぜったいに行く。」

反しやてきに決意を口にしていた恵さん。お父さんに反こうしたわけではなく、「そうだ、私は絶対にバレーがやりたいんだ。」

という気持ちが見えたのです。でも、

「転校してから、しなければよかったと思うかもしれない・・・。」サ

と、お母さんには不安な気持ちをうち明けていました。いつまでもなみだがとまらずまよっている恵さんに、お母さんは、

「めぐ、あなたはどうしたいの？」サ よく考えてごらんなさい。」

と、やさしく言葉をかけてくれました。

恵さんは、一人でじっと考えました。そして、自分の強い気持ちがはっきりわかり、中学校2年生の6月、転校することを決めたのです。

恵さんのその後の主な活やく

平成10年：兵庫県の中学校に転校する。

平成12年：山口県の高校に進学する。

平成14年：高校三年生の時、全日本代表にえらばれる。

平成16年：アテネオリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成20年：北京（ペキン）オリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成21年：全日本（火の鳥NIPPON）の副主将になる。

恵さんの今のゆめ。それは、いつかバレーをやめるとき、「バレーをやっていて本当によかった。」と、え顔でむねをはって言えること。そして、自分が小さいころにバレー選手になりたいというゆめをもったように今の自分を見て、バレー選手をめざす子どもたちにゆめをあたえてあげられるようにすること。

恵さんのゆめは、まだまだつづいています。

コ

構成チェック票（例）項目⑤

「適切な状況を設定しているか」

小学校時代の様子を振り返る部分は、「中学校でもまよわず・・・」で十分に把握できるので、必要ないと考え、削除した。

サ

構成チェック票（例）項目③

「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」

「行っちゃってから・・・」という表現は、範読を聞いた時、「言っちゃってから・・・」と聞き間違える可能性もあると考え、「転校してから・・・」という表現に変更した。

中学年では、「後悔する」「行っても後悔、行かなくても後悔」という表現が分かりにくいと考え、表現を変更した。



最終稿

主人公の迷い、人間的な弱さや葛藤が表れるような改善

最終稿	改善点及び理由
「ゆめにむかって」 —栗原恵選手のゆめ— 「ヤッホー。私の今のゆめはバレー選手なんだけど・・・。 バレーをつづけていますか？ 12才の恵より」 今、活やくしている恵さんは、しょう来の自分にこんなメッセージを書きました。テレビで全日本選手のすばらしいプレーを見て、自分もバレー選手になって、見ている人の心にのこるプレーをしたいと思ってえがいたゆめ。恵さんは、このゆめをかなえたのです。 恵さんは江田島市能美町の出身です。お母さんは、小学校のママさんバレーの選手、お父さんはそのチームのかんとくでした。「恵は、赤ちゃんのころからボールで遊んでましたよ。」と、お父さんが言うように、バレーに親しんで育ちました。小学校に上がる前から、にわでパスの練習をするくらい、バレーが大すきな女の子でした。お父さんと練習をしている時、うまくできないと、 「ボールをよく見て。」 「うんわかった。」 「手をのばして。」 「できないよ。」 「ああ、もう、そうじゃない。」 「できない。もうやらない。」 と言ってケンカになり、めぐみさんはできないことがくやしくて、練習をやめてしまいました。でも、次の日になると、 「お父さん、いっしょに練習しよう。」 と、にっこりわらってお父さんをさそうのでした。 恵さんが本かくてきにバレーを始めたのは、小学校4年生の時。スポーツ少年だんに入ってからでした。せの高さを生かして、スパイクをうちました。それが楽しかったので、家でも毎日練習していました。 恵さんは、小学校のそつ業文集にバレーのことを書いています。 私の1番の思い出は、バレーのことです。 大会2日目の相手は、力が私たちよりもすごいです。やってみても強い。でも、みんなでカバーし合ってボールをつなぎ、やっと勝てました。みんなの力です。 そして、次の相手は、何でもかんぺきなチーム。なかなかサーブがとれません。声をかけ合って、ねばり強くとりにいきましたが、負けてしまいました。し合の終わりのふえが鳴るとガックリ……。ガックリといっしょに、くやしなみだが出てきました。 B級の3いだったけど、自分たちにまん足です。それは、とっても楽しいし合ができたからです。今まで練習をがんばったから、3セットまでねばることができました。 シ このし合のことは、ぜったいわすれません。みんなやればできるといことがよく分かったので、このし合をばけみにして、これからもずーっとバレーをつづけていきたいと思います。	改善点及び理由 シ 構成チェック票（例）項目① 「子どもの興味・関心に沿ったものであるか」 楽しい試合ができた理由には、日々の努力を重ねている恵さんの姿がある。そのことを感じさせたいと考え、文集の元の文章「3セットまでがんばったねばり強さは、きびしい練習があったからこそだと思う。」を生かして、書き加えた。



恵さんは、中学校でもまよわず、友だちと楽しくできるバレーをつづけました。そんなある日、ほかの県の強くて有名な学校から、転校してバレーをやらないかというさそいがありました。

(バレーのことだけを考えれば、練習がきびしくてもやってみたい。やればもっと上手になれる。)

(転校すれば、大すきなお父さん、お母さん、お兄ちゃんとわかれて、たった一人の生活になってしまう。)

(小学校からずっといっしょにバレーをしてきた、なかよしの友だちとも会えなくなる。)

ス

どうしてよいかわからず、恵さんはなみだがとまりませんでした。なきじやくすがたを見て、お父さんは、

「バレーをやりたいのは、わかるよ。でも、そんなにないてまでバレーをするのか。できるのか。」

と言いました。思わず、

「ううん、行く。ぜったいに行く！」

とこたえた恵さん。その時に、

(そうだ。私は、ぜったいにバレーがやりたいんだ。)

ス

という気持ちがわかったのです。

その日の夕方、お母さんと恵さんはいつものように食事のじゅんびをしていました。その時、恵さんはうつむいて、大つぶのなみだをこぼしながら、

セ

「転校してから、しなければよかったと思うかもしれない・・・。」

と、ぽつりとつぶやきました。

セ

お母さんは、

「めぐ、あなたはどうしたいの？ 自分がどうしたいか、よく考えてごらんさない。」

と、やさしく言葉をかけてくれました。

その夜、恵さんは、部屋で一人じっと考えました。

そして、次の日の朝、ふすまを静かに開け、

セ

「私、やっぱり行く。」

ソ

と、お父さんお母さんに言いました。恵さんは、転校することを決めたのです。

こうして、恵さんはゆめにむかって第一歩をふみ出しました。

恵さんのその後の主な活やく

平成10年：兵庫県の中学校に転校する。

平成12年：山口県の高校に進学する。

平成14年：高校三年生の時、全日本代表にえられる。

平成16年：アテネオリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成20年：北京（ペキン）オリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成21年：全日本(火の鳥NIPPON)の副主将になる。

恵さんの今のゆめ。それは、いつかバレーをやめるとき、「バレーをやっていて本当によかった。」と、え顔でむねをはって言えること。そして、自分が小さいころにバレー選手になりたいというゆめをもったように今の自分を見て、バレー選手をめざす子どもたちにゆめをあたえてあげられるようにすること。

恵さんのゆめは、まだまだつづいています。

ス

構成チェック票（例）項目⑥

「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」

恵さんの考えたことを説明するのではなく、() 内に書き、心の声として表現した。

セ

構成チェック票（例）項目⑦

「叙述に具象性を与えているか」

「その時、恵さんはうつむいて、大つぶのなみだをこぼしながら」「ぽつりとつぶやきました。」「ふすまを静かに開け」などの表現により、恵さんの不安、葛藤を表現した。

ソ

構成チェック票（例）項目⑤

「適切な状況を設定しているか」

人間的な弱さや葛藤、悩みが表現され、それを夢に向かう強い気持ちで克服する表現に変更した。これは、授業において、恵さんの決意の言葉「私、やっぱり行く。」をもとに、児童に考えさせていくことをねらったものである。



「ゆめにむかって」 —栗原 恵 選手のゆめ—

「ヤッホー。私の今のゆめはバレー選手なんだけど……。 バレーをつづけていますか？

12 才の恵より」

今、活やくしている恵さんは、しょう来の自分にこんなメッセージを書きました。テレビで全日本選手のすばらしいプレーを見て、自分もバレー選手になって、見ている人の心にのこるプレーをしたいと思ってえがいたゆめ。恵さんは、このゆめをかなえたのです。

恵さんは江田島市能美町え た じ ま し の う み ち ょうの出身です。お母さんは、小学校のママさんバレーの選手、お父さんはそのチームのかんとくでした。「恵は、赤ちゃんのころからボールで遊んでましたよ。」と、お父さんが言うように、バレーに親しんで育ちました。小学校に上がる前から、にわでパスの練習をするくらい、バレーが大すきな女の子でした。お父さんと練習をしている時、うまくできないと、

「ボールをよく見て。」

「うんわかった。」

「手をのばして。」

「できないよ。」

「ああ、もう、そうじゃない。」

「できない。もうやらない。」

と言ってケンカになり、めぐみさんはできないことがくやしくて、練習をやめてしまいました。

でも、次の日になると、

「お父さん、いっしょに練習しよう。」

と、にっこりわらってお父さんをさそうのでした。

恵さんが本かくてきにバレーを始めたのは、小学校4年生の時。スポーツ少年だんに入ってからでした。せの高さを生かして、スパイクをうちました。それが楽しかったので、家でも毎日練習していました。

恵さんは、小学校のそつ業文集にバレーのことを書いています。

私の1番の思い出は、バレーのことです。

大会2日目の相手は、力が私たちよりもすごいでした。やってみても強い。でも、みんなでカバーし合ってボールをつなぎ、やっと勝てました。みんなの力です。

そして、次の相手は、何でもかんぺきなチーム。なかなかサーブがとれません。声をかけ合って、ねばり強くとりにいきましたが、負けてしまいました。し合の終わりのふえが鳴るとガックリ……。ガックリといっしょに、くやしなみだが出てきました。

B級の3いだったけど、自分たちにまん足です。それは、とっても楽しいし合ができたからです。今まで練習をがんばったから、3セットまでねばることができました。このし合のことは、ぜったいわすれません。みんなやればできるということがよく分かったので、このし合をはげみにして、これからもずっとバレーをつづけていきたいと思います。

恵さんは、中学校でもまよわず、友だちと楽しくできるバレーをつづけました。

そんなある日、ほかの県の強くて有名な学校から、転校してバレーをやらないかというさそいがありました。

(バレーのことだけを考えれば、練習がきびしくてもやってみたい。やればもっと上手になれる。)

(転校すれば、大すきなお父さん、お母さん、お兄ちゃんとわかれて、たった一人の生活になってしまう。)

(小学校からずっといっしょにバレーをしてきた、なかよしの友だちとも会えなくなる。)



どうしてよいかわからず、恵さんはなみだがとまりませんでした。なきじゃくるすがたを見て、お父さんは、「バレーをやりたいのは、わかるよ。でも、そんなにないてまでバレーをするのか。できるのか。」

と言いました。思わず、

「ううん、行く。ぜったいに行く！」

とこたえた恵さん。その時に、

(そうだ。私は、ぜったいにバレーがやりたいんだ。)

という気持ちがわかったのです。

その日の夕方、お母さんと恵さんはいつものように食事のじゅんびをしていました。その時、恵さんはうつむいて、大つぶのなみだをこぼしながら、

「転校してから、しなければよかったと思うかもしれない・・・。」

と、ぽつりとつぶやきました。お母さんは、

「めぐ、あなたはどうしたいの？ 自分がどうしたいか、よく考えてごらんなさい。」

と、やさしく言葉をかけてくれました。

その夜、恵さんは、部屋で一人じっと考えました。

そして、次の日の朝、ふすまを静かに開け、

「私、やっぱり行く。」

と、お父さんお母さんに言いました。恵さんは、転校することを決めたのです。

こうして、恵さんはゆめにむかって第一歩をふみ出しました。

恵さんのその後の主な活やく

平成10年：兵庫^{ひょうご}県の中学校に転校する。

平成12年：山口県の高校に進学する。

平成14年：高校三年生の時、全日本代表にえられる。

平成16年：アテネオリンピックに出場し、5位入^{にゅうしやう}賞をはたす。

平成20年：北京（ペキン）オリンピックに出場し、5位入賞をはたす。

平成21年：全日本(火の鳥^{にっぽん}NIPPON)の副主将^{ふくしゅしやう}になる。

恵さんの今のゆめ。それは、いつかバレーをやめるとき、「バレーをやっていて本当によかった。」とえ顔でむねをはって言えること。そして、自分が小さいころにバレー選手になりたいというゆめをもったように、今の自分を見てバレー選手をめざす子どもたちに、ゆめをあたえてあげられるようにすること。

恵さんのゆめは、まだまだつづいています。

【参考文献】

栗原恵（2008） 「めぐみ」 実業之日本社

日本ドリームプロジェクト（編）（2009） 「アスリートの夢 26 人のアスリート×きむ」 いろは出版

教材開発例2 「強いものは美しい ―日本人初の金メダリスト 織田幹雄―」

〔小学校高学年 主題：夢を実現させるために 内容項目：1の(2)〕



発達の段階を意識した
資料構成の工夫

〈素材—織田幹雄さん—について〉

- オリンピックで、日本人として初めて金メダルを獲得した。
- 幾多の困難に負けず、自分を信じ、陸上競技一筋に努力し続けた。
- 日本陸上界に多大な功績を残した。



晩年の織田幹雄さん

明治38年	広島県海田市町（現安芸郡海田町）で誕生
大正13年	第8回オリンピックにて、三段跳び6位入賞
大正14年	早稲田大学入学
昭和3年	第9回オリンピックにて、三段跳びで優勝 日本人初の金メダリスト
昭和6年	大阪毎日新聞社のスポーツ記者となる
昭和7年	第10回オリンピックでは、足の故障で予選落ち
昭和39年	第18回オリンピック（東京）の日本陸上チーム 総監督
昭和42年	第1回織田幹雄記念陸上大会の開催（広島）
平成10年	享年93歳で没

織田幹雄さんの経歴

〈素材の選定、情報の収集のポイント〉

Q & A	
Q 1：人物のチャレンジ精神、力強い生き方、苦悩が感じられるものですか。	A 1：日本人初のオリンピック金メダリストという栄光の背景には、怪我や周りの批判などに打ち勝っていった姿があります。
Q 2：児童にとって、身近な地域に根ざしたものですか。	A 2：海田小学校出身で、町内に織田幹雄さんゆかりのものが多数存在します。毎年4月に、織田幹雄記念陸上大会も開催されています。
Q 3：肖像権や著作権の確認と了承はどのように得ましたか。	A 3：織田幹雄さんの写真の使用については、町教育委員会に了解を得ました。（※ポールや碑については、学校で撮影）

〈資料「強いものは美しい」の作成〉

日本人初のオリンピック金メダリストという栄光の背景にある織田幹雄さんのチャレンジ精神、力強い生き方、苦悩に焦点を当て、内容を不撓不屈〔1の(2)〕として作成することとした。

「心のノート（小学校5・6年）」のp16～17を参考にし、高学年の内容〔1の(2)〕へ焦点化した資料となるよう、中心場面（山場）において、特に、大きな怪我や周りの批判等負けず、一步一步努力し、夢を実現させた織田幹雄さんの姿を描いた。



第1稿

推敲の視点

構成チェック票⑥
「子どもの多様な考えが引き出せるものであるか」

構成チェック票③
「子どもの発達段階に対応した構造と内容をもつものであるか」

構成チェック票④
「登場人物の取り合わせとやりとりに無理はないか」

最終稿

〈課題点〉

織田幹雄さんが陸上競技と出会い、オリンピックで金メダルを獲得するまでを順に描き、事実の羅列になってしまった。

〈改善点〉

野口さんの講習会に参加するようになった経緯やアムステルダムオリンピックの三段跳び以外の競技の結果を削除した。生い立ちや記録、実績についても、状況を把握する際に必要な最小限のものに絞った。

〈課題点〉

様々な場面で部分的に改善を図ったため、全体の流れの確認が不十分で、話の前後でつじつまが合わなくなってしまった。

〈改善点〉

全体の構成を再度見直し、主人公の行動や登場人物のやりとりに矛盾や飛躍がないように修正した。



強いものは美しいー日本人初の金メダリスト 織田幹雄ー

海田町立海田小学校には、織田幹雄さんのオリンピック金メダル受賞を記念して、15メートル21センチメートルの長さのポールが立てられています。



明治38年、広島県海田市町（現在の安芸郡海田町）に生まれた織田幹雄さんは、小さいころから野山を駆け回る元気いっぱいの子でもでした。

運動が大好きだった幹雄さんが陸上に出会ったのは広島一中（現在の広島県立国泰寺高等学校）の二年生の時でした。ある日、教官から、第7回オリンピックに出場した野口源三郎さんの講習会に参加するようにすすめられました。幹雄さんの当時の身長は、155センチメートルでしたが、なんと高跳びでは、自分の背丈より高いバーを跳び越えたのです。それを見ていた野口さんが、「小さいのによく跳ぶね。君は練習すればきっと日本の代表になれるぞ。」

と、声をかけてくれたのです。幹雄さんは、顔を真っ赤にして聞いていました。

そして、中学四年生の新学期、サッカー部をやめ、新しくできた徒歩部（陸上部）に入部しました。できたばかりの広島一中の徒歩部には、指導者もコーチもいませんでした。幹雄さんは、自分で本屋を歩き回り、数少ない跳躍に関する雑誌を参考に自分で工夫しながら練習を続けました。昼休みの鐘が鳴るとすぐに運動場を走り、放課後は最後まで練習していました。友だちが

「もう帰ろう。」

と、言っても、

「もう少しやってから帰る。」

と、言って断りました。

誰もいなくなった運動場で、黙々と一人で練習を続けました。気がつくとも一番星が輝いていることもたびたびでした。休みの日も裏庭の小さな砂場で朝から晩まで練習に励みました。

やがて幹雄さんは、いろいろな大会の「走り高跳び」「走り幅跳び」「三段跳び」などで優勝を重ね、注目されるようになりました。

そして、第8回オリンピックに出場し、三段跳びで14メートル35センチの日本新記録を出し、日本陸上史上初の世界第6位入賞を果たしました。「すばらしい。」と誰もがその入賞を喜んでくれました。オリンピックが終わって、幹雄さんはすぐに次のオリンピックに向けて目標を立てました。

さらに幹雄さんの厳しい練習の日々がスタートしました。しかし、記録はなかなか思うように伸びませんでした。それどころか練習を続けるうちに、何回もひどい怪我をしてしまいました。

ある時、日本代表選手団の監督に、

「君、この足の怪我はひどい。放っておくと、一生陸上ができなくなるぞ。」

と、言われたこともありました。

やがて新聞などで「織田はもうこれ以上記録は伸びない」と書かれるようになりました。郷里の広島に帰れば、

「もう織田はだめなのでは。やめたほうがいいぞ。」



と、まわりの人からのささやきが幹雄さんの耳にも届くようになりました。それでも幹雄さんは黙々と練習を続けました。

「今日の練習も・・・やっぱり記録は伸びなかった・・・。」

沈んでいく夕日を前に一人たたずみ、頭をかかえこむ日が続いていました。それでも次の日になると、幹雄さんは、フィールドに立っていました。

「もう一度基本に戻ってみよう。」

改めて自分の練習方法、跳び方を振り返ってみました。

「今までのフォームは、外国の選手の物まねにすぎなかった。勢いにまかせて跳ぶのではなく、足の裏で大地をたたくと同時に、上に向かって伸びあがろうとしなければならない。伸びる力があってこそ“本物”の跳躍ができる。」

と考えました。それから、上に向かって跳び上がる練習を繰り返し行いました。町で木の枝に跳びついたり、よその家の高い軒先にパッと跳び上がって触れたりしたものです。「高いもの」を見つけては跳びつき、自分の身体に跳躍力をつけることだけを考え、練習を黙々とこなす日々が続きました。

そして、ひと冬越して迎えた昭和2年、幹雄さんの記録がまた伸び始めました。

日本記録で優勝した幹雄さんは、再び、念願のオリンピックに出場を果たすことができたのです。

昭和3年7月28日、第9回オリンピック・アムステルダム大会の幕は切って落とされました。

大会6日目、(今まで誰にも負けないだけの練習をしてきたのだ。あとは全力を尽くすのみだ。)と、思いながら窓の外を見ると、輝く太陽が昇っていました。

いよいよ得意の三段跳びです。今までの練習が頭の中をよぎりました。幹雄さんは渾身の力をこめて跳びました。15メートル21センチ。その後、その記録を抜く選手はあらわれませんでした。

アムステルダムの真っ青な大空にひらめく国旗は、太陽に照らされて光り輝いていました。それは誰も予想しなかった日本で初めての金メダルでした。大歓声の中、金メダルを手にした幹雄さんは、広い競技場に一人立っていました。そのほほには一筋の涙がこぼれていました。

その後、日本の陸上競技の発展に力を尽くされた幹雄さんは、「強いものは美しい」という言葉と海田小学校の運動場のあのポールに思いをたくし、93歳でなくなられました。



【参考文献】

織田幹雄 (1997) 「織田幹雄 わが陸上人生」 日本図書センター

織田幹雄 (2001) 「陸上競技ヨーロッパ転戦記 日本は強かった 織田幹雄日記から」 有斐閣アカデミア

3 発達の段階に応じた教材開発

児童生徒の発達の段階を考慮して、適切な指導を行おう

～学校や学年の接続や系統性を踏まえることがポイントとなる～

学校における道徳教育は、幼児期の指導から小学校、中学校へと、各学校段階における幼児児童生徒が見せる成長発達の様子やそれぞれの段階の実態等を考慮して、適切に指導を進めなければならない。

(1) 児童生徒の発達の段階に応じた道徳性の育成

道徳性は、生まれたときから身に付けているものではない。人間は、道徳性の萌芽をもって生まれてくる。人間社会における様々な体験を通して学び、開花させ、固有のものを形成していくのである。道徳性の発達には、様々な要素がかかわり合っているが、特に次の点に留意する必要がある。

- 第1は、よりよく生きようとする力を諸能力の発達に合わせて自らが引き出していくこと
- 第2は、体験等の広がりに合わせて豊かなかかわりを発展させていくこと
- 第3は、認識能力や心情等の発達に合わせて、道徳的価値の自覚を深められるようにしていくこと

〈発達の視点からの資料の選定〉

道徳性の発達は、基本的には他律から自律へ方向をとる。それは、判断能力から見れば、結果を重視する見方から動機をも重視する見方へ、主観的な見方から客観性を重視した見方へ、一面的な見方から多面的な見方へ、などの発達が指摘できる。

ともすれば、教材開発は、資料内容の難易等に重きをおき、発達の視点を考慮した資料を選定することが忘れられがちであった。しかし、発達の視点に目を向けることは、教え込み的色彩、教条主義的色彩の濃い指導から、児童生徒を中心とした道徳の時間への足がかりとなるのではないかと考えられる。

例えば、イギリスの教育学者、ノーマン・ブルの発達段階（四段階説）に照らして考えると、

発達段階	有効に機能すると思われる資料
無道徳 (アノミー)	○教え込み的役割の強い資料 (大人の権威への依存とともに、規範を確立させる。) (身近にみられる具体的事例を用いる。)
↓	↓
他 律	○今まで教えられたことが本当にそれでよかったのだろうか等を、仲間関係において迷い悩ませ、その上で自分で判断する資料 (他人の意図を考える。動機に注目させる。)
↓	↓
社会律	(社会的事例を用いることも考えられる。)
↓	↓
自 律	○他者の立場や考えを理解した上で自分なりの考え方を確立する資料 (合理性を追求させる。) (他との関係性において規範を相対化させる。)

といった資料の開発や活用を工夫することもできるのではないだろうか。

道徳の時間に用いる自作資料の長所は、児童生徒の実態に即した話題を提示できるところにある。そこで、児童生徒の発達の段階や特性などを考慮し、今、何に関心や興味があるのか、どんなことで悩み苦しんでいるのかなど、児童生徒のよりよく生きたいという願いに応えていきたい。

児童生徒の発達は、次のように学校や学年の段階によってほぼ共通した特徴を示すことや相応の発達の課題があるとともに、個人差も大きいことに留意し、一人一人の感じ方や考え方を大切にして指導に当たる必要がある。

【学校や学年の段階の特徴】

校種	段階	発 達 的 特 質
小 学 校	低 学 年	○道徳性の基本である自分でしなければならないことができるようになる。 ○幼児期の自己中心性はかなり残っているが、他人の立場を認めたり、理解したりする能力も徐々に発達してくる。 ○動植物などへも心で語りかけることができる。 ○善悪の判断や具体的な行為については、教師や保護者の影響を受ける部分が大いものの、行ってよいことと悪いことについての理解ができるようになる。 ○知的能力の発達や学校などにおける生活経験によって次第に自主性が増し、様々なかかわりを広げていく。
	中 学 年	○身体が丈夫になるにつれ、運動能力や知的な能力も大きく発達する。 ○社会的な活動能力が広がり、地域の施設や行事などに興味を示し、自然等への関心も増してくる。 ○問題解決能力の発達に伴い学習活動に一層興味を示すようになる。 ○計画的に努力する構えが身に付く。 ○自分の行為の善悪については、ある程度反省しながら把握できるようになる。 ○性差を意識する。
	高 学 年	○知的な能力においては、抽象的、論理的に思考する力が増す。 ○行為の結果とともに行為の動機をも十分に考慮できるようになる。(共感能力の発達) ○理想主義的な傾向が強く、自分の価値判断に固執しがちである。 ○自律的な態度が発達し、自分の行為を自分の判断で決定しようとする。 ○責任感が強くなり、批判力もついてくる。 ○異性に対しては、対立的ではなく、積極的な興味を抱くようになる。 ○属している集団や社会における自分の役割や責任などについての自覚が深まっていく。 ○環境保護などに目を向けるとともに、人間の力を超えたものへの畏敬の念も培われてくる。
中 学 校		心身両面の発達が著しく、他者との連帯を求めると同時に主体的な自我の確立を求め、自己の生き方についての関心が高まる時期である。 ○激しい心の揺れを経験しながら自己を確立していく。(自己の探求、理想の追求と自律の尊重) ○親や教師から仲間集団を意識するようになる。(人間関係の広がりや親密化) ○社会の一員としての自覚がめばえてくる。 ○具体的な事柄に関して首尾一貫した思考が可能になる。 ○目に見えない抽象的な事柄についてかなり深い思索ができる。(自然や人間の力を超えたものへの謙虚な態度の涵養)

〈参考〉子どもの発達段階ごとの重視すべき課題（「子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）」から）

発達段階		重視すべき課題
乳幼児期		・愛着の形成 ・人に対する基本的信頼感の獲得 ・基本的な生活習慣の形成 ・十分な自己の発揮と他者の受容による自己肯定感の獲得 ・道徳性や社会性の芽生えとなる遊びなどを通じた子ども同士の体験活動の充実
学童期	小学校低学年	・「人として、行ってはならないこと」についての知識と感性の涵養や善悪の判断や規範意識の基礎の形成（集団や社会のルールを守る態度など） ・自然や美しいものに感動する心などの育成（情操の涵養）
	小学校高学年	・抽象的な思考の次元への適応や他者の視点に対する理解 ・自己肯定感の育成 ・自他の尊重の意識や他者への思いやりなどの涵養 ・集団における役割の自覚や主体的な責任意識の育成 ・体験活動の実施など実社会への興味・関心を持つきっかけづくり
青年前期	中学校	・人間としての生き方を踏まえ、自らの個性や適性を探求する経験を通して、自己を見つめ、自らの課題と正面から向き合い、自己の在り方を思考 ・社会の一員として他者と協力し、自立した生活を営む力の育成 ・法やきまりの意義の理解や公德心の自覚
青年中期	高等学校	・人間としての在り方生き方を踏まえ、自らの個性・適性を伸ばしつつ、生き方について考え、主体的な選択と進路の決定 ・他者の善意や支えへの感謝の気持ちとそれにこたえること ・社会の一員としての自覚を持った行動

Q： 学校段階において、どのようなことに留意して指導を行えばよいですか。



A： 道徳教育はすべての学校段階において一貫して取り組むべきものであり、幼稚園、小・中・高等学校の学校段階や小学校の低・中・高学年の各学年段階ごとにその重点を明確にし、より効果的な指導が行われるようにする必要がある。

その際、

- ・幼稚園においては規範意識の芽生えを培うこと



- ・小学校においては生きる上で基盤となる道徳的価値観の形成を図る指導を徹底するとともに自己の生き方についての指導を充実すること



- ・中学校においては思春期の特徴を考慮し、社会とのかかわりを踏まえ、人間としての生き方を見つめさせる指導を充実すること



- ・高等学校においては社会の一員としての自己の生き方を探求するなど人間としての在り方生き方についての自覚を一層深める指導を充実することにそれぞれ配慮する必要がある。



Q： 道徳の時間の指導は、どのようなことに留意して行えばよいですか。

A： **小学校**においては、

【低学年】 幼児教育との接続に配慮し、例えば、基本的な生活習慣や善悪の判断、きまりを守るなど、日常生活や学習の基盤となる道徳性の指導や感性に働きかける指導を重視する。

【中学年】 例えば、集団や社会のきまりを守り、身近な人々と協力し助け合うなど、体験や人間関係の広がりにも配慮した指導を重視する。

【高学年】 中学校段階との接続も視野に入れ、他者との人間関係や社会とのかかわりに一層目を向け、相手の立場の理解と支え合い、集団の一員としての役割と責任などに関する多様な経験を生かし、夢や希望をもって生きることの指導を重視する。特に高学年段階から同じテーマを複数の時間にわたって指導するなど、指導上の工夫を促進する。

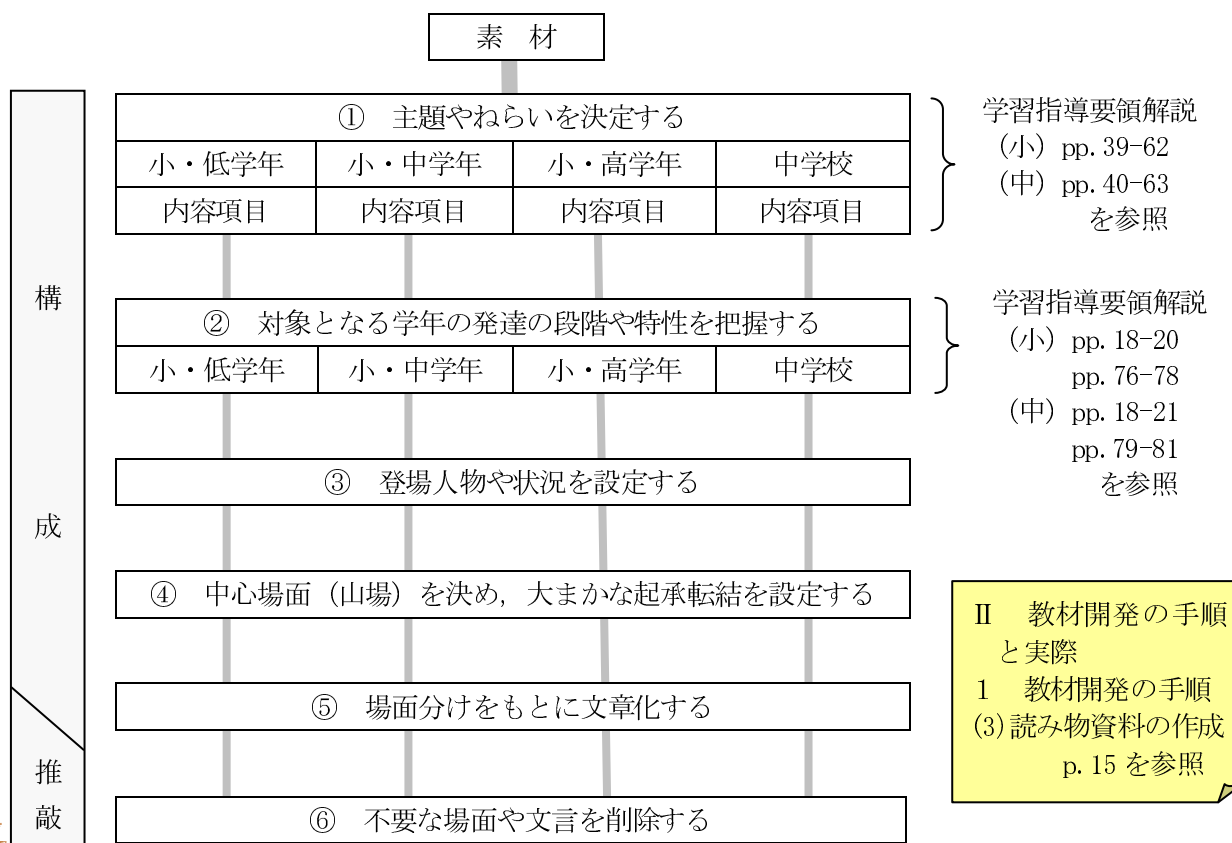
中学校においては、

道徳的価値に裏打ちされた人間としての生き方について自覚を深める指導を重視する。その際、法やきまり、社会とのかかわりなどに目を向ける、人物から生き方や人生訓を学んだり自分のテーマをもって考え討論したりするなど、多様な学習を促進する。

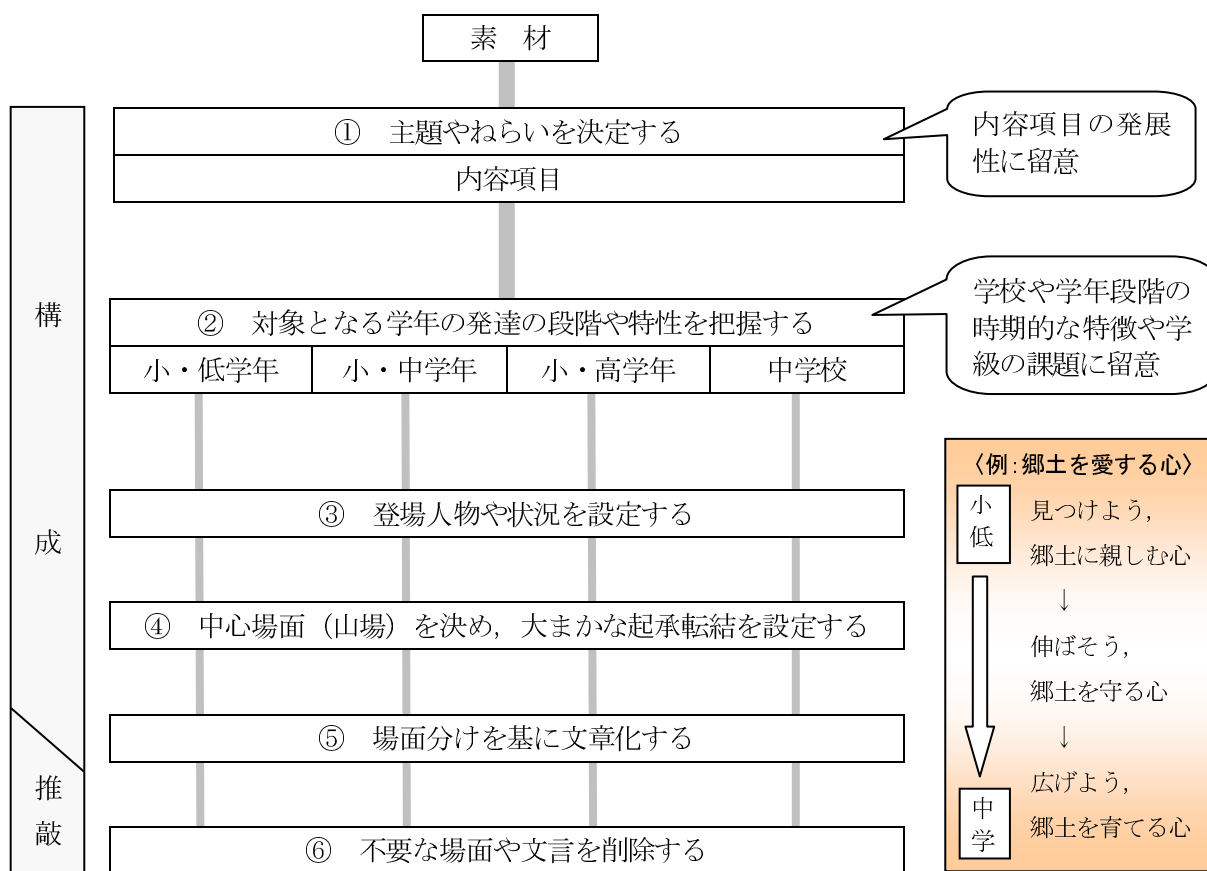
また、中学校は教科担任制であり、複数の教師が生徒の教科等の指導にかかわることを生かして、学年や学校において協力し合う指導体制による展開を重視する。

(2) 発達の段階に応じた教材開発の考え方

ア 基本型による場合



イ 同一素材，同一主題による場合



同一素材，同一主題の開発により期待される効果

- 教員の指導力の向上
 - ・ 内容項目の学年段階ごとの発展性を十分考慮した指導が一層行える。
 - ・ 指導上の課題を児童生徒の側から具体的にとらえた指導が一層行える。
- 市町及び校内の研修の充実
 - ・ 同一素材，同一主題とすることで，複数の教員による資料の多様な見方・考え方を交流することができ，開発のポイントが一層明確になる。 など

【発達の段階や学年・学級の課題を考慮した構成・推敲における留意点】

〈構成〉

- 場面はできる限り単純に展開するよう留意すること。下学年ほど登場人物が多すぎたり，複雑な展開になったりすると，容易に理解できない内容になる場合がある。
- 児童生徒の生活の場や地域（郷土）のとらえは年齢とともに広がっていくことに留意すること。児童生徒の考えることのできる範囲で指導できるよう配慮することが大切である。
- 挿絵や写真を効果的に配することも重要である。（下学年ほど視覚化に留意したい。）

〈推敲〉

- 叙述は児童生徒にとって理解しやすいものになるよう工夫する。（語彙，抽象度，漢字，文章の長さ等，1学年程度は難度を下げるように配慮することも考えられる。）
- 専門性のあるものなどについては，注釈や解説を付すこと。 など

(3) 発達の段階に応じた教材開発の実例 ～「ホタル」を素材として～

素材は、各市町の実態を考慮し、県内幅広く生息しかつなじみのある「ホタル」とした。

また、発達の段階の違いを明確にするため、上記(2)イの考え方を基に、開発を行った。

《教材開発の構想》

	小 学 校			中 学 校
	低 学 年	中 学 年	高 学 年	
資料名	素材：「ホタル」			
	ほたるのげんちゃん	ぼくはこん虫はかせ	きれいな川のままで	蛍の灯（ともしび）
内容項目	3－（２）自然愛護			
	身近な自然に親しみ、動植物に優しい心で接する。	自然のすばらしさや不思議さに感動し、自然や動植物を大切にする。	自然の偉大さを知り、自然環境を大切にする。	自然を愛護し、美しいものに感動する豊かな心を持ち、人間の力を越えたものに対する畏敬の念を深める。
段階の特徴	・自己中心性がある ・教師や保護者の判断に依存する。 ・善悪の判断ができるようになる。 ・動植物などへも心で語りかけられる。	・問題解決能力の発達に伴い、学習活動に一層興味を示す。 ・社会的な活動能力が広がり、自然等への関心が増す。 ・不思議さやすばらしさに感動する心が一層はぐくまれる。	・属している集団や社会における自分の役割や責任などについての自覚が深まっていく。 ・相手の身になって人の心を思いやる共感能力が発達する。 ・環境保護などに目を向けるとともに、人間の力を越えたものへの畏敬の念も培われてくる。	・自然や人間の力を越えたものに対して、美しさや神秘さを感じ、自然の中で癒される自己に気付くようになる。 ・眼前の事柄をただ表面的にとらえるだけでなく、その人間にとっての深い意味を感得することもできる。
判断基準	教師、保護者	友だち	社会	
教科等との関連	<u>生活科</u> ・身近な自然との触れ合い（飼育栽培）など	<u>社会科</u> ・地域の人々の健康な生活 <u>理科</u> ・昆虫と植物 ・身近な自然の観察など	<u>社会科</u> ・わが国の国土の自然 <u>理科</u> ・生物と環境 <u>総合的な学習の時間</u> ・課題「環境」など	<u>社会科</u> ・自然環境 <u>理科</u> ・自然と人間 <u>家庭科</u> ・身近な消費生活と環境 <u>総合的な学習の時間</u> ・課題「環境」など
作成の要点	・空想的な想像の世界に浸らせる。 ・大人の判断を示し、自己を見つめさせる。	・自然への親しみをもたらせる。 ・教科の学習との関連を意識させる。 ・友だちとのかかわりをつくる。	・共感能力を育てる。 ・人間と自然との共存の在り方を考えさせる。 ・自分のできる範囲で自然環境をよくしようとする態度を育ませる。	・美的な情操や感動する心を育てる。 ・自然を愛し、護ることといった環境保全の視点を入れる。
その他	・発達の段階に応じて、地域（郷土）のとらえの広がりを把握する。（例：学校区→市町→県） ・発達の段階に応じて、エピソードの取り上げ方（焦点化）、中心場面やねらいとする内容項目も変わることにも留意する。 例えば、今回は「自然愛護」を同一のねらいとして作成したが、他にも「郷土愛」「集団の一員としての自覚」「愛校心」や「勇気」（ホタルを主人公にした場合）なども考えられる。 ・発達の段階に応じて、行動のもとになる「心」、事実ではなく「人生の真実」を見ていく。 ・発達の段階に応じて、語彙、抽象度、文章量（情報量）等を配慮する。 ※ 各学年、学級の児童生徒の実態に即して考えることは言うまでもない。			

《開発教材例》

〔小学校低学年〕

「ほたるのげんちゃん」

「やっとそとに出られたぞ。」

すずしいなつによるでした。さなぎになり、二か月ほど土の中ですごしたほたるたちが、やっとせい虫になって、そとに出てきたのです。

「いままで、見たことのないせかいだ。」

じゆうにとびまわれるよろこびでいっぱい、ほたるのげんちゃん。うつくしいひかりをぴかぴかせせながら、げん気にとびまわっていました。

そこへ、ともだちのさとちゃんが、やってきていいました。

「あっちになかまがいるのよ。いってみましょう。」

むこうでは、たくさんのほたるのひかりが、ぴかぴかとかがやいています。

「よし、いってみよう。」

げんちゃんは、すぐにこたえました。

げんちゃんとさとちゃんが、なかまのところはいこうとしたときです。

「バシッ。」

小学生ぐらいの男の子が、二ひきをあみでつかまえました。男の子は、ほたるをつかまえにきていたのです。ほたるをつかまえた男の子は、大はしやぎでした。

男の子につかまったげんちゃんとさとちゃんは、せまい虫かごの中に入れられてしまいました。

「どうしよう、つかまってしまったわ。」

「せまくてくるしいな。」

げんちゃんは、あまりのおそろしさにぶるぶるふるえていました。

さとちゃんも、げんちゃんのとおりで、ふるえながらいいます。



そのとき、男の子のおかあさんでしょうか、やさしいこえがきこえてきました。

「かわいそうでしょ。にがしてあげなさい。ほたるのおかあさんも、きっとしんぱいしているわ。」

「でも、・・・・・・・・・・」

すこしたって虫かごのまどがあきました。げんちゃんとさとちゃんは、いそいで外に出ました。そしてなかまのところにとんでいきました。

「よかったね。」

「よかったね。」

ほたるのひかりが、つよくよわく、まるでおしゃべりをしているかのように、ぴかぴかがやいていました。



「ぼくはこん虫はかせ」

ひろしは、理科の時間が大好きです。
こん虫の学習が始まった最初の時間、クラスの友だちは、ひろしがこん虫のことをよく知っているの、びっくりしました。

それから、みんながひろしのことを、「こん虫はかせ」と呼ぶようになりました。
ひろしは、みんなにほめられているようで、うれしくなりました。

ある日の理科の時間のことです。

ホタルのことが話題になりました。

ひろしは、ホタルをまだ一度も見たことがありません。

「ホタルは、光るんだよ。」

と、友だちのあきらが教えてくれました。

「こん虫が光るのか、ふしぎだなあ。見てみたいなあ。」

ひろしは、ホタルを見たくてたまらなくなりました。

「じゃあ、ぼくの家においでよ。近くの川でホタルが見られるよ。」

今ばんいっしょに見に行こう。」

あきらがさそってくれました。

ひろしは、わくわくしながら夜になるのを待ちました。



夜になりました。あきらのお父さんが二人をホタルを見につれていってくれました。

遠くから川の水の流れる音が聞こえてきます。

ひろしとあきは、川の音のする方へ歩いていきました。

川の方では、たくさんのホタルがゆっくりと光ったり消えたりしていました。

「うわあ・・・・。」

ひろしは、ホタルに見とれてしまいました。

「ほら、あっちにも、もっとたくさんホタルがいるよ。」

あきらが指さす方を見ると、川いっぱいホタルが光っています。

「いいなあ、かっこいいなあ。部屋の中でも光って、きれいだろうなあ。」

そう思うと、ホタルがほしくてたまらなくなりました。ひろしは、ホタルを一びきつかまえると、手のひらにつつまこみました。

「ひろし君、ホタルを初めて見た感想はどうだい。」

あきらのお父さんが話しかけてきました。



「あんまりきれいなんでびっくりしました。」

「こん虫はかせのひろし君でもびっくりするくらいすごいかい？」

「ぼく、ホタルを見たのは初めてなんです。ぼくの家近くにもいればいいのになあ。」

「ホタルはね、どこにでも住めるわけじゃないんだよ。きれいな水のところにしか住めないんだ。よう虫は、九か月以上も水の中ですごす。さなぎになると今度は土の中で二か月もすごすんだ。やっと成虫になってもね、つゆを少しずつ飲みながら、たった十日間しか生きていけないんだよ。そうしてみると、ホタルの光もちがって見えるだろう。」

あきらのお父さんの話を聞いたひろしは、はっとして、自分の手を見つめました。



「よし、今度こそ、本当のこん虫はかせになるぞ。」

ひろしは、手のひらをそっとひらき、ホタルをはなしてやりました。それから、ひろしは、ゆっくりと光りながら川の方へとんでいくホタルを、じっと見守りました。



Q：ホタルについて教えてください。

A：広く世界に分布しており、およそ 2000 種が知られている。特にアジア、アメリカの熱帯地域に種類が多く、日本にはこのうち 40 種余りが産する。代表的な日本のホタルはゲンジボタルとヘイケボタルであるが、体長がそれぞれおよそ 15 ミリメートルと 8 ミリメートルと違う。そのほか前胸背面中央の黒い縦条がヘイケボタルでは太いが、ゲンジボタルでは細くて中央で横に突き出ている。分布もゲンジボタルが本州から九州と対馬、ヘイケボタルが北海道から九州と東シベリアなどと異なる。ホタルといえば一般には発光するものと思われているが、ほとんど光らない種が多く、日本産でよく光るのは 10 種ほどである。光の色は普通黄色ないし黄緑色、ときに橙色である。



「きれいな川のままで」



ぼくの学校のそばには、川が流れています。その川には、フナやトンボ、川えびなどの生き物がたくさんいます。夏にはホタルがおしりの先を光らせて、川のまわりをとび回ります。

夏休みが近づいたころ、田中さんというおじいさんが学校にやって来ました。川でホタルの卵をみつけたので、子どもたちに見せてほしいということでした。ぼくは、川へよく遊びに行きますが、ホタルの卵を見たことがありません。田中さんが、水そうを持って教室に入ってきた時、わくわくしてきました。

「この水ごけに、卵がついとるよ。」

と田中さんが教えてくれました。でも、卵がどこにあるのかなかなか見つけることができません。田中さんが卵を指さしてくれたので、やっと見つけることができました。とても小さな卵がいくつついています。すると、田中さんが、

「一ヶ月ぐらいしたら卵がかえる。そうしたら川へ放そうと思っているんじやよ。」

とうれしそうに教えてくれました。

夏休みも終わりが近づいたある日、ぼくは、川へ魚をとりに行きました。でも、なかなかあみにかかりません。だんだんあせをかいてきて、のどがかわいたので、川ぎしの岩にすわってジュースを飲んでいたら、ぼくのそばに魚のむれが近づいて来ました。さっとあみを取ってつかまえようとしたのですが、にげられてしまいました。ぼくは、くやしくて魚のむれにむかってジュースの缶を投げてしまいました。

夕方になりましたが、なんとか魚をつかまえたくて、あみを持って川をのぞいていると、

「ぼく、何をつかまえているんだい。」

と後ろから声がしました。ふりむくと、夏休み前にホタルの卵を見せてくれた田中さんが立っていました。手には、ゴミが入ったビニール袋を持っています。

「この川には、生き物がたくさんおるじやろう。前、みんなに見せたホタルの卵もこの川で見つけたんじや。」

「へえ。そうだったの。」

「でも、ちょっとするとゴミがふえてしまうんじや。それに、心無い人のごみの投げ捨てのせいで、この川からホタルがいなくなってしまったこともあったんじや。」

「えっ・・・。」

田中さんは再びゴミを見つけては、腰をかがめてひろいはじめました。確かによくみると、ジュースの缶など川辺のあちらこちらにごみが落ちています。ぼくは、さっき自分が投げ捨て



たジュースの缶のあたりをとっさに見回しました。そして、ぼくと田中さんのあいだにある岩かげに、ジュースの缶があるのを見つけました。

田中さんはまだ気づいていません。ぼくは、田中さんが腰をかがめて他のゴミをひろっているあいだに、ジュースの缶をすばやくひろい上げ、ズボンのうしろポケットに入れました。

ゴミをひろって腰をあげた田中さんが、ぼくの方をむいて言いました。

「そうそう、この前みんなに見せたホタルの卵がかえりはじめたんじゃよ。来週あたり川へ放したいんじゃ。ホタルにとって、この川が一番住みやすいからのう。君も手伝ってくれないかい。」

「はい。」

ぼくは、大きくうなずきました。



Q：ホタルの成育期間について教えてください。

A：水生のゲンジボタルでは卵から成虫まで普通1年、ときに2年以上を要する。

一例では、成虫（6月中旬）



産卵（6月下旬）：草の根際（ねぎわ）やコケ、または湿った土上や土中などに産卵。卵は一般に黄白色で球形。



孵化（7月上旬）



老熟幼虫（翌年5月上旬）



蛹（5月中旬）



成虫 となっている。

成虫期間は10～15日前後である。



ともしび
「蛍の 灯」

ほ ほ ほたるこい あっちのみずは にがいぞ
こっちのみずは あまいぞ ほ ほ ほたるこい

思い出せば、物心ついた頃からそうだった。
初夏になると一年に一度、谷あいの棚田で野良仕事をして帰ってきた父が
「今日は珍しいものを持って返ったよ。」「電気を消してごらん。」
と大事そうに手渡してくれたもの。
それが、ホタルぶくろの花に入った蛍だった。

電気を消して、しばらくするとほのかにホタルぶくろの花が灯った。
「うわあ〜。」
ほおづえ
頬杖をついて見ている顔が自然にほころんだ。



三人兄妹の私が一番にそれをもつことはなかったが、二人が見飽きた頃、やっと手にすることができた。ずっとそれを持って見ていたかったが、私が持つ頃になるときまって
「自然に還してあげなさい。」
と父は言った。父によると蛍は一、二週間ぐらいしか生きられず、幼虫の頃は餌であるカワニナがいないと大きくなれない。カワニナは川遊びでよく集めていたから、そんなに珍しいものではなかったが父の話は妙に説得力があった。
仕方なく、私は母と蛍の入ったホタルぶくろを持って裏庭に出ていった。夜空に蛍を放つ、一瞬の寂しさと満足感を幼心に味わっていた。

それから十数年経ち、自然豊かな県北に就職した。広島県内で一番南の島で生活していた私が、島根県境の町で生活することになった。新しい環境・人間関係になかなか慣れず、四苦八苦していた。そんな六月のある日、考え事をしながら車を走らせていると暗闇に一つの
あかり
灯。

「おや？」
その灯のあたりをじっと目を凝らして見ていると、「ああ！」と思わず声漏れた。

「お帰り。夏が来るよ。」
とでも言わんばかりに、すいーっと夜空に灯が灯っては消え灯っては消えた。その灯を追っていくと、また別の灯が灯っている。幼い頃に手元を離れ、夜空に舞ったあの灯だ。



これまでの年月が走馬灯のように駆け巡った。なんだかわからないけれど明日も頑張ろうという気持ちにさせてもらった。

気が付けば県北での生活が島での生活よりも長くなっていた。

そんなある日、夫がまだ幼い息子に嬉しそうに「蛍を知っているか？夜になったらいっぱい
の蛍を見に行こうね。」と誘っている。

夕食を済ませ、街灯一つない真っ暗な外へ出る。ゲーコ、ゲーコ蛙の大合唱。息子と私を車
に乗せ、車を走らせる。

「うわあ〜。スゴイ!」「見て。見て。」

という声に振り向くと、真っ暗やみの田んぼ脇の水路に、これまで見たことのない無数の蛍。

学生時代、広島市内で生活していたので美しいイルミネーションは見慣れていた私だったが、思わず息を飲むほどの美しさ。無意識のうちに「うわあ〜。キレイ〜!」と声が出ていた。

「乱舞」とは、このことか。生まれて初めて実感した。圧倒される蛍の舞い。

愛おしい息子が大きくなった時、この光景を覚えているだろうか？

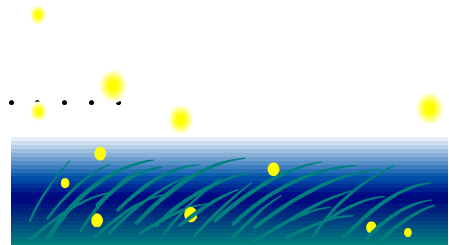
たとえ覚えていなくても、毎年この時期に見られるのだろうか？

そして、まだこの美しさを見たことがない島に住む幼な馴染みにも見せてやりたい。

ほ ほ ほたるこい あっちのみずは にがいぞ

こっちのみずは あまいぞ ほ ほ ほたるこい

ともしび
蛍の 灯 いつまでも



Q：ホタルぶくろってどんな花ですか。

A：ホタルぶくろ（蛍袋）とは、キキョウ科の
多年草で初夏に大きな釣鐘上の花を咲か
せる。花は淡紅紫色
または白色をしてい
る。



作成協力者一覧

○御指導いただいた先生方

所属名・職名	氏 名	備考
文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官	谷田 増幸	
関西学院大学大学院文学研究科教授	横山 利弘	◎
大阪教育大学教育学部教授	藤永 芳純	
畿央大学教育学部教授	島 恒生	◎
広島大学大学院教育学研究科教授	朝倉 淳	◎
広島大学大学院教育学研究科准教授	鈴木由美子	
愛知県知多郡美浜町立野間小学校教諭	柴田八重子	

※ ◎印は作成委員

○広島県道徳教育指導資料作成委員会

所属名・職名	氏 名	備考
指導第三課長	藤田美佐子	
指導第三課課長代理	安原 敏光	
県立教育センター企画部指導主事	貞盛 倫子	
廿日市市立宮園小学校教諭	津秋 智子	○
安芸高田市立高宮中学校教諭	永井 博美	○
熊野町立熊野第四小学校教諭	田中 敬子	○
三原市立中之町小学校教諭	溝上 孝弘	○

※ ○印は分野別作成部会員代表

○広島県道徳教育指導資料作成委員会分野別作成部会員

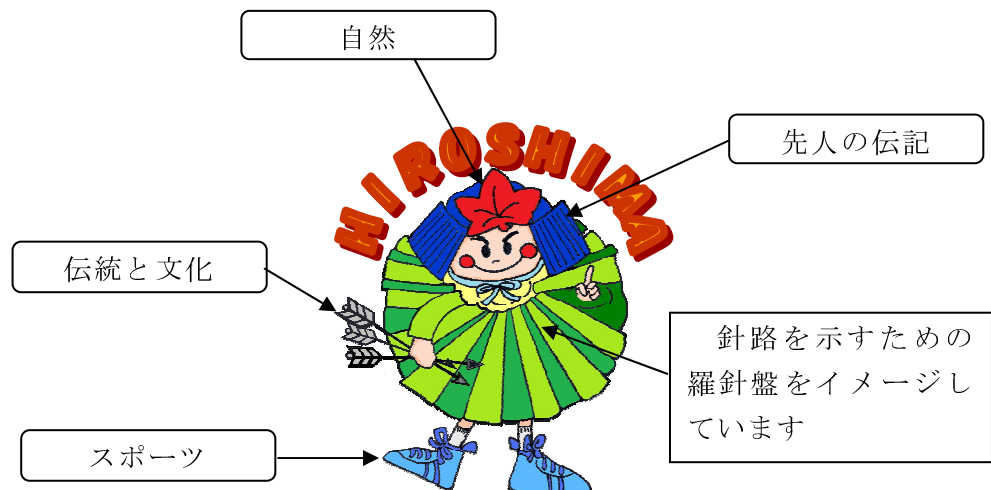
所属名・職名	氏 名	分野
呉市立川尻小学校教諭	奥本 雅幸	先人の伝記
大竹市立小方小学校教諭	奥田 健	
坂町立横浜小学校教諭	福田ゆりえ	
尾道市立重井中学校教諭	松永美代子	
府中市立国府小学校教諭	花田 三恵	
安芸太田町立戸河内中学校教諭	今田富士男	自然
神石高原町立豊松小学校教諭	松葉 伸恵	
三次市立田幸小学校教諭	小原 智穂	
庄原市立東小学校教諭	石村 誠	
福山市立金江小学校教諭	石中美和子	伝統と文化
竹原市立竹原小学校教諭	渡辺住味子	
東広島市立高屋西小学校教諭	寺川 博人	
府中町立府中緑ヶ丘中学校教諭	清野由美香	
大崎上島町立東野小学校教諭	中島 桂子	
北広島町立八重東小学校教諭	新川 靖	
広島市立瀬野川中学校教諭	鍵山 員子	スポーツ
江田島市立高田小学校教諭	中下 正美	
海田町立海田小学校教諭	税所 正紀	
世羅町立大田小学校教諭	重森恵美子	

○事務局

所属名・職名	氏 名
指導第三課課長補佐（兼）道徳教育係長	市場 一也
指導第三課指導主事	播磨 寛宗
指導第三課指導主事	蓮浦 顕達

引用・参考文献

- ・文部科学省（平成20年）「小学校学習指導要領」
- ・文部科学省（平成20年）「中学校学習指導要領」
- ・文部科学省（平成20年）「小学校学習指導要領解説 道徳編」
- ・文部科学省（平成20年）「中学校学習指導要領解説 道徳編」
- ・文部科学省（平成21年）「子どもの徳育の充実に向けた在り方について（報告）」
- ・文部省（昭和62年）「小学校 郷土を愛する心を育てる指導」
- ・文部省（昭和62年）「中学校 郷土を愛する心を育てる指導」
- ・文部省（平成11年）道徳教育推進指導資料（指導の手引）7「小学校 伝統や文化を大切に作る心を育てる」
- ・文部科学省「小学校 心に響き、共に未来を開く道徳教育の展開」
- ・文部科学省「中学校 心に響き、共に未来を開く道徳教育の展開」
- ・文部科学省「こころのノート 小学校1・2年 平成21年度改訂版」
- ・文部科学省「心のノート 小学校3・4年 平成21年度改訂版」
- ・文部科学省「心のノート 小学校5・6年 平成21年度改訂版」
- ・文部科学省「心のノート 中学校 平成21年度改訂版」
- ・文部科学省（平成21年）「心のノート『小学校 活用のために』 平成21年度改訂版」
- ・文部科学省（平成21年）「心のノート『中学校 活用のために』 平成21年度改訂版」
- ・瀬戸真（編）（昭和61年）「新道徳教育実践講座・1 自己を見つめる」教育開発研究所
- ・文化庁Webサイト（<http://www.bunka.go.jp/chosakuken/index.html>）



地域教材開発の針路を示し、完成までの案内をするナビゲーター

